

---

# ひきこもり×ひきこもり

部屋内妄想

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひきこもり×ひきこもり

### 【Nコード】

N4106P

### 【作者名】

部屋内妄想

### 【あらすじ】

ひきこもり二人の会話と日常  
一話完結、不定期更新

## ひきこもり×ひきこもり

空は晴れ渡り、太陽は高い位置にある。

なのに、その部屋は暗かった。

分厚いカーテンに陽は遮られ、六畳の部屋は、古めかしい小さなブラウン管テレビが放つ光しかなかった。

テレビ画面では、筋骨隆々な男と華奢な女性が向かい合う形で闘っていた。2D格闘アクションゲームである。テレビの前では二人が座り、不気味なテレビの光に照らされ、画面に集中している。

「暇」

ツマらなさそうに一人が言った。

女性の声。

手元では目に止まらぬ速さで、コントローラーのボタンを繰り返して、マツチヨ男を動かしている。

「ああ」

一人が寝ぼけているような力のない声で答える。

男性の声。

手元ではカチカチではなくカカカとボタンを押す音がしている。

画面では華奢な女性が宙に舞うマツチヨに、攻撃を繰り返している。

「何かない？」

女性が聞いた。何かとは『暇を潰せる物』だと男性は考えなくとも分かる。それほどまで女性との時間は長い。

「ネットゲーはどうした」

男性が答えた。ネットゲームの略である。女性は一時期は寝る間を惜しんで勤しんでいたことがある。

「飽きた」

「そか」

画面ではマツチヨが超必殺技を繰り返して華奢な女性が投げられていた。落ちた瞬間甲高い悲鳴を挙げ、マツチヨは筋肉アピールをし、

“YOU WIN”と文字が出ていた。

勝利した女性は、それでもツマらなさそうにコントローラーを床に投げだし、後ろに倒れた。頭の位置にはクッションが置いてある。クッションからはみ出した長い髪が床に広がった。

男性はゲーム機の電源を消し、テレビも消して、部屋は昼間ながら夜のように真っ暗になる。

「ねえ、どっか出掛ける？」

女性は天井を眺めたまま呟くように言った。

男性はベッドに半身を床に投げ出すようにもたれ掛かり、

「いったいどこにだよ」

まるでジョークでも聞くように鼻で笑う。

「ん、遊園地……とか」

男性は更に鼻で笑う。

「それは俺たちには最悪な場所だな」

「だね」

女性もフフッと笑う。表情は儚げになり、虚空を見るかのように天井のシミを見つめる。

「やっぱり、ひきこもりには部屋が一番だしね」

二人はひきこもりである。

男の名を水澤かなた。

女の名を相原みずき。

家は古い町並みが残る住宅街にあり、隣同士。近所付き合いも良好で、二人は物心付く前より双子のように四六時中いつしよにいる仲であった。

互いに人付き合いというのが苦手なため、学校では『あれ？こ

んな奴いたっけ?』と、時が過ぎて卒業アルバムを懐かしむように見ている同級生に言われてしまうくらい、目立たない存在だった。

友人もできず、半ば必然的に二人で遊ぶしかなく、もっぱら部屋でゲームやら、インドアな趣味で過ごしていた。

最初にひきこもりになったのはかなただった。学校に行かなくなり、家からも出ることはなくなった。それでも、みずきは部屋に来て、いつも通りにゲームで遊んだ。かなたもみずきと遊ぶときは普段通りに楽しく過ごせた。

二年後。みずきもまるでかなたのひきこもりが伝染したかのように、不登校になりひきこもりになった。

それでも二人の関係は変わらず。

むしろ、仲間意識、唯一の理解者という存在となっていた。

これは、そんな二人がどうでもいい会話を繰り返す。

プロットも何もないお話である。

## ひきこもり×事件

水澤家と相原家は互いに築五十年はくだらない古い家屋である。家の周囲は大人一人分ほどの高さの塀で覆われてるが、一ヶ所、家の側面に、互いの家を繋ぐ扉が設けられている。

みずきとあなたは、そこを秘密の通路のように利用して家を行き来している。何より、通りから死角になり、人目に付かないのが使う理由だ。

今日も、みずきがそこを通り、水澤家の勝手口より入る。某磯野家で三河屋が注文伺いに訪れるようなそこは、年中無休で鍵は掛かっておらず、いつでも出入り自由だ。

みずきはあなた母にボソリと挨拶をして台所を通り、二階のあなたの部屋に入る。ノックはなかった。

部屋はカーテンが閉め切られ、真っ暗だ。この部屋は基本、四六時中閉められている。みずきがベッドに目を向けると、布団から顔だけだし、寝る姿勢で、携帯電話に繋がったイヤホンで音楽を聴く半覚醒なあなたの姿があった。

あなたは、みずきに気づく様子はなく、目を閉じて音楽に陶醉している。みずきは枕元に近づくと、携帯からイヤホンを外した。

『あるー晴れた日のことー』

部屋内に某アニソンが流れ、あなたは目を開け、みずきを視認すると、快適な起床を妨げられたことに、不機嫌な表情をする。

あなたは声優が歌う曲を止め、ゆっくりと起き上がり、寝ぼけ眼をこする。

「何だよ朝っぱらから」

「ニュース」

真面目な顔でみずきは言って、テレビの電源を付ける。部屋はテレビが放つ光でぼんやりと明るくなる。

とりあえず、あなたは姿勢を正し、ベッドに座り、みずきはクツ

シヨンを胸に抱えて床に女の子座りをする。あなたは携帯画面の時刻を見ると、七時五十九分。テレビでは星座占いをランクにして流れている。

そして、朝の情報番組が始まった。

二人は画面を注視する……が、

「最近の就職事情がどうかしたのか？ 俺らには無縁過ぎる話だと思うが」

「……違う。この次」

画面ではメインキャスターが自分が気になるニュースを語っている。元々ニュース番組に興味を示さない二人には、最近のバラエティ番組のようにツマらない話である。

深くは聞かず、あなたは携帯をイジリ、みずきは適当な漫画を手にとってパラパラとめくり、しばらくして今日のトップニュースが始まった。何となく、半ば確信的にあなたは何のニュースかは思いあたってはいた。みずきが気になるような ひきこもりが気になるニュースはコレしかない。

『悲惨な事件です』

と、前置きして伝えたのは、引きこもりが家族を殺傷した事件。数人死亡したものだ。みずきとあなたは特に表情を変えることなく、見入っている。

「長いな」

犯人のひきこもり年数を見てあなたが呟く。

事件の概要から始まり、近所の話、加害者の同級生の話、加害者の人生経路などを経て、画面はスタジオに戻る。

キャスター、コメンテーターがもっともらしい憶測を述べた後、次のニュースに移る。有名人の離婚ネタ。

みずきがテレビの電源を消して、部屋に暗闇に戻る。

「的外れな憶測だったね」

「あれが普通人から見た、一般的な考えだろ」

みずきはクッションを頭に敷き、寝転がる。かなたはさつさと顔を洗いに行きたかったが、壁に背を預け、付き合う姿勢を見せている。

「これで、ひきこもりのイメージが悪くなるかな」

「まあ、そうだろうな」

「別にひきこもりだからって、誰でも事件起こす訳じゃないのに」

「寧ろ、事件起こさない奴の方が多い気もするが」

「外出ないしね。家族には特に今以上の迷惑は掛けられないし……」

「結局、殺人者の気持ちは理解できないだろ。ヒキだろうがなかるうが」

「だね」

「なあ」

「ん？」

「朝っぱらからニュース見せる為に来たのか？」

「うん。かなた知らないと思って」

「そうだが、俺は新聞見るだけで十分なんだが」

「……そか」

「ま、どんな報道されるかは気にはなっただと思う」

「私もネットゲのヒキ仲間から、朝に教えて貰ったの」

「ネットゲ飽きたんじゃ？」

「ん。そだけど、メール着たから。他にやることもないし」

「で、寝たのか？」

「ううん。……眠い」

「それ、飽きてないだろ」

「……スー」

「………ほどほどにしとけ」

かなたはタオルケットをみずきに掛け、顔を洗いに部屋を出た。





## ひきこもり×ネットゲ

ひきこもりである、水澤かなたは携帯電話を持っている。何世代か前の古い型だが、音楽などをダウンロードし、聴いたりするのに利用していた。

尚、“電話”としての役割は皆無に等しい。アドレス帳に登録されているのは、幼なじみで同じひきこもりで隣に住む、相原みずきのPCのメールアドレスと、両親、みずきの両親と妹、掲示板で知り合ったメル友ぐらいである。

一方、みずきはパソコンを持っている。父親が新型パソコンに買い換えた時に譲り受けた物だが、汎用性が高く、ネットゲーム等で楽しんだりしている。

ちなみに、みずきの部屋にはテレビやゲームが無く、パソコンが置かれるまでは殺風景な部屋であった。なので、以前はみずきが、ゲーム機があるかなたの部屋に入り浸る事が殆どであった。今はかなたがネットを観るために、みずきの部屋に居ることも増えてきている。携帯でのネット利用は何かと不便だ。特に動画関係。

宝石を散りばめたような星々が夜空に煌めいている時刻。ドラもんが放送中な時間帯。

かなたは辺りを警戒するように顔だけを出して視線を動かしながら、勝手口から出てきて、水澤家と相原家を繋ぐ扉を開け、相原家の敷地に入る。

そして相原家の勝手口を開け、入っていく。物音を立てぬ足取りと、人目に付かぬように警戒する姿はさながら空き巣のようであった。

持たされたカットフルーツをみずきの母親に渡して、かなたは階段を上がり、みずきの部屋へと向かう。本来はフルーツを持ってくように頼まれたただけだが、部屋にも訪れるのが一連の流れのように

染み着いている。

さすがに女性の部屋なので、あなたはノックをする。過去にノック無しで部屋に入って、着替え現場に遭遇したというハプニングはないが、マナーである。

ちなみに、逆にかあなたの着替え現場をみずきが目撃したことはあるが、互いに何事もなかったように時間は流れた。

返事はないが構わず、あなたはドアを開ける。元よりみずきは滅多に返事をしない。入るなという時だけ、言葉が返ってくる。

みずきの部屋は、あなたの部屋と同じくらいの広さだが、テレビやベッドがない分僅かながら広く見える。暗さを好み、電灯を点けない主義のかたと違い、部屋は白熱灯で明るかった。

みずきはあなたを一瞥した後、机上に置かれたパソコンの液晶モニターに向き直る。

あなたは無言で肩越しに画面をのぞき込むと、頭上に名前を浮かべたキャラクター達が、一匹の魔物に襲いかかっている姿が映し出されていた。画面右下には『うはっwwおkww』などの難解な用語が流れるウィンドウがあった。MMORPGというやつで、いわゆるオンラインゲームである。

単調に魔物を倒す姿を尻目に、あなたは本棚から適当なマンガを手に取り、壁際に畳まれた布団をソファア代わりにし、読み始めた。しばし、部屋から人の声が消えていた。

マウスがカチカチと鳴る。

キーボードがリズムよくカタカタと打たれ。

ページをめくる度に紙が擦れる音が聞こえ。

液晶モニターのスピーカーからは重苦しいBGMと、効果音が断続的に流れていた。

『エクスカリバーオンライン』

壮大な世界観を元にしたそのゲームは、全国のネットゲーマーが一拳に集うMMORPGである。無職無収入のみずきがプレイして

る事でお分かりだろうが、基本プレイ無料だ。しかし、その出来は有料に勝るとも劣らない。戦闘システムもさることながら、まるで仮想のファンタジー世界で生活してるような感覚に囚われるシステムも盛りだくさんで、ハマると抜け出せず、幾多のネットゲーム廃人を産みだしている問題作だ。

ちなみに現在画面に映っているのは、とある狩り場で、無限に湧き出るモンスターを倒してレベル上げをしている場面だ。

六人のパーティで各自、戦士や魔法使いや僧侶とバランスが良い。モンスターを苦もなく狩っているのだが、画面に派手さはなく単調だと誰の目も分かる。だが、それを補うかのようにメンバーは絶えず会話で盛り上がっている。

くわた『昨日の、おんけい！ 誰か観た？』

やまくら『見たお』

しのづか『フレアいきま』

なかはた『こつちじゃはいらねーww』

はら『テラワロスww』

ミズキ『見てない！。忘れてた』

くわた『ミカエルたんには萌えたww可愛すぎw』

しのづか『メテオいきま』

やまくら『俺はミュエルがよかたwツンデレ萌ユルスww』

なかはた『こつちじゃはいらねーww』

はら『パネエww』

くわた『体力がwミズキたん回復おねー』

ミズキ『うい』

くわた『ありー』

「何で、ドラ エの復活の呪文のような名前の奴ばかりなんだ？」

漫画を読み終え、暇になったあなたが画面を見て聞いた。

「たまたま思い付いたからじゃない？」

「誰が？」

たまたま、頭に浮かんだんです。

「この人達は全員ヒキなのか？」

みずきはかなたに振り返ることなく画面を見たまま、

「多分ね。自己申告だけど、いる時間的にもそうだと思う」

どのキャラも四六時中ネット内で活動してるかと思うくらい、同じように昼夜問わず活動したりするみずきが接続してるときに居ることが多い。

「全員女キャラだが、中身はどうなんだ？」

「男」

「なるほど」

みずきも含めパーティは全員女キャラで一見すると華やかだ。このゲームは装備品によってキャラの外見が変わるのだが、中身が男と言われたキャラは何故だか露出度が高い。ミズキはローブを着ているが、他はビキニアーマやら、ミニスカやらである。

「これ、楽しいのか？」

何気なく、延々とモンスターを倒す姿を見て放った、かなたの疑問にみずきの眉がピクリと動く。

「ん、まあ……ね」

楽しいか。それはみずきにも分からずにいた。普通の一人用RPGとは違い、いくらモンスターを倒そうが一レベル上げるのに一日は当たり前。明確なストーリーがあるでもなく、ただ強くなって、レアアイテムを追い求めたりして、結局は明確終わり、エンディングがない。

「そか」

言って、かなたは黙って画面を見続けている。

「でも、こうしてリアルタイムに会話しながらするのは楽しいかな」  
何も言わないその姿勢に、みずきはかなたに面白さを伝えたくな

った。

今まであなたは今のよう、みずきがプレイしてるのを観ることはあるが、決して自らすることはなかった。以前それとなく勧めてみたが『別にいい』と一蹴。

ネトゲ廃人なる言葉もある今、ネトゲに興味を示さないことは良いことだともみずきは思う。みずきも最近は起動する時間も減ってきたが、まだ完全に離れてはいない。なのに、あなたは全く興味を示さないのが悔しかった。

「そうなのか」

「あと、レアアイテムとか手に入れば嬉しいし」

「確かに、それは嬉しいかもな。はぐれメルからしあわせのくつを手に入れた時とかみたいなのあーの感じが」

「それにイベントなんかもよくあるし」

エクスカリバーオンラインでは季節柄の企画イベントはもちろん、現実の祝日にちなんだものから、ゲームの世界観に合わせたもので、最低、週に一回はイベントがある。どれも手抜きという印象も受けず運営の努力が窺える。

「へえ」

と、あなたの言葉には感嘆の『か』の字もないような何もこもつてない反応だった。ひきこもってはいるが。

はら『誰がうまいこといえとwww』

なかはた『はら急にどしたん？w』

「ねえ、あなた少し変わってくれる？」

「ん？」

言いながら、みずきはキーボードを慣れた手付きでブラインドタッチで打つ。

ミズキ『ちよつと相方に変わります。三十分くらい』

チャット画面に出されたミズキの発言を見てあなたは、

「相方？」

と、怪訝な表情を見せる。

「お風呂入ってくるから。後よろしく」

みずきはクルンと椅子を回転させて立ち上がり、タンスから着替えを取り出して、部屋から出ていった。

みずきの家は、時間内に風呂に入らないと栓を抜かれ、再度沸かすことも禁じられている。

あなたは、ふう……とため息を吐いて、まだ温もりが残るみずきの椅子に座り、画面に向きあう。操作はみずきを見ていたため、すんなりと回復魔法を使って画面の中のミズキは支援を再開する。

くわた『ミズキたん？ それとも相方なん？w』

キーボードを人差し指でぎこちなくあなたは打つ。

ミズキ『みずきは今いないけど、相方ってなんなんすか？』

しのづか『ミズキに聞いたことあって、幼なじみのヒキだとか』

はら『テラ萌ユルスwww』

なかはた『幼なじみ萌えww良環境ウラヤマシスw』

やまくら『で、ミズキたんは今何を？w』

ミズキ『全く萌えませんよ』

ミズキ『風呂』

くわた『キサマはオレを怒らせたwww』なかはた『周りに異性が母ちゃんしかいない奴の気持ちが分かってたまるか(泣)』

はら『フロ！w キタ           www』

しのづか『お前らちゃんと動け』

やまくら『クツ……その萌え撃はかわせん……グアア！』

くわた『バカw想像しちまったww萌えたww』

なかはた『ハアハア……』

しのづか『ここは変態の集まりか……つか、誤解されるだろ』

ミズキ『想像してるだけの方が幸せですよ』

やまくら『ではせめて簡潔な容姿だけでも教えてくれないか？w』

ミズキ『一目でヒキだと分かるような容姿。雰囲気的にも』

はら『ふいんきかw(何故か変換できない)』

くわた『では胸の発育はどうかね？wグヘヘw』

なかはた『オレの妄想が絶好調になってきたw w w』

しのづか『この会話、もしミズキが見てたらヒくたろうな』

やまくら『そもそも相方と代わったのが嘘だったりして……w』

はら『孔明の罠かwなまぐらの考えは当てになんねw』

ミズキ『ダボダボな服着てるとき多いし、よく見たことはないから分かん』

くわた『そかwだが想像がひろがりんぐw』

なかはた『ヒンニユーが好きだw w w』

やまくら『まで……ミズキさんは自室にパソがある……てことは下着の入ったタンスもある……あとは分かるな？w』

はら『おまwナイスリードw w』

しのづか『いい加減にしれ』

なかはた『問題は入浴時間だが……いけそうか？w』

ミズキ『みずきそう』

くわた『やべw流せw』

はら『ジャイアンツ愛』

と、指示により一瞬でチャット画面は空白を連投されて、先ほどの会話は見えなくなった。かなたはチームワークに感心し、部屋に戻ってきたみずきに席を譲る。ほのかにシャンプーの香りがした。みずきのパジャマ姿にかなたは胸を一瞥し、機会があれば伝えてやろうかと考える。

「どう？ 面白かった？」

みずきが戻った旨を仲間に告げながら、かなたに聞く。

「んー。まあ、面白い奴らだな」

言って、かなたは「帰るわ」と部屋を出ていった。

尚、キャラ名は某球団とは何の関係もありません。





## ひきこもり×アニソン

「あ、ハ ヒ」

「違う。これは平 綾の曲だ」

「どこが違うの？」

「……さあな」

「そか」

場所は水澤かなたの部屋。二人はわりかしかなたの部屋に多い。部屋はカーテンが閉め切れ、暗い。テレビの放つ明かりだけが不気味に二人を照らしていた。テレビの画面では、対戦型パズルゲームが映し出され、二人は巧みに連鎖を組み、一進一退の攻防が繰り返されている。

が、音量は微かに聞き取れる程に絞られ、見た目はかなり地味である。そのかわり部屋ではラジオが流れていた。

アニメソングの特集番組で、年に一回ぐらいしか放送はないが、朝から晩までアニソンだけを流すという、歌といえばアニソンと答えるかなたには嬉しい番組だった。

みずきは歌はあまり聴かない質だが、かなたがみずきのパソコンで声優のネットラジオを聴きに來たりする影響で、アニソンをそれなりに聴いたりするようになった。

「あ、コレってオリコン一位になった」

「一位、二位に同時だ」

ラジオからは某軽音楽部をテーマにしたアニメの主題歌が流れてきた。

そのアニメ内のバンドが歌っている曲だ。

「最近は凄いいね」

「アニオタの力は凄まじいな」

「かなたはどうなの？」

「俺が買えるわけがないだろ。ただ流れてくるのを聴くだけだ。そして気に入ったのがあったらダウンロードしたりな」

「あの時のタリはどんな気分だったんだろうね」

このアニソン界　音楽界初らしいアニメのキャラクターが歌っている設定（実際は声優）の、いわゆるキラソンが売上ランクの一、二位にランクインしたのを、某テレ朝系音楽番組で流れた。

「さあな。スルーしてたのは確かだが」

「でも、いい商売だよな。声優が歌ってれば何でも売れそうだし」

「ま、神曲とか言われてるのもあれば、駄目な曲もあるが……。ジヤーズの曲が売れるのと同じようなモンだろ。お互いに犬と猿のように毛嫌いするような対極な位置だとは思うが」

「でも、世間的にはジヤーズの曲を聴くのは普通で、アニソンはオタクだとオタク以外から毛嫌いされるよね」

「そうだが。既に世間から疎外されてるから関係ないが」

そんな会話を繰り返しながらも、画面では凄まじい速さで連鎖が組み上げられている。それをいつ崩すのかの駆け引きが勝負を分ける。実力的には二人は五分だ。

「あ、これ知ってる。アニメの方は観たことないけど」

「90年代だな。ミリオンヒットもした歌だ。この年代辺りから普通の歌手やバンドが主題歌歌うのが、多くなった気がする。るる剣は面白かったな」

かなたがアニメへの思いに集中を欠く間に、テレビ画面ではかなたの場合は邪魔ブロックに埋め尽くされた。

「ん、そのアニメの頃って、かなた小学校低学年なのに、内容とか理解できたの？」

かなたはフツと鼻で笑う。本人はカッコいいつもりなのだが、ただ鼻から息が出ただけだ。

「確かに当時の俺は、ただ、技とか見てカッコイイと思ってただけだったかもな。今の時代はCSで幾らでも再放送がある。それで話の深さが分かった」

「あ、これは有名だ」

このままだと、あなたのスイッチがオンになり、タイトルが『ひきこもり×アニメ』になりそうだったが、次に流れてきた曲は、某新世紀アニメの曲だった。

「最終回は賛否分かれるが名作だったな」

「当時、この辺りってテレ東観れなかったよね」

ちなみに作者の住む地方でテレ東が観れるようになった当時、少なくともエアは終わっていた。

「CSがある。ま、当時の放送時間と家の夕食時が同じだったし、もし観れてたら気まずかったと思う」

「ふうん。そうなの？」

「観たことなかったっけか？」

「うん」

「まあ、深夜アニメのようなシーンがあったんだ」

「そか。確かパイプ椅子に座って話してるんでしょ」

「最終回にな」

「なんかゼノアスっぽいね」

「次はコレか懐かしいな」

このままだと『略×ゲーム』になりそうだったが、次に流れてきた某海賊アニメ（ハーックにあらす）の主題歌にあなたは心踊らせる。

「これはアニメ主題歌っぽいよね」

「まあ、アニソン歌手みたいな人だからな」

言っ、あなたは歌い始めた。熱唱というほどでもなく、淡々という風に。それはジャアンほど音痴というでもなく、かといってシエル・ノームのような歌唱力もない。どこを褒めれる訳でもなく貶せもしない、カラオケならば場が白けるような歌声である。

「カラオケ……行ってみたいな」

歌が二番に差し掛かり、歌詞を知らないかなたが歌うのを止めると、ボソリとみずきは呟いた。

「へ？」

あなたは心底意外そうな表情をした。ひきこもりからカラオケは遠く離れた位置にある。

「ん、思い切り歌いたいと思って」

「そりゃまあ、俺もあるな」

「かなたとだつたらヒかれることもないだろうし」

その台詞を二次元にしか存在しないような美少女に言われたなら、あなたは萌えて床を転げ回るだろうが、言ったのがみずきなので、萌えはしなかった。だが、そのみずきらしからね台詞と、か細い声にあなたは少しだけドキツとし、コントローラーを繰る手が誤り連鎖を組み損なつた。

「そついえば、みずきが歌つてるとこ見たことないな」

何気なく漏らしたあなたの言葉に、今度はみずきが誤り、ブロックを置く位置を間違え、連鎖の妨げになってしまふ。

「ん。歌とか興味なかったし、……多分、下手だし……」

「いや、部屋で一人の時にアニソンを歌ったりしてんじゃないのか？」

「してない。……してんの？」

あなたは自滅するかのように支離滅裂にブロックを積んでいる。

「まあ、……たまに……な。スシカオとかその辺り……」

あなたは、実際キャラソン（女性）から、電波系まで幅広く歌っている。

「そか」

落ち着きを取り戻したあなたは、適当に積み上げられたブロックを消していく。その過程で連鎖が起き、みずきと五分の状態に戻してきた。あなたは決して初心者ではないがビギナーズラックである。例えば、カラオケに行ったとして、何を歌うつもりなんだ？」

「んー。水 奈々とか……」

「あー、みずきだけに」

「……………」

スルーされたかあなたは傷ついた。

「星 飛行とか歌えば面白いかもな」

あなたはみずきが『キラッ』とポーズを決めるところを想像した。明らかにキャラに合わないが、ギャップがいいと感じた。

「……なにそれ？」

「知らんのか？」

「うん」

「マク スダぞ？」

「名前は知ってるけど、観たことない」

みずきはアニメに関して、深夜アニメも観たりはするが、かなたほど熱烈的ではない。

かなたが睡眠より深夜アニメを優先するならば、みずきは深夜アニメより睡眠やネットゲーを優先する。

「じゃ、シエル・ノームも知らないか」

「地の精霊？」

「ランカも知らんか」

「……………」

部屋の空気が冷たくなるのを二人は感じた。生憎、この部屋には冷房はない。謎である。

「かなたはどんなの歌うつもりなの？」

「……カルマとかだな」

「それアニソンじゃないでしょ」

「いや、アニメ版のジア スがあつてだな、それでもOP曲だ。つか、何故アニソン限定な流れになつてんだ」

テレビ画面では、勝敗が決してキリのいい対戦成績になり、二人は何を言うまでもなくやめる流れになり、コントローラーを置いた。

「……でも、行くのはキツいかな……やっぱり」

「……そうだな」



## ひきこもり×髪

夏の熱光線が道路をホットプレートのように熱し、陽炎が古い住宅街の姿を歪めていた。

そのうちの一軒、木造の家。その二階の一室の窓はこの暑さでも開けられず、その薄暗い部屋には熱気が籠もっていた。

ドアも閉められ、チカチカと光るパソコンのファンから逃げる熱気と、外の熱気が混合し砂漠のような暑さであった。

そしてその部屋には人間も籠もっていた。

パソコンモニターに向かい合う女性は、格好こそショートパンツに、Ｔシャツという涼しげな姿だが、額からは汗が滲み、目まで覆う前髪がびったりとくっついている。

その女性は肌がとても白く、見るからに不健康そうに見える、長く伸ばされた黒髪なものもあり、さながら幽霊のようにも見えた。

女性は今にも頬を伝いそうな汗を拭うとパソコンの電源を切り、椅子から立ち上がると部屋を出ていった。

女性の隣家、同じく趣と歴史を感じさせる二階建ての家。その一室はカーテンが閉じられ、暗かった。

その部屋内はまるで大樹が作る日陰にいるかのように涼しかった。古い型の扇風機が懸命に首を振って、風を送っているおかげだ。薄暗い部屋には人がいた。男である。彼は扇風機の風を浴びながら、うなだれていた。時折、思い出したかのようにため息を吐いていた。

ガチャリとドアノブが回る音がして、女性が入ってくる。彼は首だけを回し、

「……みずきか」



女性の名を呟いた。

みずきは彼の髪を見て、ほんの少し驚いたように瞬きをし、  
「髪切った？」

「タリみたいな言い方だな」

彼、かなたの髪型はみずきが以前見たのとは違っていた。以前の  
かなたの髪は、肩下まで伸ばされ、前髪はまるで恋愛ゲームの男主  
人公のように目を覆っていた。全て垂らせば、顔全体が髪に覆われ、  
黒いのつぺらぼうのように見えるくらいに。

だが、今のかなたの髪は随分スッキリしている。前髪をかき分け  
なくとも、目がはつきりとさらけ出されている。

みずきは風が当たる位置に座り、

「床屋行ったの？」

かなたは髪をかき乱すように触り、

「ああ」

「どうだった？」

「……MP切れたな」

肩をすくめながら苦笑してみせる。

「やっぱりね」

みずきは扇風機を自分側に向け、風力を強くする。風音も一段階  
増す。

「何も聞かれなかったとはいえ、それはそれで疲れるしな」

かなたが行った床屋は、よく利用していたこともあり、ひきこも  
り状態を何となく察せられているのか何も言われることもない。た  
だ黙々とカットしていくだけである。かなたは絶えず話しかけない  
でくれと念じつつ時が過ぎるのを待つしかなかった。

カットが終わるまでの時間をかなたはこう呼ぶ『地獄の一時間』  
と。

「ん、そか」

みずきの額の汗は引き、風により髪がなびいている。

「でも年に一度は行つとかないと、マジで外に出られなくなりそう

だからな。外見で」

「けど、年に指で数えるほどしか出かけてないよね」

「……まあ、そうだが」

かなたの外出といえば、ゲームショップに数ヶ月に一度足を運ぶのみである。みずきに関しては更に少ない。

みずきは、短くなつたかなたの髪をジツと見つめる。かなたは怪訝な表情を浮かべるくらい見た後、

「ボウズにしたら楽だと思うけど。バリカンで」

「それは嫌だな。何となく負けた気がする。何より俺は頭の形が悪いだろうし。……みずきこそ、短くしないのか？　つか、ずっと切つてないだろ」

座つた状態のみずきの黒髪は、半分が床にと接して流れている。立ち姿だと、膝まである長さだ。アニメならばよくある長さだが、現実では滅多に見ない。

「ん、美容院には結構行つてない。前髪は自分でしてるけど」

「……貞子みたいになってきたな」

「君に　け？」

「……スマンがそれ観たことない」

かなたは　に届けのヒロインがその容姿と性格から、某ホラー映画の貞子だと呼ばれてたらしいという、あらすじしか知らない。

「アニメキャラだと、割と私ぐらいの長さの人とかいるけど、実際は手入れとか大変だよ」

「そういうもんなのか」

「うん。シャンプーだけでも時間掛かるし……。髪を束ねるのとかも。私はそれくらいしかしてないけど、ちゃんと手入れする人はもつと時間とか取られると思う」

「まあ、みずきの髪はわりかし綺麗な方だと思うぞ。比べる相手がないわけだが」

「……ん、そう……かな？」

みずきは華奢な白い指で黒髪を梳く。抵抗もなくスーと毛先まで

指が通る。かなたの言うとおり、みずきの長い黒髪は滝のように流れる癖のないストリートで、光に当てればブラックダイヤのような輝いて見えたりもする。もっとも、普段は暗い部屋に同化するような後ろ姿だが。

「あくまでも髪のことだからな」

「わかつてる」

素っ気なく言いながらみずきは扇風機の向きを変え、風を独占する。

「……怒ったのか？」

「別に」

涼しい風を諦め、かなたは何気なく気持ち良さげに風を浴びるみずきを見る。吹き流しのように後ろになびく黒髪に、想像を膨らませ、

「ツインテールとかしないのか？」

みずきはクルリと首を回し、目を細くし、

「なんで？」

「何となく」

「メンドクさい」

後日、髪を左右に二つに分けて結ったみずきの姿があった。

## ひきこもり×テレビ

「……帯じゃま」

「アナログだからしゃあないやん」

「どうして大阪弁？」

日本のどこか、大阪かもしれないし北海道かもしれないし、沖縄かもしれないし、津軽かもわがんね。

とある家のある部屋には二人のひきこもりがいた。

一人は男で、名を水澤かなたという。普段、顔を覆うまで伸びた髪は、最近床屋に行ったため今は短くなっている。

もう一人は女で、名を相原みずきという。漆黒の艶のある髪は滝のように膝下まで伸びており、今は一つに束ねられ長いポニーテールになっている。

二人は幼なじみという関係で、家も隣通しのため、互いに部屋をよく行き来したりする。今はかなたの部屋に居り、カーテンを閉め切られ、電気も点けておらず、テレビの光だけが二人を不気味に照らしていた。

14型のブラウン管テレビは、地デジ化推進の為、上下に黒い帯が出ており無理矢理16:9の画面比にされている。その所為でただでさえ小さな画面が更に圧迫されてしまっていた。（この話は2010年秋に書いた）

テレビではクイズ番組が映っている。

「かけら」

『欠片』の読み方を出題され、淡々とみずきは答える。実につまらなそうに。

「そっぴや、昔、コレ“けっぺん”て読んでたな」

かなたは自らの恥ずかしい間違いを晒す。作者の話ではないんだ

からねっ！

テレビでは、その読み方をまるでワザと間違えてると思えるくらい、おかしな答えをしてタレント達が爆笑している。

「バカブームも中々無くないよね」

「飽きさせないように、次々と新しいの出てきてるからな、元木とか」

「モ 娘。みたいな感じ？」

「まあ、そうかもな」

「それにしても、バカすぎ。私でも分かる問題なのに。高校出てるのに」

「ボケる役割があるんだろ。キチンと答えるクイズ番組は他にいくらでもあるわけだし」

「ん。でもつまらないね」

「そうだな」

かなたがチャンネルを変えると、音楽番組が放送していた。

「48人って多すぎるよね」

テレビでは司会者の横にズラリとアイドルグループが整然と並び、着々と人気が出て、今日初めて音楽番組デビューを果たしたバンドが画面外に押しやられている。

「とにかく人数多ければ、どれかが好みに当てはまって、ファンを獲得できるってことだろ」

「かなたはメンバー分かる？」

「いや。まあ、数人は……だが、前田とか篠田とか、カープかと思っただね」

「興味ないと全く覚えれないものだしね。格ゲーのキャラ名とコマンドなら48人以上覚えれるけど」

「俺も、初代ポ モンの名前なら今でも言えるんだがな」

「でも、よく人気出るよね。曲だって秋 康が作詞した、ウケるよ。うな歌詞並べただけなのに」

「それが世の中の流れなんじゃないのか。以前は秋葉系がファン層だったみたいだが、今は一般にも浸透してるし」

「最近はアニソンもランク上位入ってるけど、一般には受け入れられてないよね」

「まあ、一般に匹敵するくらいオタクの購入者がいるってことだろ」

「AKBはオタク層と一般層両方あるから売れてるってこと？」

「さあな。よく分からん」

またチャンネルを変えると、お笑い芸人がネタを披露する番組を放送していた。

流行語大賞にノミネートされるような一発ネタを持つ芸人が、ワンプアターンなネタを披露しては流れていく。少し前の流行は短い時間内でネタをする番組であつたが、最近一気に減つた。

「つまんない」

みずきに一蹴され、またチャンネルが変わると、名のある歴史学者が新事実と表して、過去の戦国時代を語っている。

「……落ち武者みたいな髪」

みずきの眩き通り、歴史学者の頭髪は薄く、肌色の頭皮に髪の毛が散らばっているように見える。

「カツラじゃないだけマシじゃないか。潔いな」

「それって、×××××の話？ 掲示板なんかで言われたりして」

まるで放送禁止用語を聞いたかのようにかなたは、わざとらしくせき込んで話題を変える。

「伊達政宗か。やっぱり民法だとコレ使われるんだな」

テレビでは伊達政宗の話題が始まり、番組セットの大型ビジョンには、教科書の肖像画でなく、戦国時代を元にしたアクションゲームの政宗が映る。英語混じりで話す方。

「ウケがいいんじゃないの。ゲストも“自称”歴史好きな女性タレント集まってるし」

「こういう扱われ方されるのも、萎えるな。ゲームの内容無視だし」「それにしても、こういうの観ると何が正しい歴史だか分かんくなりそう」

「まあ、興味ないし、過去がどうだろうと別に……な」

「私たちは振り返っても、いい事なかったしね」

……少し部屋に沈黙が訪れ、かなたがチャンネルを変えると、二ユースで、人生絶好調な笑顔をカメラに向ける家族連れが映っていた。帰省すること。

黙ってかなたはテレビを消した。

## ひきこもり×お盆

テレビ画面には、コロコロと六面体のサイコロが転がるのが映っている。真上に出た目は真つ赤な丸い点で、一を示している。

3Dで表され、幾多の線と点で創られた日本列島の形をしたマツプを、青いバスが一マス進んだ。青いマスに止まり、収益を決めるルーレットが回る。中々の高収益を得た。

「みずきの番だぞ」

「……ん」

短く答え、相原みずきはマンガを置いて、代わりにコントローラを握る。

みずきの順番の間、1P（青）である、水澤かなたも漫画本に視線を落としている。

サイコロを振り、2Pの赤いバスが出た目の分進み、黄色のマスで、使用すると様々な効果が発動するカードを得て、順番を終えた。その後、CPUに順番が回り、少ししてかなたの番が来るまでの間、二人は無言でマンガを読んでいた。

二人がプレイしてるのは国民的ボードゲームで、最新作の数年前に出たシリーズである。二人は一見すると、集中力もなくツマらなそうに見えるが、単に手持ちぶさただただ見てるだけの時間を減らす結果、こうしている。既にやり慣れてるため進行状況は音だけで分かる。

それでも、音で判断し、必要な情報を得るためにチラチラと画面は確認している。その情報を基に、マンガを読みつつ、プロの棋士のように次の手筋を脳内で描いている。二人は、ここまでの自分や相手の手持ちカード、所持金額、所有物件、と全て記憶している。

優れたスキルではあるが、無論このゲーム以外に役立つ事はない。

昼間なのに、カーテンが閉め切られた暗い部屋の中で、二人がこ



のゲームを始めてかれこれ二時間にはなる。年数で進行するゲームで、既に十年経過しているが、まだ序盤にすぎない。何故なら二人は最大年数である九十九年までプレイしようとしているのだから。

#### 少し前のこと。

点けっぱなしのラジオからは、ボールを真芯で捉えた快音が流れた。徐々に歓声が上がっていき、実況がホームランだと伝えた。

高校球児達の熱い夏。甲子園である。

あなたは、外界からしみ入る暑さを吹き飛ばさんと懸命に首を振る扇風機の風を浴びながら、ドカンを読んでいた。脇には山のように積み上がったドカンが置かれ、全巻読破しようと考えている。既に何度も読んでいるが、それでも面白い。と思うが、作者は読んだことがないので分からない。

2リットルペットボトルで作った麦茶がなくなり、補給するため、あなたは一階の台所へと降りてきていた。サエさん家と似たような間取りの台所で、手際よく麦茶バックを取り出し、水道水を入れたペットボトルにねじ込む。それを冷蔵庫で冷やしておく。冷えるまでの間を水道水で喉を潤しとこうとあなたは蛇口を捻る。

その時、勝手口のドアが開いた。

現れたのは、三河屋、ではなく、相原みずきであった。

「荷物多そうだな」

水を飲んでコップ置き、あなたは言った。

みずきは肩掛けのバッグを床に降ろし、フウと息を吐く。

床に降ろされても円筒を横にした形状のバッグは形を崩さずに保たれており、チャックを開けたらエパー伊藤が飛び出てきてもおかしくないくらい、中身が詰まってるのがわかる。

「ん。帰るの遅くなるかもしれないから。念のため」

「そか」

聞き方によっては、いかがわしいようにも受け取れる会話を交わし、二人はかなた部屋に行く。やはりいかがわしいニュアンスに取れてしまうが、二人は幼なじみでありそれ以下でも以上でもない。

みずきが何故、家出少女のような荷物を持って来たかというところ、泊まるためである。隣家に住むみずきが、泊まりに来るというのもおかしい話のようだが、当然理由がある。

それは数日前に遡る。

相原家の食事風景の最中に、みずきの母が告げたのは、お盆に親戚が来訪するということであった。

それを普通の人が聞いたならば「ふうん」ぐらいの薄い反応をし、頭の片隅にでも入れとく程度の事だが、みずきにとって親戚というのは、江川卓と小林繁くらいに顔をあわせにくい相手なのである。

空白の一日事件の二人は、後にCMを機に和解し、それから小林氏は亡くなった。

みずきと親戚の間に大きなわだかまりはないが、顔を合わせにくい理由がある。それはみずきがひきこもりで、その親戚というのが顔を合わせたら『仕事してるの?』と、ニヤツきながら訊いてくる人だからだ。

それが嫌でたまらなく、十六、十七になる頃には、親戚がいる間は食料を部屋に抱え込んで、ほとんど部屋から出ないようになった。みずきにとっては来訪というより来襲のようなものであった。

みずきの頭の中に、嫌味な笑みを浮かべる親戚の顔が浮かぶ。いかにも心配そうな顔で聞かすが、内心はほくそ笑んでるに決まっていると、みずきは思っている。少なくとも本気で心配するような人物ではないのがみずきの見解だ。

みずき母が、今年もかなたの家に行くのか聞いて、少し逡巡する間を置いてみずきは頷く。

親戚が訪れる方が多い相原家に対し、帰省する側である水澤家。みずきと同じひきこもりであるかなたは、帰省する両親に付いていくことはせず、家に残る。

数年前より、一人残るかなたの家を避難所のように利用するのがみずきのお盆の過ごし方になっている。

若い娘を、若い男が一人で居る家に泊まらせるのは、獰猛な獣と同じ檻に入れるようなモノに見えるが、両者の家族付き合いは良好であり、かなたならさほど心配はないとみずきの両親は安心して行かせている。

時系列は戻り、何日も泊まるなら と、P S 2でボードゲームを始めて今に至る。ちなみにみずきは、同じく水島伸司の漫画である、あさんを一卷から読んでいる。

24時間テレビの何の意味があるか分からないマラソンのように始めたゲームは、30年を過ぎ、部屋の中からじゃ分らないが、外は朱に染まり、西の空には紫が混ざりだしている時間となっていた。

この間、二人は数時間前と比べたら、間違い探しの問題にもなりそうなくらい動きがなかった。

かなたは体育座りで、膝の間に漫画を置きながらゲームをプレイし、後ろから見たら、画面と漫画へと視線を移動させる首の動きしかないに等しい。

みずきはベッド近くに座り、ベッドの上に漫画を置いて読んでいる。そうすることで視線が漫画に近くなるため、一々持つ必要がない。

そんな二人には絶望的に会話がな

い。ここ数時間で数えても、片手で事足りるほどである。『トイレ』『お茶』『あさん 巻は?』と、冷めた夫婦が発するような単

語のやり取りしかない。

それでもゲームに関しては地味な真剣勝負が繰り広げられている。二人とも最高ランクのCOMを圧倒する高資産を維持し、実質一騎打ちのようになってるが、このゲーム、天国から地獄に落ちるのはあつと言つ間でもあり、まだ勝負は分からない。

「……………」

かなたがテレビから漏れる青白い光に薄ぼんやりと浮かぶ壁掛け時計に目をやると、午後七時を示していた。

「そろそろ夜飯にするか？」

コントローラーを置いて隣に座るみずきに訊ねた。

「何かあるの？」

「いや。金だけは受け取ってる」

残念ながら、冷蔵庫には賞味期限が一昨日のちくわと、牛乳に、調味料しかない。お米もパンもなく、腹を満たす物は何も用意されてないも同然である。

「買いに行く？」

「……それしかないな」

かなたの表情は険しくなる。

かなたの親が置いていった一枚の札（五千円）。それが意味するのは、帰ってくるまでコレで何か買って飢えを凌げということだ。

ひきこもりの二人。出前という家から出ずに食べ物を手に入れる方法があるが、それは、電話をする、届いたら金を払うというツーステップが存在する。

料金の精算は会話が無くとも成立するが、注文はそうはいかない。住所と、注文する品を言う必要がある。二人には酷な話だ。

一昨年のお盆にこの方法を試したが、呟くような声量で、声も震え、幾度か聞き返されたのがかなたのトラウマになった。みずきは最初から電話するくらいなら食べれなくていいという考えだ。

なので、食料調達する際に生じる心労を比べると、コンビ二が一

番楽という結論に至る。

あなたはカーテンを少し開け、歴戦のスパイのように外を伺う。まだ空は朱の割合が多いが、暗くなり始めていた。

「……………」

あなたは深呼吸をする。たとえ弁当を温めるかの有無を、ドラエのように“はい”“いいえ”で返すだけだとしても、普段他人相手にはろくに動かしてない喉。震えた声を出してしまうかもしれないと思うと、怖くなる。

「……………なに？」

あなたにジツと見られ、みずきは虚ろな目を向ける。

「みずきもいつしよに来ないか」

意外な言葉にみずきは瞬きを二度し、

「なんで？」

「二人で行った方が多少、気が楽になるだろうし」

「わたしは……………ムリかも……………」

みずきは俯いてボソリと呟いた。

その様子を見て、無理強いするのも　とあなたは思い、

「まあ、結構外出歩いてないしな。俺一人でいい。悪かった」

みずきは聞いてふと、いつから外出してないか記憶を辿る。桜、

雪、紅葉の季節を巻き戻していき、去年の夏に遡った。

「行く」

財布をジーンズのポケットに入れ、あなたはか細い声に振り向く。

「ん？」

「わたしも行く」

そこには立ち上がって、黒い前髪の隙間から決意の瞳を覗かせるみずきの姿があった。

「じゃ、行くか」



## ひきこもり×コンビニ

周りの既に点灯していた街灯とはワントンポ遅れと、その店前の街灯がチカチカと瞬いて点く。

既に太陽は西の地平線へと沈み。空は色を濃くしていく。そんな時間帯。

「ありがとうございますー」

彼は丁寧に頭を下げ、お客を出て行くのを確認し「ふぁ……」と大きく欠伸を吐く。

ここは某コンビニ。

お盆時期で、炊事を面倒くさがる人が多いのか、夕方の時間帯には弁当を求めにくる客がひっきりなしに訪れ、忙しかったが、ようやく客は途切れ店内が閑散としたのを見て、バイト店員である彼は一息吐くように体を伸ばしていた。

「鈴木くん、眠そうだねえ」

と、肩にポンと手を置き声を掛けられ、鈴木はビクンと背筋を張る。心臓が高鳴った。

「な、な、あ、店長！ すいません！」

まるでお化け屋敷にいるかのような、ややオーバーなりアクションで反射的に謝るが、柔和な笑みを称えた人の良さがにじみ出ている店長は、

「驚きすぎじゃないか？ 鈴木くん。この時期は忙しいからね。仕方ないことだが、客の前ではしっかり頼むよ」

「はあ、昨日はほとんど寝てないもので……」

「若いねえ。でも睡眠は取らないと駄目だよ。仕事に支障があったら困るからね。じゃ、頼むよ」

ポンともう一度肩を叩いてから店長は奥へと消えていく。

「……すみません」

言ってから、早速また大口を開け欠伸をする。さすがに昨日の過ごし方はまずかったと反省する。

鈴木は、昨日予定が全くなく、せっかくの機会だから（といっても予定がない日は結構ある）と、今日は一日ホラー映画三昧だと息込んで、和洋、人気作からB、C級作品までのホラー映画のDVDをレンタルし、雰囲気を出すため部屋を暗くし、ヘッドフォンをして見続けていた。そしていざ就寝しようと目を瞑ると、映画の光景がフラッシュバックしてしまい、寝付けなくなった次第である。

「特に和ホラーは強烈だったな……」

と、思い出すだけで背中ゾゾと悪寒が走る。

鈴木が、夏なのに寒そうに身を震わしていると、ガー、と入り口である自動ドアが開いた。

「いらっしやいま　せ」

半ばパプロフの犬的に入り口に体を向け、マニュアル的な言葉を発した時、また悪寒が走った。

入ってきた客は二人。

一人は若い男で、俯き加減で前髪が目には掛かっていて、なおかつ猫背で暗い雰囲気を纏っているが、たくさんの客を見た中だと気にもとめない程度の容姿ではある。

続いて入ってきた客には鈴木は目を見開いた。

その女性は、とにかく黒い髪が印象的だった。いや、日本人なら当たり前の髪色だが、驚くのはその長さである。墨汁でも垂らしたような黒髪が、呪われた日本人形のように伸びに伸びて、少し屈めば地面に届きそうなくらいだ。

その黒髪が、顔にもかかっており表情を隠してしまっていて、それが鈴木にはホラー映画に出てきた幽霊と重なってしまった。年齢は先に見た男と同じくらいだろうと鈴木は推測する。

うわー。ホラーが現実に……という大変失礼な思考を鈴木は頭を振って払う。二人は連れのようにすぐに雑誌コーナーへと曲がっていった。



店員に奇異の目で見られてると、頭の片隅で被害妄想のようにある水澤かなたと、相原みずきは雑誌コーナーで立ち読みしていた。かなたはゲーム雑誌を、みずきはPC雑誌を手に取りパラパラ漫画のように素早くめくってたが、視線は落ち着きなく周りを気にするようになまよわせ、すぐに棚に戻し、買い物を再開する。

このコンビニは、入り口から少し直進した右手にレジがあり、他に客もおらず鈴木は自然と二人の様子を目で追っていた。

雑誌コーナーは棚が視界を阻んで見えないが、現在はインスタント食品が陳列された棚を二人並んで商品を見ている。

男はカップラーメンを適当に手に取って、持つカゴに入れていく。女がボソボソと男に会話らしきものをして（レジからじゃ聞き取れない）棚から男の持つカゴに商品を入れる。更に華奢で日焼けを知らないような真つ白な手で、インスタント食品をいくつか棚からカゴに入れていく。

女の黒いワンピースから伸びる手足は白く細い。全体が少し強く抱けばポキリと折れてしまいそうであった。その細い体躯が鈴木には映画の幽霊と重なった。

白熱灯で明るい店内だから何も感じはしないが、暗闇で会ったなら腰を抜かしていたかもしれないという考えを、鈴木はやはり頭を振るって霧散させる。客をそんな目で見てはいけないと。

数日分のインスタント食品を買い込み、かなたとみずきは飲み物コーナーへと移動する。

「何か買うか？」

「いいの？」

「ああ」

まるで犯人を尾行する刑事のように声を潜めた会話をし、かなたは炭酸飲料をいくつか、みずきは紅茶飲料をカゴへ、そして弁当コ

ーナーへと足を運ぶ。

鈴木は二人の関係性をカップルではないかと推測した。今も傍をほとんど離れることなく弁当コーナーに来たことからもう受け取った。更に同棲もしてるかもしれない。数日分のインスタント食品を買い込んでたようだし、と。

あと、彼女の後ろ姿をボンヤリ見てると“G”っぽいな（人々を恐怖におとしめる黒い悪魔。主にキッチンに生息。北海道には滅多に見ない。見たことがない）なんて思ったりもした。もちろん失礼すぎるため頭を振って吹き飛ばした。

弁当を二人分力ゴに入れたのを視認し、鈴木はレジ前に立ち、来るのを待った。

かなたが、ゴチャゴチャと数日分の食料が入った力ゴをレジカウンターに乗せると、店員が手際よく精算を始め、ピッピツとリズムよくバーコードを読みとる音が鳴る。

みずきは背後霊のように少し後ろで待つ素振りを見せたが、他に客がいらないか見渡してから、フラリと雑誌コーナーに行った。

かなたはレジ脇のからあげやらに興味なさげな視線向けている。

店員が弁当のバーコードを読みとり機に近づけてから、

「こちら温めになりますか？」

コンビニなら当たり前にある何気ない店員の問いに、かなたは傍目には分からないが体を強ばらせる。

かなたは脳内シミュレーション（コンビニ編）で予習した言葉を喉から出そうとするが、今出すと震えた声になりそうだと察知し、一旦飲み込んだ。

店員は、いつもの接客でのタイミングで答えがないことに傍目には分からない程度に首を傾げる。店員の目には、この客がどこか調

子を悪くしたような顔色に見え、

「お客さ」

「けっ……結構です」

「はい」

かなたは、テスト中の教室で『トイレ行きたい』と言ったかのように、フウと小さく息を吐いた。

ちなみに『いいです』という断り方もかなたのシミュにはあったが、以前にその言葉を発したとき、肯定か否定かどうか迷った店員に聞き返され、もう言うまいと誓った。

その後、滞りなく会計を終え、

「ありがとうございます」

店員の声に見送られ、みずきと合流してかなたはコンビニを後にした。

空は少しの間に、煌々と輝く月が高い位置にあった。街灯と共に、明るく照らされた帰路をひきこもり二人は歩く。

「……変な目で見られてたかも」

「気のせいだろ」

「ん。多分そうだろうけど」

## ひきこもり×お盆(2)

築年数が二桁を楽に越す家々が立ち並ぶ夜の住宅街は、いつもより騒がしい家と静かな家の二極化になっていた。

それは帰省する組と、帰省される組と分かれているからで、帰省組が住む家は真っ暗になっており、隣も帰省組だったりすると周囲の闇が更に濃くなる。

その逆に、賑やかに庭先で楽しそうに花火をしている家もある。まさしく老若男女の笑顔が咲き乱れ、実に楽しそうであった。

親戚が集う家を見分ける方法は、車の数と、家から漏れる明かり、それと声だ。

ここに隣同士で並ぶ家がある。

一方は敷地内に収まりきれなかった車が道路脇に止められ、家からは光と賑やかな声が漏れてきていて、中では酒盛りでもやってるのだろうと想像できる。

もう一方の家はおかしかった。いや、都会なら当たり前だが、田舎で、親戚の繋がりを大事にするような、ここ一帯からするとおかしいと言う表現が正しいか。

その家は、車はどこにも止まってなく、声も聞こえてこないが、居間に面した窓から微かに光が漏れていた。

水澤家の台所では、かなたが、食べ終えたコンビニ弁当の空容器を洗っていた。

かなたとみずきが暮らす地区はゴミの分別にうるさいのもあるが、わりとマメな性分なのだ。かなたは洗い終わった容器を、商品名のシールを破がしてから、プラスチックゴミ用と書かれたゴミ入りに捨てた。

一仕事終え（空容器洗っただけ）、あなたは台所を見渡し、レジ袋に入れっぱなしで食卓テーブルに置かれたインスタント食品の数々を（数日分だし。別にそのままでもいいか）と、放置し台所を後にした。

明かりが点けられた居間であなたは座布団の上で胡座をかき、電源がオフで鏡のように自分の無表情を黒い液晶に映す地デジ対応テレビ（38型）を何かを思案するように見て、電球が頭上に輝いたように立ち上がり、自室へと駆けていった。

「……こつちですの？」

風呂上がりで肌をほんのり桜色に染めたパジャマ姿のみずきが、居間で電気修理屋のようにテレビに配線をしているあなたに虚ろな視線を向ける。

「……まあ、せっかくだし」

振り向かずには答えながら、あなたはゲーム機から伸びるコードを手際よく所定の位置に差し込んでいく。

普段、あなたが居間の大型テレビを使用してゲームをすることはない。朝、昼は人目が気になるし、夜は家族がいて出来ないため、このようなお盆などでないと出来ない贅沢だ。

音声はステレオ（あなたの部屋のはモノラル）。画面は大きい（あなたの14型）。それらは感涙するくらいの違いがある。小さいテレビだと文字が潰れたりして見えないことがあり、それが解消されるのは何より大きかった。

みずきはバスタオルで纏めていた長い黒髪を降ろし、両手で挟み込むように丁寧にタオルで拭く。まだしっとりと湿気を含んだ黒髪が暖簾のようにみずきの前に垂れて顔と体を覆い、今にも井戸から這い出たばかりの幽霊のようである。

「それより、先にお風呂入っちゃって」

結婚数年後の妻のようにみずきは淡々と言った。ゲーム機の設置を終えたあなたは、気怠そうに立ち上がり、

「別に後でもいい」

みずきは髪の間隙から見える表情を僅かにしかめる。

「洗濯終わらせときたいから」

「さいですか」

と、頭を掻きつつあなたは、みずきの横を通り風呂場へと向かっていく。艶のある黒髪からシャンプーの香りが漂っていた。

ベテラン主婦とまではいかないが、みずきは家事全般は無難にこなすことができる。

頼まれたわけではないが、世話になる身としてお盆期間中の数日間、掃除、洗濯をしたりしている。

今も風呂場の前に設置された直立式の洗濯機に、脱いだばかりで温もりが残るあなたの衣類を纏めて放り込み、ついでに自分のも入れてから、洗剤を目分量振りかけて、蓋を閉めスイッチを押す。

水澤家の洗濯機は、洗濯中也ガラスを挟んで中を見る事ができるのだが、みずきはその場に止まり、虚空をみるかのような瞳で、グルグルと渦潮を作りながら中で踊るように回る衣類をジーツと見つめている。

「……何をしてんだ？」

カラスの行水な風呂を終えたあなたは、洗濯機前で突っ立っているみずきを見て怪訝な表情を浮かべた。

「前、見えてるけど」

問いに答えず、振り向いたみずきに言われ、瞬時にサツと手で一部分を覆うかなた。自信のあるモノでもないため恥ずかしい。

「……………」

「……………」

二人は見つめ合ったまま沈黙。洗濯機の回転音だけが少しの間支配し、

「とりあえず、あっち行ってくれ」

かなたは片手でシッシツと追い払う動作。

「別に気にしないし」

と、立ち去らずにみずきはバスタオルを取り出してかなたに渡す。珍しく、僅かながらニヤリと、見る人が見ればホラーな微笑を浮かべている。

かなたはそれを受け取ると、みずきから背中を向けて体を拭き、

「はい」

みずきからパンツを受け取り、履くと足早に風呂場を後にした。

体は風呂上がりだからか、羞恥からかほんのりと赤く染まっていた。みずきはクスツと鼻で笑い、洗濯機に向き直った。

トントントン。

というリズムの良い物音でかなたは目を覚ました。

場所は朝陽がカーテンに遮られた薄暗い居間で、近くにはゲームのコントローラーがあり、ゲーム機がウィーンと一晩中起動し心なしか疲れたような音を発している。

二つ折りの座布団を枕にしていることから、ゲーム中に寝てしまったのだろうとまずは思ったが、少しおかしかった。

テレビは消されてるし、体には覚えのないタオルケットが掛けられている。一瞬、テーブルを挟んだ向こうで、タオルケットにくるまり寝息を立てているみずきがしてくれたかとも思ったが、違うなと台所の方よりなおも聞こえてくる調理音によりそう思う。

第三者にある程度の心当たりはできていた。かなたはノソノソと立ち上がり、それでも警戒するような足取りで台所に向かう。

「あ、おはよ。かなちゃん」

「……おう」

その人物は、かなたの姿を見るとニツコリと太陽のように眩しい

笑みを浮かべた。

彼女は背中の中程まで伸びた亜麻色の髪を一つに束ね、人に好かれるような愛くるしい顔立ちをしており。ロゴ入りTシャツとショートパンツから伸びる手足は、かなたやみずきとは違う健康的な色をしている。

台所には実に家庭的な匂いが漂っていた。

炊飯器からは水蒸気がポワポワと立ち上り、鍋には味噌汁が出汁の香りが混じる湯気を立てる。次には玉子が焼ける甘い匂いが充満するだろう。

「いつ来たんだ？」

寝癖だらけの頭を掻きながら、かなたは聞いた。その声は他人と接するようなオドオドした様子はなく、普段みずきと話すように淡々としている。

「六時頃かな。そしたら、テレビ点けっぱなしで寝てるんだもん。ちゃんと布団で寝ないと風邪引くよ。……もう」

彼女は呆れたようにあからさまに大げさなため息を吐く。

「……悪い。で、その和の朝食メニューはどうしたんだ？ 材料はなかったが」

「家から持ってきたの。あ、ちゃんとバレないようにね。インスタントで過ごすつもりだったみたいだし」

と、彼女は棚の上に移動したインスタント食品の数々を一瞥し、「もう！ あれだと栄養偏っちゃうでしょ。お姉ちゃんも料理できないわけじゃないんだから作ればいいのに……」

ムウと眉を寄せ、不満そうな表情を作る。彼女は二人と違い表情がコロコロと変わる。

かなたは視線をほんの少し下げ、申し訳なさそうに、「スーパーはちよつとな……」

かなたにとってスーパーはコンビニより行きづらい場所だ。広くても集まる。主婦も多く雰囲気からして、立ち入り禁止のテープが張られている感覚にとらわれる。



「そつか。それより顔洗ってきたら？　頭ボサボサだし。ご飯もうすぐできるから」

「ああ」

生返事をし、かなたは洗面所に向かっていく。彼女は、菜箸で力チャカチャとボウルに入った卵を混ぜ、調理に戻る。

かなたが台所を出て行ったあと、少ししてみずきが起きて台所に来た。

乱れた髪を前だけかき分けて視界を確保し、普段とさほど変わらない眠そうな瞳で、玉子焼きをフライパンからまな板に移している後ろ姿に、

「なぎさ」

微かに優しさが滲む声でみずきは妹の名前を呼ぶと、みずきの妹、相原なぎさはクルリと首を向け姉の姿を見て、ペアと笑顔の花が咲く。

「おはよ。お姉ちゃん」

なぎさの挨拶に、みずきは無言ながらも表情を和らげる。

大学生で順調に人生を歩む妹に、劣等感が生まれ一時期逃げるように距離を置き、なぎさも同じように、互いに磁石の同極みたいな時期もあつたが、今は自分を理解して接してくれるなぎさに距離は元通りになっている。

「もうすぐ出来るから」

なぎさは甘い匂いを放つ玉子焼きを切っていく。みずきは怠慢な動作で食卓テーブルのイスを引いて座った。

「それ、どうしたの？」

主語もなく、何を指さすでもなくみずきは言った。つい先ほどかなたに聞かれたことと同じだなど、なぎさは小さくクスツと笑う。「ウチから持ってきたの。インスタントばかりじゃ栄養も偏るし。当然、忍んで来たから大丈夫だよ。ニンニンってね」

忍者が忍術を発動する時をイメージした、顔の前に持ってきた片

手を人差し指だけを立てたポーズをしながら、ウインクをした。

しかし、みずきの反応は「そう」と普段通りの薄さである。

なぎさはその反応を気にすることもなく、玉子焼きを乗せる皿を、ガラス棚より取り出した。

「ね、かなちゃん。玉子焼き上手になったでしょ？」

ひきこもり二人に大学生一人という朝の食事風景。血縁関係がなければ実現しないであろうそれは、歪の形のパズル同士がピタリと合わさったかのように、朝の団らんとも見て取れた。終始笑顔と会話を振りまくのはなぎさだけで、他二名は表情を微細に変えて返すだけのだが、それが当たり前の光景のように見える。

「ああ。……おいしいな」

かなちゃんと呼ばれ、こそばゆそうにあなたは頭を掻く。以前、女つばいからやめてくれと抗議したが、昔からの呼び名を今更変えれないと却下された。

「よかったー。そだ、お姉ちゃん。今日はずっとここに居てもいいかな？」

みずきは箸を止め、

「他に予定とかあったりしないの？ 友達関係とか……」  
なぎさは大仰にため息を吐き、斜め下に視線を落とす。

「まあ、色々とねー。彼氏だとかなんとか忙しいみたいだし」

「そう」

「だから、居ちゃ……駄目かな？」

上目遣いでなぎさはみずきを見る。クリンとした瞳を潤ませながら。

「……………」

みずきは答えず、家主に（お盆中の）判断を仰ぐようにあなたを見る。なぎさもつられるように視線をみずきの隣に座る人物に移動

させる。

「何故、俺に聞く……」

未だ寝ぼけているかのような薄目。

チワワのような潤ませた瞳。

姉妹の視線があなたに集まる。

あなたは一旦味噌汁を飲んでから、

「別に構わないが」

すました返答に、なぎさは「やったねお姉ちゃん！」と、何故か姉と協力していたかのように言って、掌をみずきに向けハイタッチを求め、みずきも渋々と掌を合わせた。なぎさのペースには自分の世界を持つ二人も巻き込まれざるを得ない。

「じゃあさ、夕食はお姉ちゃんの作るカレーにしよう！」

「……材料ないけど」

「それならアタシが買ってくるから。お姉ちゃんのカレー楽しみー。かなちゃんもそう思うよね」

「まあ、そうだな」

こうして、静かだった水澤家からは楽しげな声が約一名聞こえてくるようになり、今年のお盆は無事に過ぎ去ることとなった。

## ひきこもり×お盆（番外編）

『ひきこもり×スーパー』

よく晴れた日の夕方。

水澤家からもつとも近い場所にあるスーパーマーケット。白を基調とした壁が夕陽でオレンジに染まっていた。

入り口手前では、一組の男女が立ち止まっていた。

「かなちゃん、平気？」

教室で腹が痛いのことをできない生徒のように、顔色悪く俯き加減の水澤かなたを、心配そうに相原なぎさはのぞき込むように見る。

なぎさのファッションは今朝とは変わりミニスカートスタイルだ、そのまま雑誌のモデルとして載っててもおかしくないくらいの着こなして似合っている。

「ああ、大丈夫だ。少し心の準備がいるだけだ」

言って、かなたは息を整えるが膝はがくがくと震えている。

一方かなたのファッションは、なぎさのチェックもあり、無難に落ち着いているといった印象だ。

スーパーから出てくる客は、突っ立つ二人を一瞥してくが、関心は無いに等しく皆家路につくことを優先する。

なぎさは、落ち着かせるようにかなたの手を握り、

「震えてるね。ゴメンね無理強いしちゃって」

本気で心配するように眉尻を下げた憂いじみた表情でなぎさは言った。

かなたは深呼吸をし、僅かに微笑んでみせ、

「荷物持ちが要るんだろ？」

と、軽い口調で言ってみせる。それでも体全体がバイブレーション（極小）のようになっている。

なぎさにもその震えは伝わっていたが、止める真似はせずに、ニンマリと何か思い付いたいたずらっ子のような笑みを浮かべ、

「何を……」

かなたは薄い反応だが、周りからの視線がビシビシと手裏剣のように刺さる。特に男から。

なぎさは自分の右腕をかなたの左腕にからませつつ、密着してきたのである。どうにも柔らかな感覚と、仄かに漂う香りで、照れくさそうにかなたは頬を染める。

「こうしてさ、彼女のように振る舞えば大丈夫かなー、と思って」

「いや。逆に視線を集めてるようだから勘弁してくれ」

周りには聞こえない音量で会話をし、なぎさは小さく一歩かなたから距離を取る。

「そっか。残念」

冗談っぽくクスツと笑い、なぎさは駆け足でスーパーへと入っていく。かなたも周りを気にしつつも続いていく。恐怖は紛れ、震えは納まっていた。

スーパーに入って正面には、お盆フェアと題し、線香や蝋燭などの墓参りに必要な物から、花火やバーベキュー用品など、レジャーや親戚が集うような家で楽しむのに必要な品々が揃っており、静と騒が混雑していた。

「……じゃがいも、人参……」

なぎさは持参したメモを見ながら、影のように、傍らにいるかなたの持つカゴに野菜を入れていく。

袋詰めされた野菜を鑑定士のように時間を掛けてなぎさは見て、一番良さそうな品を選ぶため、傍らで突っ立つかなたは自分が場違いのような居づらさを感じ、また震えがくる。

スーパー内にはお盆とはいえ、主婦の割合が多く、特に人の噂や陰口を栄養に生きているような中年主婦はもつともかなたが苦手とする。そんな主婦が多く視界に入るここは、針の筵に立った感覚に

とられる。

「かなちゃん平気？ 次行くよ」

「……おう」

まるで精気を吸い取られたようにボーツと立つかなたを見かねたように、なぎさはかなたの手を握り、子供の手を引く母親のように連れて行く。

精肉コーナーで肉を買い、調味料のコーナーでカレー粉、スパイス幾つかを買い、レジへ。みずきの作るカレーは市販の固形のルーを使わない本格派である。

上手く人の並んでないレジに入ることができ、会計を終え、袋詰めするための台に移動し、かなたもとりのあえずは精神的疲労から解放されかけてきた時だった。

「あれ？ なぎさじゃん。買い物？」

じゃがいもを手にとったかなたの手が止まった。ビデオの一時停止のようにピタリと。

「あ、アキ。久し振り〜。そっちも買い物？」

人を見かけて判断してはいけないが、アキというなぎさの友人は、すっかり脱色されウェーブがかった髪に、メイクもバツチリと決め、ファッションも渋谷にいそうな若い娘といった感じで、見た目からかなたの苦手なタイプである。というより、かなたの苦手じゃないタイプはいるのか。

賑やかに話す二人を見ないように黙々とかなたは品物を袋に詰める作業に集中する。必死にこっちに話しかけないでくれと念じつつ、気配を絶つように黙々と。

「で、そっちの人はなに？ 彼氏？」

テレビで観た知識の今時な若者らしくない“彼氏”の語尾を上げない発音に、かなたの中での多少アキのイメージが改善したが、彼氏じゃないと言わなければと、チラッと顔を上げてしまう。

アキと目があった。カラーコンタクトでも入れてるらしき青い瞳であった。

「そう見えるかなー？」

なぎさは、否定することなく、照れと冗談が半々といった笑みを浮かべる。あなたは「いや、違う」と一言発したかったが、喉の奥がカラカラになったかのように声が出ない。

アキは、んー、とニヤツとした笑みを作りかなたを見つめ、

「まー。そう見えなくてもいいけど。違うの？」

「どうかな？」

尚も、なぎさは否定も肯定もせずイタズラっぽい笑みを浮かべたままだ。

「ま、どっちでもいいけど。じゃ、またね」

と、アキは照明でキラキラと光る鋭い爪がある指を二本、顔の横に上げてパチリとウインクして去っていった。

なぎさも手をひらひら振り、見送るとポーツとカレー粉の缶を持ったまま固まるかなたを心配そうな表情で見つめ、

「かなちゃん……大丈夫？」

まるでかなたはメデューサに睨まれたように固まっていて、意識がどこかへと行ってしまっていた。

帰り道にて。

「調子よくなった？」

「……ああ」

「はつきり彼氏だつて事にしとけばよかったかな？」

「……普通に知り合いでいいだろ」

「それだと冷たい気もするからイヤかな」

「それ以外にないと思うが」

「じゃ、幼なじみ……はどうか？ 駄目？」

「まあ、なぎさがそれでいいなら」

「よかった！ 今度はそうするね」

「……今度同じ機会があればな」

【ひきこもり×風呂】

『ひゃあっ！ つめたっ……』

『アハハッ！ お姉ちゃん色っぽい』

水澤家の台所から風呂へは、ドアを二つ挟んだ先にある。普段は他の雑音に紛れてよほどの大声じゃないかぎり声が届くことは少ないが、今はテレビの音もなく窓も閉め切っているため静かだった。聞こえる音といえば、台所に立つかなたが食器を泡立つスポンジで洗う、キュキュという小動物が可愛く鳴くような小さな音だけである。

みずき手作りのカレーを平らげたあと、なぎさがみずきを風呂に誘って、かなたに後かたづけを命じて、先んじて入っていったのである。

「……………」

かなたとて男である。風呂場から聞こえる水音に、入ってるのが幼なじみの姉妹で、姉とは何度も夜を共にした仲（徹夜でゲームという意味で）だろうと、気にはなる。特に普段出さないような高い声を聞かされては、異性だと再認識させられる。

今もなぎさの楽しげな声が聞こえ、想像が膨らんだが、蛇口を回し、食器を濯ぐことで妄想を振り払う。

そんなかなたの理性との葛藤を知ってか知らずか、相原姉妹は久しぶりにいっしょのバスタイムを楽しんで（主に妹）でいた。

「相変わらず、お姉ちゃんの髪綺麗だよー」

みずきの長い髪を洗いながら、なぎさは感嘆の声をあげる。

「…………別にそんなこと…………なぎさの方が艶あると思う。私、何も手入れとかしてないし」

なぎさに背を向けるみずきは、気恥ずかしそうに俯き加減になる。



「それなのに、こんないい艶なのが凄いだよ。むう……羨ましい」  
なぎさは唇を尖らせ、多少乱暴に髪を泡立て始めた。途中、色々  
と髪で遊びながらも、洗髪終了と丁寧に洗い流した。

「はい、おしまい。じゃさ、次はアタシの番」

ササツとなぎさは位置変更し、ルンルンと鼻歌混じりに待つ。鏡  
に映る実を楽しむような笑顔の妹を見て、背後霊のようなみずきは、  
やれやれとシャンプーを手に取った。

「お姉ちゃん、きちんと食事取ってる？ 前より細くなったんじゃない？」

みずきの背中をゴシゴシしながら、なぎさは心配そうに聞いた。

「ん。大丈夫」

ピカーンと頭上で電球が輝いたイメージで、なぎさはニヤツと笑  
う。みずきからはその表情は見えず、

「ひゃっ！」

と、不意打ちに高い声を発した。

「ほらー。折れちゃいそうなくらいだよー。肉もぜんぜん掴めない  
し」

モミモミ。みずきの背中に密着して、なぎさは腕を回しガツチリ  
とホールド。プロレスラーならそのままスープレックスを仕掛けら  
れる体制で、なぎさはみずきの腹肉を掴もうとするが、僅かしか掴  
めない。

「なぎさ……やめっ……」

歯を食いしばりみずきはこそばゆいのを我慢する。腹はなんとも  
ないが、わき腹に当たるなぎさの腕が少し動く度に、今にも吹き出  
しそうになる。

悪ノリしてきたなぎさは、標準を腹より上へ定める。みずきを捕  
らえた腕の輪を上昇させていき、弾力のあるモノにあたる。

「うーむ。こっちはお腹と違って、しっかり揉めるね」

なぎさは評論家のように呻り、みずきの胸をモミモミ。

「ん……」

僅かに体を強ばらせ、みずきは小さく声を漏らす。ほんのりと肌がピンクに染まる。

「大きさはアタシの勝ちなのに……。お姉ちゃん細いから見た目はアタシと変わらない感じになるんだよね」

泡の付いた滑りのよい手で胸を満遍なく洗い、ようやくホールド解除。

「……もう……」

みずきは胸を守るように腕をクロスし、一息吐いた。そして、洗い流さぬまま、振り向いて、ニヤリと笑う。

「次、なぎさの番」

少ししてなぎさの色っぽい声が台所まで響くこととなるのだが、生憎かなたは既にそこにはいなかった。

水澤家の風呂場は、一度リフォームされ水はけのいいタイル床にシャワーが完備されたとはいえ、サイズは一般家庭と変わりはない。風呂に一度に入れる人数も、大人一人、幼い子供一人が限度である。そんな風呂に大人二人が入るためには、

「……足当たてる」

「仕方ないよー。こうしないと入れないんだからー」

「無理に入らなくても……。それが足畳めばいいでしょ」

「アタシは足伸ばして入りたいもん」

「だったら一人で入ったらよかったのに」

「イヤ。お姉ちゃんといっしょにも入りたいし」

「……もう」

「また、いっしょに入ろうね」

「……（小さく頷く）」

「今度はかなちゃんもいっしょに……。とか」

「……（無言）」



## ひきこもり×ネコ

私は猫である。

名前はゴロと飼い主に名付けられた。いつもゴロゴロしているからというのが、この名前になった理由だ。

私は好きで日中の殆どを寝転がって過ごしていた訳ではない。縄張りである家を見回るという行為はさほど時間も掛からないし、終わってから他にやるべき事もないのだ。

窓際に乗っかって景色を見たりするがすぐに飽きてしまう。窓の向こうの世界に行ってみたいのだが、主は、車という走る箱が危険だといって、行かせてはくれない。

確かにあの箱にぶつかったりしたならば、私は無事では済まないだろうが、どうやらあの車という物は、基本的に道に敷かれた白い線の内側しか走れないらしい。気を付ければ大丈夫だと思うのだが、主は心配性である。

だが主に養ってもらっている身の上、私は生まれてこの方家から出ることもなく過ごしていた。

私が初めて窓の外側の世界を感じたのは昨日の事である。小さなケージに入れられ、それを主に抱えられ初めて外に出ることができた。

外の世界は、窓から眺めるより果てしなく広いものと、格子状の扉から観てそう思った。空気の清涼さも違う。

そして主が危険だといって、車というものに乗せられた。主の子供達が楽しそうに主と会話を交わしていた。会話から、どうやら『温泉』というところへ行くらしい。あたたまるとも言っていたが、人間というのは寒さに弱いのだろうか。

自分の黒い体毛が恨めしくなった夏が終わり、ようやく過ごしやすくなったばかりだというのに。

そういえば、以前も家の中で家族揃って『温泉旅行』をすると話していたのを思い出していると、ガタンとケージが揺れた。驚いて隙間から窓の外を見ると、映る景色が早く過ぎ去っては消え、過ぎ去っては消えるのを繰り返す。車というのが走っているからだとすぐに理解した。私も、運動不足解消に家中を走っているときに見える光景と似ていたからだ。同時に、その後に主に怒鳴られたの思い出してしまった……。

車というのは、絶え間なく揺れ続ける物らしい。少しすると視界が揺らぎ、身体が寝起きの時のように気怠くなるのを感じていた。

ようやく、揺れが止まるとケージごと私は運ばれ、主の家より年季の感じさせる家へと入ることとなった。ここに『温泉』があるのかと、私は未だ気怠い身体を起こし、扉が開けられたケージからソノソと出て、主の側に座る。

辺りを見回してみたが、主達の会話からすぐにここが『温泉』ではないと分かった。

私は数日この家で過ごすこととなり、その間、主達が『温泉』に行くとのことだ。

主が丁寧に頭を下げて、私をよろしくと言っていた。主の恥にならないように、私はこの家でおとなしくしようと誓った。

私は目を覚まし、欠伸をした。

居間は静かだ。家の者は出掛けると言っ、帰りは夕方になるそうだ。

窓から外を眺めると、陽は高い位置にある。朱い太陽になる時間まではまだあるようだ。

静まり帰った居間から出て、私は台所へ向かう。この家は一通り

見て回ったが、主の家とは違い、古めかしいという印象を持った。

黒ずんだ柱で爪を研ぎたいという衝動に駆られたが、私は堪えた。怒られると分かっているからだ。

この台所も、主の家とは違い解放感がある。主の家は“しすてむきつちん”というらしく、狭い中で調理をしているが、ここは横に長く広々としている。テーブルもあるが、食事はここで取るのだろうか。

用意された水を飲んで咽を潤していると、キィとドアが軋む音がした。私はすぐに音の方向を振り向く。他人の家とはいえ警戒を怠りはしない。不審者であつたならば、身を挺して立ち向かう心構えはできている。

音がしたのは台所にあるドアで、そこからも外へと繋がっているらしかった。

「……あ」

そのドアから入ってきた人を見て私は迷った。果たして不審者なのかと。人の方は私の姿を見て、僅かに口を開いて声を漏らした。

私は野生にいたことがないのだが、野生の感といえはいいのだろうか。不審者というのは、ニオイで分かる。やましいニオイがするのだ。以前、主が夜遅くに帰宅した時もそんなニオイがしていた。酒臭くもあつた。

しかし、この人はそんなニオイはしなかった。だが、怪しくは見えた。嗅覚じゃなく視覚の話だ。

人の顔の美醜は分らないが、その人は私のような滑らかな黒毛が長く伸びていて、片目を覆っている。肌の色も主と比べると白く身体も細い、私から見ても弱々しく感じた。

「……………」

「……………」

互いに視線を合わせたまま数秒。

私がどうするべきかと悩んでいると、その人は私と視線の高さを合わすようにしゃがむ。長い毛が床に広がった。

「……チチチ」

と、小さく舌を鳴らして、か細い手を差し伸べてきた。毛の間から覗く顔には柔和な微笑が見え、私は警戒を解いてその人に近寄った。

「ニヤア」

私は挨拶をし（伝わってはいないだろうが）、目の前で座ると、頭を優しく撫でられた。その撫で方は私の気持ちを解きほぐしてくれるかのようで、思わず喉を鳴らしてしまう。

私はその人に優しく抱き抱えられ、とある部屋の前に来た。家の者は出掛けたと言ったが、留守というわけではない。

人の年齢というのは私は大きざぐらいでしか判別できないが、この家の主の息子であろう男が一人居る。家の者が出掛けてから一度居間に来たのを見た。

寝てる間でも物音には注意を傾けているし、その間にどこかへ出掛けたような音はしなかったから、この部屋にいるのだろう。

だとすると、今私を抱き抱えているこの者は息子に会いに来たのだろう。雌雄は匂いが違うから分かるのだが、恋人……なのだろうか。

それにしても、抱き方が主の子供達のように不快ではなく、むしろ心地良いとっていい。馴れていると見受けられる。

部屋に入ると、暖かな陽光を嫌うようにカーテンが閉め切られていた。私の瞳孔が明るさに合わせ、針の細さから玉のように丸くなる。人間というのは暗い場所に適応出来ないようだが、何故そうしているのか私には分からない。

だが、明かりはある。テレビが発光し部屋を薄ぼんやりと照らしている。その前に座る者は、一度こちらを見た後テレビと睨めっこをするように視線を元に戻した。

ゲームというヤツだ。子供達がやかましく遊んでいるのをよく見る。

私は部屋にあるベッドに降ろされ、とりあえずそこにお座りをした。女も隣に座り、頭を撫でられた。

「かなた」

抑揚のない声で息子であろう者の名を呼ぶ。

テレビを向いたまま、かなたは反応はないが、女は続けた。

「……この猫、どうしたの？」

言って、視線を私に向ける。長い毛が、風に拭かれた猫じやらしのように揺れて、私は手を出したい衝動に駆られたが我慢。

「ああ、預かったらしい」

かなたはテレビを見たまま言う。子供達も同じように主の話に答えたことがあったが、目を見て話せと怒られていたのを思い出す。

「名前は？」

「ゴロ」

思い出す仕草もなくアツサリとかなたは私の名を答えて見せた。

私の記憶からするにかなたとその親との会話時に私の名前は出てこなかったはずだが。まるで私の視界外から息を潜めて会話を聴いていたかのようだ。

「ゴロ」

母親のような優しげな声で名前を呼ばれ、私は返事をしてみせる。女はポンポンと膝を軽く叩いて、ここに来るようにと呼ぶ。

私は膝の感触は嫌いではない。特にこの女はいい匂いがするし、まだ会ったばかりだが近くにしていると落ち着く相手だ。だから、呼ばれた通りに膝の上に伏せる。一応だが私はメスである。念のため。

「昔、猫を世話してた事覚えてる？」

そう言われ、かなたは顔を天井へと向け、

「ああ。懐かしい話だな」

「小三……だったよね。内緒で食べ物あげに行ったりして」



かなたは身体をこちらに向け会話に集中する姿勢を見せる。私は寝たふりをしながら耳をピンと立ててそれを聴く。

「まあ、今にして思うと何故連れて帰らなかったんだかな。無意識に、否定されるとばかり考えてたんだっけか」

「……ウチはなぎさが猫アレルギーだったから……それでかなたのウチもなぎさが来たりするから無理だろうって」

「そうだった」

猫アレルギーとはなんだろうと考えながら、私はウトウトと本当に眠りに陥り始めていた。絶えず撫でられる感触が睡眠導入を促してくれる。

「三ヶ月……くらいだったよね。姿見せなくなったの」

「春から夏にかけてだから、確かにそのくらいだな」

「……拾われたんだよね。きつと。今は元気かな？」

「まあ、まだ子猫だったし。元気でやってんだろ」

子猫……か。心ない人間に捨てられるという話をテレビでやっていたことがある。親がいないまま自然で幼い猫が生き続けるのは困難だろう。その子猫は幸運だ。

「……名前、まだ覚えてる？」

「ダンデライオン。……よくそんな単語をあの頃のみずきが知ってたな」

どうやらこの女はみずきというらしい。私もそんな名を欲しかった。ゴロだと安直すぎる。主には申し訳ないが。

「ん。天才だから」

「そか」

「……冗談。たまたま知ってただけ。たんぼぼが英語でそう呼ぶって」

「」

その後も会話は続いてたようだが、私はグッスリと眠ってしまったようだ。

警戒心を全て解いてしまい、まるで母親のような温もりと安心を感じながら。

……ところでこの二人は何故、家にずっといるのだろうか。  
カレンダーは赤や青い日でもないのに。  
不思議である。

## ひきこもり×恋愛ゲーム

夏の記憶を薄れさせるような涼しい風が、街路樹の葉を騒がしなから吹き抜けていく。

そんな風が伝える秋の合図を受けた葉が色変わりを始めようかという街路樹が立ち並ぶ通りに、一件のゲームショップがあった。

そろそろ閉店時間も迫る店内の客はまばらで、この客達が出て行ったらシャッターを降ろそうかななどと店長は考えながら、レジカウンターに頬杖を突いて客を眺めていた。

あまりやる気が感じられないが、店長一人で切り盛りする個人販売店。チェーン店とは違い客への応対は丁寧じゃなくてもいいという適当な信念で淡々とこなしている。

店内もチェーン店とは違い、狭く、日中でも白熱灯が点きつぱなしのチェーン店と比べるとほんの少し薄暗くもあった。

客層も違う。

カップルから家族連れまであらゆる人が訪れるチェーン店とは違い、こちらは一人が多く、男女の割合も男が圧倒的。

彼女の有無を問われれば、押し黙るか、開き直って『いない歴』年齢ですが何か？』と言うような人ばかりだ。

雰囲気も一言で表すならば“暗い”人が多くを占める。今も、パーカーのフードを深く被り俯き加減でソフトパッケージの裏を熱心に眺める人や、萌えキャラがプリントされたＴシャツを着た痩せぎすの人、成人向けのＰＣソフトが並んだ棚を力二歩きしながらこれ三十分は悩んでいる人と様々だ。

店長はふいに人影を感じ、店内を見回していた視線をレジ前へと向けると、青年が立っていた。青年はゲームのパッケージをカウンターに置き、無言で清算を促す。

彼はたまに来ては、中古で安くなったソフトだけを買いに来る常連である。といっても、ワンシーズンに一度来るか来ないかの頻度

ではあるが、数年前から見る顔のため店長はよく覚えていた。しかし、声を発したことはほとんどない。

彼は千円以下のゲームソフトを一本購入していった。それを見送り、店長は意外そうに思った。ああいうジャンルもプレイするんだな、と。

意外そうな視線を向けられていた彼、水澤かなたは、ひきこもりである。春夏秋冬に一度ずつあるかないかの外出を終え、家路へとやや早足で歩いていった。

理由は二つある。

一つは、新たなゲームを早くゲーム機にセットしてプレイしたいという子供じみた高揚感から。

もう一つは、まるで背後からゾンビにでも着けられているかのような恐怖感から。彼が外出する覚悟というのは、平社員が上司に意見するくらいの緊張感があるのである。なので、一刻も早く自らの縄張りである自室に戻りたいという思いから、自然と足は早まった。

自室にたどり着いたかなたは息を乱してハアハアと肩を上下させていた。

「……おかえり。買い物？」

決していつの間にか部屋にいた幼なじみ、相原みずきに欲情しているからではない。彼女は、ゲームのコントローラーを繰りつつも、かなたの方に感情の薄い顔を向ける。音を頼りにCPU相手に連続技を決めるといふ器用なことをしながらだ。

「ああ」

短く返して、かなたはベッドに腰掛ける。

自宅が見えてきて、早足を某チャリティーマラソンのランナーみたいに、マラソンへと切り替えて急いだため疲れていた。日頃の極度な運動不足なため体力はかなり衰えている。

「……何、買ったの？」

みずきは勝利ポーズを決めるキャラを一瞥し、ゲーム機の電源を切って訊ねる。あなたが買い物に行く理由はゲームを購入するためなのが九割を占め、みずきは早速プレイすると思い、ゲームを譲る。「いや、別にまだしててよかったが……」

歯切れが悪くあなたが答え、脇に置いた袋に手を置く。普段はエサを与えられた腹ぺこの犬のように、急いでゲームをプレイしようとするのに、おかしいとみずきは小首を傾げた。

そして、テレビだけが不気味に発光する部屋に沈黙が訪れた。

「エロゲー？」

少しして囁くようにみずきが言った。

「ブツとかなだが吹き出した。」

といつてもみずきだけが

人前でプレイするには躊躇うようなジャンルのソフト　と、み

ずきが考えた末の答えがそれであった。

「違う」

「でも、PCじゃないとできないんじゃない？……私の使う？」

「違うから」

「……あ、私はこっちにいますから……終わったら言って」

否定するあなたの言葉は耳に届いていないかのように、みずきは続けたが、実際は聞こえていて、冗談のつもりであるのだが、声も表情も普段通りのためそうは捉えられにくい。

「これだ」

ため息を吐いて、あなたは袋をみずきに渡した。逆さにして、出てきたソフトは、

「ギャルゲー？」

みずきはソフトを拾い上げ、まじまじと髪の色がいかにも非現実

的な美少女が描かれたパッケージを見る。

確かに人前でプレイするのは躊躇われるが、18禁な場面はない。

「いや、安かったし……」

ばつが悪そうにあなたは頭を掻きながら言い訳めいた言葉を吐く。

「そう」

みずきは軽蔑めいた瞳もなく、あなたにソフトを渡す。あなたがこのジャンルのソフトを買ったことはなかったが、大した意外性はないようにみずきは感じていた。

「ま、だから……帰ってくれるとありがたいんだが」

「なんで？」

「どうにもやりづらいというか……」

「私も見たいんだけど……」

「……まあ、いいか」

渋々とあなたは了承した。いくら幼なじみで、いかにもオタクな内容のゲームに対する理解はあるとはいえ、一応にも女性であるみずきがギャラリーとしている中でしたくはなかったのだが……。

「このキャラ狙ってるの？」

だから、したくはなかったのだとあなたは心中でうなだれた。いくら普段やらないジャンルとはいえ、基礎的なギャルゲー知識は二人とも持つてはいる。

キャラの好感度がいかにも上がりそうな選択肢を選ぶ度に、外野からアレコレ言われては気恥ずかしいことこの上ない。

更にみずきは相変わらずの淡々とした口調なのが恥ずかしさを倍増させる。あなたの斜め後ろにいるためあなたからは表情は確認できないが無表情でだ。

はつきり言つて、からかうような口調で、ニヤニヤと笑み浮かべた方が気が楽である。

『 あ……』

と、テレビ画面では新たなキャラクターの立ち絵が表示される。かなたは台詞を進めることをせず、しばし画面を見つめた後、斜め後ろを振り向いてまたしばし見つめる。

「ん、何？」

体育座りの膝にクッションを乗せ、そこに顎を埋める姿勢で画面を眺めていたみずきは眉を僅かに動かす。

「このキャラ、みずきと似てる気がして」

みずきの瞼が数ミリ上がり、

「……そう？ あんまり似てないと思うけど……」

「まあ、雰囲気は何となくだけど」

画面上に映るキャラは、黒髪が片目を覆いながら肩下へと流れ、顔も俯き加減でいかにも根暗キャラといった空気を漂わせている。

しかし、二次元でしかないようなありえない瞳の大きさで顔の造形も整いすぎているのがギャルゲーっぽさを強調するかのようである。

話を進めていくと、そのキャラは不登校で、家にこもりがちという、いかにも見た目を裏切らないキャラ設定であった。

「……今のは一番上の方が……」

と、みずきは選択肢について意見を言うがかなたが選んだのは不登校少女寄りの選択であった。

クッションに顔を埋めながら、不登校少女のボイスを聴くみずきの耳はほのかに赤くなっている。

自分では似てないと思ってはいるが、かなたに言われ、設定も不登校（なった時期はみずきのが早い）で、こもりがち（みずきのが重い）となつては、どうしても意識してしまい、妙な気恥ずかしさを感じてしまっていた。

それでも気にはなるためクッションに顔を半分埋めながら、展開

を見守るが、

『あ……恥ずかしい……ん、でも、ありがと……重くない？』

と、作者もどんな流れだよと突っ込みたくなるような甘い雰囲気  
のイベントシーンが流れると、みずきに限界が訪れた。

みずきは唐突に立ち上がると、

「帰る」

一言残して部屋を出て行った。頬も赤く染まりまるで熱でもある  
かのような顔をしながら。

少ししてあなたはコントローラーを置き、ベッドに突っ伏した。

その顔は羞恥に染まり、苦笑いを浮かべていた。

「全く、耐性がないな……」

ひとりごちて、あなたはコントローラー手に取った。

ちなみにその不登校キャラは結局不登校のままで、主人公と恋仲  
になり、ひきこもりのままEDを迎えた。

余談だが、みずきは次の日から、熱を出してしまい寝込んでしま  
ったという。



## ひきこもり×風邪

薄暗い六畳の部屋は静かだった。

時刻は十時。誰もが会社、学校へと着いて仕事や勉強に励む時間。しかし、その部屋の主はベッドで寝息を立てていた。

夜間の仕事を終えての睡眠ではない。

布団へと潜り込んだ時間はそういった職業に就いている人と同様に明け方になってからではあったが、彼がそんな時間までしていたことは、収入を得るためではない。いわば自己満足である。

彼がしていたのは、テレビゲーム。

先日購入した、恋愛シミュレーションゲームをずっとプレイしていたのだ。

普段プレイしないジャンルのため不慣れで、向いてないと思いつつも、彼は全キャラを攻略するのに明け暮れていた。やり込み派であつた。

昨日も同様に徹夜でゲームを続け、白んだ朝日をカーテン越しに拝んでから寝ており、今日も昼前に起床し、ゲームの進行度以外ほぼ変わらない日常を繰り返す　かに思われた。

『ご主人様お電話で御座います』

澄んだ声が部屋に響いた。

そう、彼の傍らには、清楚なエプロンドレスを身に纏い、微笑を称えたメイドが電話の子機を片手に立っている　ワケがなく、発信源は枕元に置かれた携帯電話からだ。

二度目のアニメキャラの着信ボイスが流れたが、煩わしがるように寝返りをうって無視を決め込む。

所詮、急を要する電話じゃないと彼は思っている。半分は間違い電話だろうとも。

中身がスカスカなアドレス帳に登録されてる人物から掛かってきたとしても、用件なぞ些細なことだと、眠りを中断してまで出る気はない。彼は布団を頭から深くかぶって、小うるさい音を少しでも遮断する。

七度。

八度。

と、未だ健気なメイドの声は、着信を知らせ続け、彼は根負けし、布団から手だけを伸ばし携帯電話を掴んで引きずり込んだ。

開くとディスプレイには、眠りを妨げたはた迷惑な電話相手の名前が映っている。それを見て、やはりろくでもない事だろうと思いつながら彼は通話ボタンを押し、耳に当てた。

『あ、かなちゃん！ 大変なお姉ちゃんが！』

トントン、と階段を上る音で、相原みずきは半ば眠りに陥りかけていた目を開いた。

部屋前に来て足音が止み、次にノックの音が鳴った。みずきは返事をしようか一瞬迷ったが、喉も痛く、面倒くさいと無視を決め込む。

少しして、ドアが少し開き、布団で寝ているみずきと目が合うと、更に開いて水澤かなたが入ってきた。

かなたはみずきの傍に座ると、心配と珍しさが半々な表情を浮かべ、

「大丈夫か？」

と、言葉だけの心配をかけた。

「……ダルい」

掠れた声でみずきは答え、

「……何か用？」

虚ろな瞳であなたを見る。そして小さくせき込んだ。

みずきの額には冷却シートが貼られ、いつも不健康そうな顔色は一層悪く見え、頬がほんのりと朱に染まっている。

「なぎさから電話があった。『お姉ちゃんが風邪引いて、謔言でかなちゃんの事読んでみたいだから、早く行ってあげて!』……………」  
「だと」

なぎさの声色（似てない）を交えながら経緯をあなたは説明する。

「……………風邪でも引いた?」

普段のキャラとブレているあなたに訝る目をみずきは向ける。

「いや、少し、ちよつと眠いだけだ」

言い訳めいたように言い放ち、あなたは顔を背け窓へと視線を逸らす。耳が赤く染まっている。

「お母さんからなぎさに伝えたい。……………そんな謔言言っていないけど」

みずきは壁際に寝返りをうつ。

「で、何度くらいあるんだ?」

あなたは視線を戻し、みずきの後頭部を見ながら訊ねる。“熱は”と付け忘れてはいるが無論、体温のことである。

「昨日の夜は、三十八……………コホツ……………度四分だった」  
壁を向いたままみずきは答えた。

昨日の夜　とは夜の範囲が明け方まであるみずきの言葉だと、何時から計ってないかは定かではないが、首筋の辺りを見ると、量の多い髪が汗によりクツツいているのが分かる。

あなたは近くに置かれた丸い盆に乗った体温計を手に取り、手を伸ばしてみずきの眼前に差し出す。

「とりあえず計ってみたらどうだ」

「メンドクサイ」

「いいから計れ」

強い口調で言い、体温計をみずきの顔前に落とす。渋々ながらみずきはそれを手にとってケースから取り出し、まじまじと見た。

「これ、胸に挟むんだっけ？」

「……好きにしろ」

ボケなのか、天然なのかどちらとも取りがたいみずきの問いにあなたは投げやりに答えるしかない。

キレのいいツツコミを期待していたみずきは体温計を脇に挟む。

あなたは的確にツツコミを入れるタイプではないが、熱に浮かされ思考が働かないみずきには、何となく今日のかあなたは漫才師並のキレのあるツツコミが返ってきそうな気がしていた。

少しして電子音が鳴り、みずきは脇から体温計を取り出して表示された数字を見ながら、

「四十四度」

「ほう、死んでるな」

「ん、人間の体温が四十二度になるとタンパク質が固まりだして死んじゃうから。だから体温計は42度までしかないんだって」

「そんな雑学はいい。で、本当は何度だったんだ？」

みずきは無言で体温計を後ろ手に返す。

受け取った体温計を見ると、三十九度五分あった。

「高くなってるな」

「……そうみたい」

「……………」

「……………」

沈黙。互いに風邪菌がフヨフヨと漂う場所　つまりは外に行くこともないため、滅多に体調を崩すこともなく、看病の場に慣れていない。

あなたは病人に対してどうすべきかと考えを巡らせ、

「あー、……氷枕取り替えるか？」

「あ、うん」

氷枕を引き抜き、あなたは立ち上がる。

「何か要るものあるか？」

「別にないけど」

聞いて、あなたは部屋を出て行った。階段を降りていく音を聞きながらみずきは布団を被るように掛け直した。

少ししてあなたは戻ってきて、側に座る。

みずきは気怠そうに寝返りを打ち顔を向けると、甘い匂いが鼻孔をくすぐった。

手に持ったカップをみずきがボーっとした目で見ているのをあなたは見て、

「温まるのでも飲んだほうがいいと思ったんだが……要らなかったか？」

丸い盆に甘い匂いの湯気が立ち上るココアが入ったカップを置いた。

みずきは上半身を起きあがらせ、カップを熱いため手をパジャマの袖で隠しながら両手で丁寧に掴み、すするように一口。

「……ありがとう」

普段ほとんど言う事もない礼を小さく言い、恥ずかしげにみずきはうつむき加減になる。

その小さな感謝の言葉が耳に届いたのかは定かじゃないが、あなたは氷枕をタオルで巻いて、寝たとき頭にあたる位置に置くと、チビチビとココアを飲むみずきを見て、

「冷えピタも取り替えたほうがいくないか？」

みずきはあなたの顔に疑わしがるような細目を向ける。

「献身的に看病しても、私の好感度は上がらないけど？」

「ギャルゲーか」

ビシッとあなたは手の甲で空を叩きツツコミを入れる。

「十点」

「満点か？」

「ん、千点中」

ツツコミに大変手厳しい評価を下されたあなたは苦笑し、

「ま、病人放っておいたら、後でなぎさになんて言われるか分から

んしな  
」

「そう」

みずきの感情が薄い表情の中に、微かに憂いのようなモノが浮かんだが、すぐに消えた。

新たな冷却シートを取り出しながら、かなたは『さつさと元氣になつてほしい』と言い掛けた言葉を心の中にしまい込んだ。

## ひきこもり×読書

乾いた落ち葉を舞い踊らせる秋風が吹き抜けた。

夏の生温い風とは違い、やや冷たくなった風に、古めかしい家屋が並ぶ住宅街を歩く学生服の二人も温もりを共有するかのような繋いだ手を振って楽しそうである。

いや、彼と彼女は春夏秋冬、心底楽しそうに登下校を繰り返すだろう。

この学生カップルを、春夏秋冬カーテンが閉められた部屋でほとんどを過ごす、水澤かなたが見たらどう思うのであろうか。

無かった青春に後悔の念が募るのか、或いは別世界の話だと割り切ってなんの感慨もなく、テレビの青春恋愛ドラマを観るように冷めた瞳で見送るのだろうか。

しかし、窓の外も現実である。それから目を背けるためにカーテンをずっと閉めきっているかもしれない。

秋晴れの太陽が放つ紫外線が遮られ、僅かな光だけがカーテンを越して薄ぼんやりと照らす部屋。

年中、物の配置がほとんど変わらず季節感もマヒしてしまいそうな部屋の中、椅子に座りながら机に向かっていた。手には本を持ち、微かな明るさしかない中かなたの目は文字を追っていく。

読んでるのは、髪の色がおかしな美少女表紙に描かれたライトノベルである。数年前に中古本として買ったものだ。

かなたは漫画から、ライトノベルまで色々と読む。文学作品は難しく敬遠しているが。

本は暇つぶしとして最適だ。

ゲームもいいが、RPGは一度クリアしたら飽きてしまい再度起

動するのは億劫になるし、対戦ゲームも幼なじみで同じく青春をポイ捨てした、相原みずきがいなければすぐに飽きてしまう。

本ならばのめり込めればあつという間に時間が経過するし、読みたいときに開けばすぐに読めるという手軽さがある。

かなたはどうやら集中しているようで、かれこれ一時間は同じ姿勢で、ページを繰る指と黒目だけが動いていた。

「かなた」

と、ベッドで壁を背もたれにしながら声を掛けたのはみずきである。闇に浮かぶ座敷童のように気配もなくそこに存在し、ゲームーイアドバンスで遊んでいたが、それを傍らに置き、本を読む幼なじみの名を呼んだ。

かなたは無言で振り向いた。

「それ、何回くらい読んだ？」

いつもの眠いそうな瞳が、かなたの持つライトノベルを指し示し聞いた。あと少し暗さが増せばみずきの姿が紛れ、日の光が足りないのを如実に示す白い肌が露出した部分だけ闇に浮かびそうである。そんな部屋で、本の黒い印字が読めるのは、ひとえに暗さに馴れた結果だ。もつとも、それでも目を凝らさないと見えなかつたりし、目に負担を強いる読み方だ。現にかなたの視力はかなり悪い。

メガネやコンタクトが必要なくらいなのだが、持ってはいない。理由は金が掛かるからと、何よりは作るときに他人との接触が必要だからである。

そのような精神的に苦しい場を介すくらいならならば、対象物により近寄ってハッキリと見る方がマシだという考えだ。

「……五、六回くらいか」

この本を買ってから数年。半年に一、二回読み直してるからと、振り返りかなたは答えた。

興味なさげにみずきは身体を倒し、ベッドに寝転がる。量のある細い黒髪が顔を覆い隠し、呪いの代償として自らも身を滅ぼしたヒステリックな女性のなれの果てのようにも見える。



ちなみにみずきの視力も悪い方で、メガネやコンタクトを常用していておかしくはないのだが、かなたほど悪くはない。視界を黒い線で区切る髪や、パソコンモニターと向き合い、徹夜でネットゲーをし、限界を迎えては睡眠を最低限とる生活リズムを続けたこともあったのだが、体質なのだろう。

「飽きない？」

ど真ん中の棒球を投げるようなみずきの言葉に、かなたの心中の怒りが撫でられた気がした。

「たまにしか読まないし、飽きるまではいつてないな」

「でも、先の展開とか覚えてるんじゃないの？」

みずきの言うとおり、かなたは何となくではあるが先の展開は分かっている。

「推理物というわけじゃないし、覚えていても別に気にするほどでもないが」

「ん、そう」

と、やる気のない部下のような反応を試してみずきは黙す。髪の毛が顔全体を隠し、寝てるかどうか伺いしれないが、かなたは言った。「ネットゲーの方が飽きやすい気もするが。同じ事の繰り返しみたいだし」

以前もネットゲには疎いかなたがそのような発言をして、みずきはやや気分を悪くしたが、今日のみずきは元々振り幅の少ない感情を極限まで抑えてるのか、反応は薄く、

「……最近はずっとネットゲーしてるから」

ボソボソとそれだけ答え、壁際に寝返りをうつた。

「ネットゲのヒキ仲間もいっしょなのか？」

かなたは以前、みずきのキャラを使用してネットゲームをした時、ネットのヒキ仲間数人とチャットをしたことがある。印象に残っていたため聞いてみた。

「うん。名前は変わったけど」

「ドラ エの復活呪文じゃなくなっただけか」

「マエケン、くりはら、そよぎ、くろだ、ながかわ、になつてた」  
「誰かの趣味が如実に出てる気がするな」

また部屋は静かになり、あなたも机に向かい再度本を読み始める。  
少ししてみずきが、

「そういえば、あなた最近本買ってないよね」

あなたは振り向かず、ページを繰りつつ、

「ゲーム優先してるしな……本まで金に余裕がない」

「中古だと安く買えるんじゃない？」

あなたの読んでるライトノベルは近所の中古本を扱う店にて安く買った物だ。みずきも数年前あなたと一緒に観に行ったことがあった。

「あそこ潰れたからな……」

「そうなんだ」

みずきは薄い反応を示す。知らなかった事実だがこれ数年前に行ったきり、その店がある周辺すら足を運んでないため、潰れたとしてもおかしくはないと思った。

ちなみにその店が無くなったことで、本を定価＋消費税で扱う店しかあなたの行動範囲内にはなくなった。

「定価だと、どうにも手がだしにくいしな。潰れてからは買っていない」

「図書館は？」

「無理」

あなたは即答する。

「だよね」

みずきもそう返つてくると読んでいた。

図書館。

そこにはありとあらゆるジャンルの書物が一堂に会し、足りない知識を補うことができ、なおかつ金も掛からないという本を読む者ならば素晴らしい施設であることは変わりないのだが……

ひきこもりである二人にはそれを利用するには精神面の問題で大

きな壁があつた。

図書館に足を運ぶまではさておいて、中に入ってからが苦行になる。

幾多の書物の中から読むべきものを選ぶ。そこまでは、図書館の人の入りにもよるが、こなせるだろう。

しかし、タダで読めるとはいえそのまま持つて行つては窃盗になる。読書スペースを利用する手もあるが、絶えず他人に囲まれる環境に長時間居られる胆力があるならば、今の状態にはならない。

だから、借りて家で読むしか選択肢がないわけだが、購入して無言で金を払つて済むのとは違い、借りるには言葉を発しての手続きが必要だ。

その時点で二人にとっては借りるのを断念する大きな理由になるのだが、仮にそこを乗り切つたとしよう。借りた金は返すのが当然のように、借りた本も返さなければならぬ。ただでさえ外出に對してのハードルがあるというのに、数日してまた外出し、さらには返却手続きもある。

場所によつては返却ポストが設置されてたりするかもしれないし、パソコンを使用し無人で借りることもできるかもしれないが、そもそも、未体験である図書館というものの自体が足を竦ませてしまい、かなたは未だ本を借りたことはない。

「ほんと…色んな場所に行きづらくなつてんな……」

自虐的な枯れた笑い声をかなたは発した。

「ん、そだね」

みずきは同意し少しして、そのまま小さく寝息を立てて、眠りにおちていく。

かなたは幾度も読んだ本の続きを追つた。

部屋には秋の並木道のような、しんみりと、寂しげな空気が漂つていた。



## ひきこもり×みずきの日常

東の空から町に明るさと呼び戻す朝日が登り始める。そんな早朝。住宅街ではまだどの家々も静まりかえり、新聞配達員がせつせと人々が活動が始める時間帯に間に合うように、走りながらポストに朝刊をくわえさせていく。

そのうちの一軒の家屋。その二階にある一室。  
そこでは一人、既に活動を始めていた。

いや、語弊があつた。既にではなく、昨夜よりずっと活動している　　が正しいだろう。

閉ざされたブラインド越しにも朝の明るさが部屋を仄かに照らし、椅子に座るその人物の輪郭ををぼんやりと浮かび上がらせている。  
しかし、その人物は明るさを気にすることもなくパソコンに向かつていた。

精気のない眠たげな細目で見る先には、オンラインゲームの画面がある。多人数参加型RPGであり、同じくどこかの現実世界にいる仲間と会話をしながらモンスターを狩っている。

『マエケン、寝落ちか？w』

と、画面内では仲間の一人が動かなくなった仲間の名を呼んで訊ねたが、反応はなく、そのキャラはしばらく操作がないとする欠伸の動作をしている。

『三人寝だな』

違う仲間の発言を見て、彼女はカタカタと手慣れたブラインドタ  
ツチでキーボードを打ち、  
『解散する？』

画面上ではただのゴシック体の白文字だが、不思議と淡々とした印象を受ける言葉が、彼女のキャラから吹き出して発せられる。

『そうだな。こいつらどうする?』

『放って置いていいだろww起きたら倒れてるキャラを見るのは気の毒だがw』

『おつかれ』

『ミズキさんは、これから寝んの?w』

『ん、多分』

『俺もかなり眠くなってきた』

『くろだには聞いてねーよw』

『んじゃ、後でメールするわ。おつかれ』

と、画面内でのやり取りを終え、ミズキこと相原みずきはパソコンの電源を落とし、長時間同じ姿勢でいた身体を解すように組んだ手を天に挙げ背筋を伸ばし、椅子から立ち上がる。

一度、明かりを漏らすブラインドを見て、次に壁掛け時計を見て朝になっているのを確認し、欠伸を一つ。

そして壁際に畳まれ、日中はソファア代わりにもしている布団を敷いて、ようやく就寝する。

みずきにとって、今の時間は昨夜の延長であり、三十時ともいえる。これが一日の終わりである。

みずきが目を覚ましたのは、太陽が青空に完全に顔を出した時間だった。

ブラインドから漏れる陽の位置が、ちょうどみずきの顔に掛かり、睨越しに感じる眩しさに眉間にしわを寄せ、亀のように布団に頭を引っ込める。

目覚ましになるものを置いてないみずきにとって、その陽が目覚

めの合図にもなる。

数分後。

みずきは怠け者の亀よりもノロノロとした動きで布団から這い出てくる。立ち上がると、髪は酷い寝癖だった。

金髪だったならば、スパーサ ヤ人3に目覚めたのかッ！？

と誰かが見たなら驚愕の表情を浮かべるくらい、髪の毛がピョコピョコと跳ねていた。跳ねまくっていた。

そんな寝癖を軽く撫でつけ、前髪を左右にかき分けて視界を確保したみずきは、ゆっくりと窓へと歩み寄り、ブラインドを上げ、部屋に日光を取り込む。

もう一方も同じようにし、そのまま窓の外を眺める。日射しを浴びる姿は普通ならば爽やかさがあるが、寝ぼけ眼で虚空を見るようなみずきだと、このまま溶けていってしまうのではないかと心配になる。

みずきの視線の先には、隣家の窓がある。カーテンが閉め切られているその部屋には幼なじみが今日もひきこもっていることだろう。陽を、それこそ吸血鬼のように嫌う幼なじみとは違い、みずきはなるべく日中は陽を部屋に招くようにしている。壊れ掛けた体内時計を少しでも正常に近づけたいのと、不健康な肌の色を少しはよくしたいという希望的観測からだ。

もっとも、徹夜でネットゲームをしたりして生活リズムは昼夜逆転にほど近く、肌はライトに照らされたら血管が見えてしまいそうなくらい白い。

スーッという擬音が当てはまるくらい、気配も足音もなくみずきは一階へと降りてきていた。

洗面台に向かい顔を洗ってから、櫛で寝癖を梳かす。みずきの髪質は悪くはなく、櫛を入れて下ろすと特に抵抗はなく髪を通ってい

く。

丁寧に膝まで伸びる毛先まで梳いていき、十五分程度の時間を経て、超ロングストリートヘアへと変貌を遂げた。

それから、風呂場前に置かれた洗濯機に洗濯物を突っ込んで、スITCHを回してから。みずきは洗面所を後にした。

台所に来たみずきは、コップに水道水を注ぎこくこくと飲んで喉を潤した。冷蔵庫を開ければ腹を満たせる材料が一応はあるのだが、開けずに居間へと向かう。

長年、一日一食の生活を続けていたせいか朝昼を食べなくとも、空腹はさほど感じることもなくなった。

みずきは日中の居間というのが苦手である。

道路側に面した、大きなガラスの引き戸があるためだ。そこを開けると猫の額な狭さの庭に通じ、通りからは目隠しになる塀があるのだが、大人の背丈だと頭一つ分がはみ出る高さしかなく、簡単に覗くことができる。みずきはそれが怖かった。

覗かれて姿を見られてしまい、近所の主婦の噂話にされるのではないかと常に頭の片隅に被害妄想としてある。それに人の姿がこちらから見えることも嫌だった。

メジャーリーグの球場、フェンウェイパークのグリーンモンスタ―のように、そびえ立つ高い壁だったならば、庭で洗濯物を干すこともなんとか出来そうなのに……等とたまに考えるが至極不可能な話だ。

そもそも、一軒家にそんな高い塀があつては注目され、余計に出づらくなりそうだがみずきの考えはそこまでは回ってなかった。

では何故みずきが居間に来たかという、持って来た物からして答えは明白だ。



コンセントを差し込み、スイッチを入れるとまるで人が深呼吸をしたような空気を吸いこむ音になる。

『静かな音をしてるだろ？　これ、掃除機なんだぜ？』と某青春野球アニメの名シーンっぽく言いたくなるくらい、音が静かで排気もクリーンな掃除機で居間のゴミを吸い取っていく。

その動きはまるで掃除のタイムアタックに挑戦しているのとは思えるくらいに、みずきの纏う雰囲気とは裏腹にテキパキと角まで丁寧に、それを素早くこなしていく。

少しでも居間にいる時間を減らしたいがために身に着けた技術だ。

自室に戻ったみずきは、着替えをする。水玉模様のパジャマから、ねずみ色のスウェット上下になる。普段はこのような動きやすい服装が多い。極稀に外に行くときや、気紛れでワンピースやスカートなどを着たりすることもある。黒系をよく好む。

脱いだパジャマを丁寧に畳んでから、予め電源を入れておいたパソコンの前に座し、マウスを掴む。

馴れた動きでメールボックスを開くと、数件のメールが届いていた。

まず一件。差出人はネットゲーム仲間であった。ゲーム内ではくろだと呼ばれていた人だ。

『おはよう。』

今日は“蒼白の宝玉”狙いも兼ねて“水龍の洞窟”で狩ろうかと思ってるんだが、来れるか？

回復はあったほうがいいが、他にしたい事があるならもちろん優先して構わない

今更言うのもなんだが、ネトゲを最優先にするような廃人にはならないようにな

次の一件。妹のなぎさから。

『お姉ちゃん、最近ちゃんと食べてる？』

アタシの方はちよつと体重がヤバめになつてて（泣）

だから、よく食べて、お姉ちゃんも増える辛さを分かつてほしいかな〜なんて思つたり……

けど、ホントちゃんと食べなきゃダメだからね！』

最後の一件はネットで知り合つたメル友からだ。

『FFVのオ　ガはどうやって倒せばいいか分かる？』

みずきはメールを読み終え、カタカタと最後のメールにだけ、魔法剣サンダガを　などと事細かに打つて返信を終えると、席を立つた。

再び一階に降りたみずきは、仕事を終えた洗濯機から、洗濯物を取り出し、それらをカゴに入れて二階へと上がる。

前述の通り、外から姿を見られるのを嫌うみずきはベランダで長々と洗濯物を干すことはできない。来たのは元々来客用として使う空き部屋で、そこは普段、洗濯物を干すスペースになっている。

ここは、視線を気にする必要はないためゆっくりと洗濯物を干していく。ちなみに部屋干しでも二才わないが売り文句の洗剤を使っている。

それから残りの家事をこなしてから自室に戻り、パソコンの前に座るみずきは、ほぼ日課といってもいいお気に入りサイトの巡回を始めた。

ブログやら動画サイトやら掲示板やら様々で、机に頬杖を付きながら、無言でマウスを操作する音がかれこれ一時間は続いていた。起床から、掃除洗濯とこなし、こうしてサイトを辿った後何をするかは特に決まっていらない。

みずきは椅子に座ったまま、何をするか捻り出すように目を瞑る。時刻は三時前。近所に住む小学生が帰宅する時間帯で外からは楽しい声が聞こえてくる。

隣の幼なじみの家に行こうか。

夜に向けて仮眠しようか。

パソコンで何かしようか。

などと考える。

みずきの部屋には本が疎らに詰まった本棚しか、パソコン以外の娯楽はなく、家庭用ゲームなどがしたい時は幼なじみの家に行く。

裏の勝手口から出て、歴戦の傭兵のように気配を殺して、人の視線を避けながらならば日中だろうと行くことができる。

しかし、今日はそのような選択ではなくみずきはネットゲームを始めた。

その後、静止画を見るようにみずきはパソコン前から離れず、合間に乾いた洗濯物を取り込んだたみ、夕食を食べ、風呂に入る、などを挟みつつ、ネットゲームを続けることとなる。

今日も夜明けまで続けることとなりそうだった。

## ひきこもり×かなたの日常

朝の陽射しを浴びながら、チュンチュンとスズメが電線に集まり合唱していた。

スズメ達が見下ろす先には住宅街が広がり、ランドセルを背負った子供や、寝癖と時間を気にしながら走る学生。一家のために頑張るスーツ姿の男性がそれぞれの目的地へと急いでいた。

どの家々もカーテンを開け放ち、窓も開けたりして空気を入れ替える中、未だカーテンが閉められたままの部屋があった。

それを見てか、一羽が首を傾げる仕草を見せた。単に何気ない行動であるのだろうか。

そのカーテンが閉められた部屋は当然ではあるが薄暗かった。朝の陽射しがカーテン越しに僅かな明るさを通すおかげで、やや乱雑とした物の配置が把握できるが、日が陰れば真つ暗闇に閉ざされ、仮にCDケースが置かれていたらバキツと、踏みつける確率はかなり高いだろう。それが大事にしている物である可能性は確率論を無視して不思議と高い。

壁際にあるベッドでは人が寝ていた。

時刻はテレビでは占いコーナーが始まる七時五十八分。学生だろうと公務員であろうと慌てる時間ではあるが、彼はどちらでもないから関係ない。

ひきこもりである水澤かなたにとって、起床しなければいけない時間というのではない

『別に好きでアンタを起こしに来たワケじゃないんだからッ！ 勘違いしないでよねッ！』

ツンデレな台詞が部屋に響いた。

そう、ベッド脇には、腰に手を当て彼を見下すように睨むツリ目の美少女が　いるわけがない。発信源は枕元に置かれた携帯からである。

その声優（ツンデレ役多し）の目覚ましボイスを聞いて、かなたは起きあがった。未だ眠そうな目を擦った後、ネクロマンサーに無理矢理起こされたゾンビのようなのっそりした動きで一階へと下りていった。

『別に好きで　』

誰もいなくなった部屋でスヌーズ機能により、もう一度ツンデレボイスが鳴った。

誰でもそうであると思うが、まず、かなたも起床一番に洗面台へと来ていた。

鏡に映るボーッとした表情をした自分を見ながら、寝癖をなおす。前髪が目を覆い隠すくらいにまでなり、寝癖も派手さを増してきた。それから歯を磨く。

歯磨きの理想的な時間は十分などと言われてたりするが、かなたの歯磨きタイムはカップラーメンが固めの仕上がりで『しまった。まだ早かったか』と後悔するくらい早かった。

居間に入ると、母親からの朝の挨拶を気の抜けた生返事で返し、テーブルの上に置かれた新聞を手にとってから、台所へと向かう。あまり長い時間、家族と居合わせるのをかなたは嫌う。それは自分の存在を申し訳なく思う気持ちがあるのと、会話を振られるのが怖いからだ。日常会話の流れからいつ、自分の痛いところを突かれるか分からない。

台所に来たかなたは新聞をダイニングテーブルに置いてから、冷蔵庫を開ける。

かなたの朝食というのは基本的に残り物である。昨日のおかず、或いは冷や飯を温め、それだけでは味気ないと卵かけご飯にしたりする。

だが、今日はおかずの残りも冷や飯もなかった。そうすると第三の選択肢として食パンを選ぶ。

食パンを一斤とイチゴジャムを取り出してテーブルに置き、トースターにセットする。

その間を、新聞を読んで過ごす。

といつても、政治経済どころか一般のニュースにすら興味がないかなたが読む部分は限られる。ラジオ・テレビ欄で深夜アニメの放送時間が他番組に狂わされてないか見る。特にスポーツ中継が延長ありの場合は正確な時間が分からず忌々しい存在だ。

あとはざっくりと他の番組の内容を確認し終わると、タイミングを見計らってたかのようにこんがりと焼けたパンがトースターから飛び出した。

ジャムを満遍なく行き渡らせたトーストを片手に、テーブルに広げた新聞に目を落とす。

興味ないと書いたが、かなたは社会面も一応は目を通す。度々思い出したかのように引き起こされる“ひきこもり”が関わった事件があるかの確認のためだ。

普段、テレビのニュース番組を全く観ようとしなかったため、もし、こういう事件があればまず新聞から入ってくる。もしくは、隣の幼なじみから入ってきたりもする。それから、どのような取り上げ方をされてるのか気になりテレビのニュースを観る。

あと、事件以外のひきこもり記事もたまにあるため、とりあえずは流し読んでいき、トーストを食べ終わると同時に全て読み終えた。

朝食を終え、自室に戻ったかなたは携帯片手にベッドに仰向けに

なっていた。

もはや携帯“電話”ではなく、携帯ネット通信端末兼たまにメール送受信機器となっているそれで、とあるサイトを観ていた。耳にはイヤホンはめられ、携帯でダウンロードしたお気に入りのアニソンが流れている。

観ているサイトはウェブ小説サイトで、あなたは続きを追っている小説がいくつかあり、更新されていた最新話を読んでいる。

読み終える少し前に、ピーピーとバッテリーが空っぽだと伝える音が鳴り、少しして悲しげなピー音とともに電源が切れると、あなたは携帯を置き、体を横に向けた。二度寝をするでもなく、ただゴロゴロしている。

ちなみにあなたの携帯は、買い替えたのは四年前に遡る古い型だ。定額プランをフル活用し、当初三日もたずで充電するくらい酷使していた所為か、バッテリーの寿命はどんどん削られていき、今や使わずとも一、二日でヘタれる軟弱携帯となれ果てた。

機種変更の予定は当面ない。金銭面の問題もあるが、手続き時に受ける精神的疲労の問題の方が高い壁だ。

その為、腰を据えてネットを利用するには充電した状態で、ほぼ有線で使っしかないのだが、あなたの携帯でのネット利用は小説閲覧や、音楽のダウンロードくらいである。

本格的にサイトを観る時は、パソコンがある、隣家の幼なじみの部屋に行つて使わさせてもらうことが多い。

数分が経ち、あなたはようやく起き上がると、携帯を充電し、薄暗い部屋を見渡して考えを巡らした。

テレビゲームをするか、幾度も読んだ本をまた読むか、あなたが部屋で暇を過ごす事は主にこの二通りだ。あとは、幼なじみの部屋に行つて適当に過ごすしかない。

少しだけ悩んだ挙げ句、あなたは結局ゲームを始めた。

既に、色んな遊び方を試し、しゃぶり尽くした感があるコミュニケーションゲームである。

収入というのが基本的には皆無なかなたにとって、お金は社会人の価値観とは比べものにならないくらい高い。希少品だ。

一つのゲームに飽きたからといって、おいそれと新品を買えるものではない。

だから、今日も幾度も見たゲーム画面を眺め、半ば無理矢理ゲームに集中しようとする。何もしない時間を作りたくはないと。

かなたがゲームを始めてから、特筆して伝える事はなかったと伝えておく。

時刻は再放送ドラマを見終わった主婦が晩飯の献立を思い描く頃になった。

かなたはというと、未だゲームを続けていた。

続けていた、といってもずっと胡座を組んだ置物になっていたわけではなく適度な 某名人のお言葉にならうくらい 休憩を挟みつつではある。

休憩中することはベッドに横になり、夢想したりしていた。そうしながら今日も一言もまともな言語を発してないことに気付く。かなたがちゃんとした会話をする相手といったら幼なじみしかないのだが、最近はネットゲーに熱中しているようで見てはいない。

ゲームを終了し、かなたは階下より立ち上ってきた夕飯の匂いに鼻孔をくすぐられながら、充電し終えた携帯の電源を入れ、ベッドにダイブする。

少しして、部屋にアニソンが大音量で響きわたった。発信源は携帯からで、ネットじゃ神曲と崇められる曲は、メールが届いたことを示していた。

かなたの携帯にメールを送る人はかなり限られる。最近はめっきり減った迷惑メールと、あと数人。それも一ヶ月鳴らないことも珍



しくない浅い付き合いである。

今日は二件来ていた。

一件は顔を思い浮かべることができる相手で、

『かなちゃん、最近どう？ 元気？ アタシのほうは 』

との、書き出して近況報告のような、雑談的な文が続き、

『 まあ、そんな感じです。 んじゃね 』

取り立てて中身のない文面を読み終え、律儀にあなたは返信をしておいた。

同じく幼なじみに属するであろう、隣家の妹からは度々このようなメールが届く。

もう一件は顔は知らない相手からで、

『 フローラとビアンカどっちにすればいいの？ 』

律儀にあなたは『好きにすればいい』と書いてから自分の考えを付けくわえて返信し、階下より夕飯にするとの声が聞こえ部屋を後にした。

夕飯を終えたあなたは部屋に戻り、食後の休憩とばかりにベッドで眠りに入る。

深夜放送のアニメを観るための仮眠だ。

太陽が月へのボタンタッチを終えてしばらく経った頃、あなたは目覚めた。

部屋は月明かりを阻むカーテンにより、光源は全くない。まるで黒い布を頭から被されたような視界の中、あなたは立ち上がり、一

歩、二歩、と歩きタンスを開けて着替えを取り出し、部屋から出て、風呂へと向かっていった。

しかし、この部屋。開けっ放しのゲームパッケージに、ゲーム機、コントローラー、ロードの合間に読んでいた漫画などが、床面積の半分は占めていて足の踏み場が限られているのだが、あなたは物の場所を把握しているのか、或いは暗闇に目が馴れているのか、踏むこともなく一連の動作をこなしていた。

風呂を終え、部屋に戻ってきたあなたは今日初めてカーテンを開け、窓を開ける。

秋の冷たさを纏った風が、風呂上がりの身体から体温を奪っていく。

乾ききつてない髪をかき乱し、夜風に当たりながら、あなたは端が欠けた満月一步手前の月を仰ぎ見てため息を吐く。

首を戻し、視線を真っ正面に向けると幼なじみの部屋の窓が見える。

その部屋はブラインドが降りており、中を窺い知ることができないが、パソコンのモニターからと思しき微かな光が漏れていて、またネットゲーをやっているんだろうとあなたは想像する。

しばし、窓の外を眺めた後、窓を閉め、アニメの時間まで何をしようかとあなたは考えながらカーテンを閉じた。

## ひきこもり×小説(1)

「……………これ」

薄暗い部屋に幽霊のように現れた人影は、水澤かなたの近くへと歩み寄り、机に静かに一冊の本を置いて、黒い影のようにスーと相原みずきは引いた。

「ああ」

返却された本を見て、かなたは生返事をする。みずきが定位置であるベッド端に腰かけたのを見て、

「どうだった？」

と、返された本の感想を問う。

「ん、内容としては普通………だけど、」

みずきは語彙のないありきたりな感想を返し、やや間を作って、

「あんまり、ひきこもりじゃなかった」

「だな」

かなたはみずきの言葉に共感するように小さく頷き、苦笑いめいた表情を作った。

「ヒキ年数はともかく、わりと外に出ているしな。ま、物語的にそうじゃないと面白くもないし、一般受けもしないか」

「一人暮らしだから仕方ないとは思うけど………その時点でちょっと違うかなって思ったかな。一人暮らししてる人の話は掲示板で観たことあるけど」

「ま、簡単な内容はアニメ化とかしてた頃に知ってはいたがな。観てはいなかったが。どうにも共感できる部分は少なかった。ありがちなネタはあったが」

「でも、私達みたいなひきこもりだったら、話作れないと思う」

「………確かに。何も話が進まなそうだ。呼び鈴も電話もでないし」

「台詞も独り言だけとか」

「脳内友人との会話とかはありそうだが」

「それ、虚しいだろうし、ツマんないと思う。脳内でも現実でも、一つの場面で主な登場人物二人で延々と会話するだけの話なんて誰が面白いと思うの？」

「やけに具体的に手厳しい言葉だな……」

あなたは感想を話していた本を手に取り、何気なくパラパラとめくっていく。

本の内容はというと、簡潔に言うといきこもりを主人公とした小説で、その設定を活かした物語になってはいるのだが、会話の通り、二人の評価は芳しくない。

それは、主人公が自分たちよりまともだという一種の妬みともいえる。あと、二人で会話し続ける話でも書く人の力量で面白い話は創れるだろう。

あなたがこの本を買ったのは数日前の事だ。好きなライトノベル作家の新作が発売されるという情報を、予めネットで知ったあなたは、悩んだ挙げ句財布の紐をゆるめて買うことに決め書店へと向かった。

目当ての作品を探してるうち、見つけたのがコレであった。過去にアニメ化などで注目され、いきこもりが主人公だということもあり、あなたはタイトルだけは知っていた。気になってもいた。

しかし、中古本ならともかくその書店は定価でしか扱っておらず、ましてや数年前の作品。もし、あなたにブッ オフまで行ける行動範囲があればそっちに行き安くなっている方を買うが、無理な話だ。一度手に取り、値段を見て逡巡する。

数十秒が経ち、店内に部活帰りらしき少女少女の団体がやかましく入ってきた音を聞き、素早い決断を迫られた。

その本を取り、目当てのライトノベルと、みずきについでにと頼まれた雑誌を見つけると会計を済ませそくさと店内を後にした。

これがいきこもりが主役の小説を手にした経緯である。

「コレみたいに、美少女が脱ヒキさせてくれたらいいのにね……」  
儂げな表情でみずきは言った。

「コレはそんな都合の良い物語というわけでもないけどな。つか……美少年じゃなくていいのか？」

「ん、どちらかというと美少女がいいと思ってるけど」

「そか。……ま、絶対にないだろうが」

「だね。部屋まで来てくれない限りは出会えないだろうし」

「不法侵入か」

「……詮詮、空想の話だし。ありえないよね」  
「だな」

かなたは瞼越しにもしっかりと感じる眩しさに対抗するように、ギョツと目を瞑って半ば無意識的にかけ布団を頭から被った。

クスッ。

と、布団の外側から聞こえる上品な笑い声に、半覚醒のかなたの脳内に疑問符が浮かんた。

誰かいる。携帯の着ボイスではない。感覚的な物ではあるが、人の気配が確かにある。

かなたの部屋を、朝っぱらな時間から訪れる人物はかなり限られる。両親、或いは幼なじみしかない。両親は滅多なことじゃ朝から部屋には来ないし、幼なじみも僅かに確率が上がるくらいで似たようなものである。

そもそも、短い笑い声の中にもはっきりとある清涼感のみずきには出せないだろうと候補から消すが、そうすると思えば当たる人物は全くなり、布団の外側にいるのは記憶にない第三者ということになる。だとすると、やはりみずきなのかもしれない……と、頭

を出し確認しようとした時、

「起きてください。いいお天気ですよ」

その透き通った声により、みずきの線は完全に消えた。そして第三者だと確定的となった。

ニユツと布団から髪だけを出した状態でかなたの動きは止まっている。

自分の部屋に見知らぬ人がいる。

それはかなたにとって、自分の住処に天敵が居座っているような、どうしようもない怖さがあった。

一分ほど、かなたは微動だにせずにいたが、見知らぬ人も声も物音も発しなかった。少し冷静な思考を取り戻したかなたは考える。

まずは幻聴じゃないかと疑ってみる。第一、見知らぬ人物が二次元の世界にしかない幼なじみめいた台詞で起こしにくるはずがない。

しかし、声が幻聴だとしても、瞼越しに感じた眩しさはどういう訳だろうと考える。無論自らカーテンを開け放って寝るわけがないし、誰かが開けた可能性も少ない。「……………」

こうして布団を被り熟考したのち、かなたは頭を出してみることにした。九割九分誰もいないだろうと思いつつ。誰もいなければ幻聴で、夜風に当たった時うつかりカーテンを閉め忘れたという結論で済ますことにしようと考えつつ。

警戒するリスのように、かなたはゆっくりと布団から頭を出し、目の部分だけ出すと、残り一分の可能性が待っていた。

「おはようございます」

そこには太陽のように柔らかな笑みを浮かべる見知らぬ少女がいた。

ああ。これは夢だな。

かなたは即座にそう答えを出した。

（起きたら目の前に美少女がいたとか現実じゃありえないことだ。マンガやラノベじゃあるまいし。

そもそもこれが現実という設定だとしたら、長編が始まりそうだし、だったらここまでの話はなんだったんだと。ここは結局は夢オチということにして話を終わらす展開だな）

後半に意味不明な理由を展開しながら、かなたはそう夢だと結論づけた。

だが、夢だと思いつつも、見知らぬ人物にかなたは少女の顔に視線を合わせたまま固まった。

少女は布団から顔を半分覗かせて寝ぼけ眼を向けるかなたに、  
「あなたは脱ヒキプロジェクトに選ばれました」

そう告げられ、かなたは視線を天井に向け『大丈夫なのか？』と言いたげに虚空を見つめた。多分、大丈夫。

「……は？」

とりあえず起き上がって、かなたはベッドの上に行儀よく正座し、怪訝な顔になる。

肩口まである栗色の短い髪を持つ少女は、みずきと比べると健康的な色合いである手を胸にそつと当てて、口元を緩ませ柔らかない笑みを浮かべ言った。

「私は外原海<sup>そちはらうみ</sup>。ひきこもりの水澤かなた。つまりはキミを助けに来ました」

かなたは寝癖で乱れた髪を掻き、鳥の巣のようにし、窓の方を見るとカーテンは開け放たれ、麗らかな光が床に窓枠の影を作っていた。

「え、あ……」

かなたはパクパクと魚のように口を開くが、言葉が出てこなかった。

ただでさえ、他人との会話に対して戸惑うというのに、自分の部屋に唐突に現れて寝起きに声を掛けられては、優しくフレンドリーに話しかけられようと、上手く言葉を紡ぐことができない。

それを見て外原海は口元を手で抑えてクスクスと上品に笑い、「そうですね。突然過ぎましたよね。私、部屋の外に出てますから、話を聞く準備ができたと言ってください。ずっと待ってますから」

言って、外原海は部屋の外に出て、ドアが控えめな音を立てて閉じられた。

「……………」

ドアを見ながら、かなたは心労を出すかのようにため息を吐いた。

不法侵入者がいる。と、携帯で110番とも一瞬考えたが、警官が部屋に来られても困るし、そもそも電話をしたとして事情を話せるわけがないとすぐに払拭する。

それに不安も大きいが、期待感もあった。

見知らぬ少女が部屋に来て、手助けをしてくれると言う。

怪しいを通り越して訳が分からない話だが、かなたにとっては一流企業から内定を貰えるような願ってもない話でもあり、僅かながらも期待してしまう。

壺でも売りつけられそうになったら、お引き取り願うかと、一度深呼吸してから外原海を呼んだ。

部屋には静寂が降りていた。

いつもの指定席である椅子に座るかなたと、ベッド脇に座る外原海は、互いに言葉を発さない。



かなたは視線の居所を探すように部屋を意味なく見渡し、外原はかなたをジッと見ていた。

『まず、質問がありますか？』と外原はベッドに腰掛けながら言つて、考えるかなたを待っている　という図である。

ようやく、投げかける言葉を見つけ、言うことを決意したかなたが、

「……勝手に部屋に入るのは非常識じゃないか？」

玄関には鍵が掛かっておらず、階段も玄関脇にあるため入ろうと思えばいつでも侵入可能ではあるのだが、それは常識から外れた行動であり、法にも触れるだろう。

「いまさら疑問に思うことでもないと思いますし、それより本題に入れる質問を期待していたんですが。がっかりです。アホ、ボケ、カス。です」

外原は、柔和に微笑んで、澄んだ声のまま罵倒を浴びせてきた。最後の、『です』が、デスと即死魔法のようにかなたには聞こえ、

「……悪い。脱ヒキプロジェクトとはなんでしょうか」

棒読みめいた口調でかなたは本題への道筋を作るように聞いた。

外原海はエホンとわざとらしく咳払いし、

「えとですね。幾つかの脱ヒキに向けてのカリキュラムをこなしていつて、それらを見事乗り切った時、晴れて……ハレて！　ユカイに脱ヒキできるというプロジェクトなのです」

両腕を広げながら、力強く外原海は言い切った。

「……………」

そのままじゃん。というツツコミをかなたは飲み込んで冷めた目を向ける。何故、晴れてを強調するのか。

「分かりましたか？　バカでも分かる説明だとは思いますが」

どうしたものかとかかなたは考えるフリをするように髪を掻き乱してから、拳手をした。

「はい、かなたくん」

外原は優しい先生のように微笑み、手のひらでかなたを指し示し、

質問を受け付けた。

「……カリキュラムっていったい何をするんだ？」

「言えませんが……と、拒否権を発動したいところですが、いいでしょう。最初のだけは特別に教えてあげます」

かなたは机に頬杖を突き、聞く姿勢を見せて続きを待つ。

「まず、脱ヒキへの第一歩としては人に馴れなければいけません」

ピツと人差し指を立てて、外原はニコリと笑う。かなたはウンウンとやる気なさげに首を小さく上下させる。

「なので、第一カリキュラムは、狭い部屋でひしめく百人の一般人の中に放り込んで、三日過ごしてもらいます」

指を三本立てて外原は言った。

かなたはおしくらまんじゅうな人混みの中に有無を言わず放り込まれる自分を想像してから、

「死ねるな」

と、自虐的に笑ってみせた。

「貴方みたいな人を日の下に引きずり出すには、このくらいの厳しい治療が必要ですから」

「かもな」

フフ……とかなたは笑う。

「そうです」

クスツと外原は笑う。

フフフ。

クスクス。

十秒ほど笑い合っただろうか、絶妙な間を空けてかなたは、

「断っていいか？」

外原もこれ以上ない絶妙な間で、

「駄目です」

ニッコリ微笑んでみせた。

## ひきこもり×小説(2)

『駄目です』

脱ヒキプロジェクトに難色を示した水澤かなたの発言を、外原海は、背後に澄み渡る空と高原が似合いそうなくらいの爽やかな笑みを浮かべながらスッパリと言い切った。

細めて笑みを作る眼には『断ってんじゃねえよこの野郎』と言っているようにも見え、かなたは唐突に現れ、理不尽な事を突き通すつもりであるう少女に対し説得を試みた。

「いきなり、大人数は無理というものじゃないか？　ここはもったい、一対一から徐々に馴らしてもらった方が……」

まるで上司に意見するかのように言葉尻が弱くなっているかなたの言葉に、外原はムツと不満げに眉を寄せ、

「そんなヤワなことじゃ、良くはなりません。アナタみたいのには荒療治が必要だと書いてありました」

「何に？」

外原海は、ピンクの手提げポーチを探って、紺色の手帳を取り出し、表面を見せつけるようにかなたへと突きだした。そこには金色の字で、

「『ひきこもり脱出マニュアル』？」とあった。

心底怪訝だというくらい表情をかなたはする。が、外原はその顔を無視し、

「はい。これにはどんなひきこもりでも社会へと出すことができる秘策が載っています」

自信ありげに言うと、手帳をめくっていき開いたページを再びかなたへと突きだした。読め、ということだとかかなたは認識した。渋々かなたは顔を近づけた。

「あー、『ひきこもりの対人への苦手意識を克服するには、大量の人混み中に放り込むのがいい。最初は恐怖や緊張により心臓が破裂

しそうになるだろうが、いずれその場に馴染もうとし、人への苦手意識を克服することができる。』」

棒読みであなたが読み上げると、  
「分かりましたか？ これも大事な脱ヒキプログラムの一貫だということが」

勝ち誇ったように外原は胸を張る。

「次のページめくってくれ」

あなたは外原に命じ、一瞬ムツとなったが外原は言われたとおりにする。

上記の説明文はページの端の角まであり、まだ続きがあるようにも見えた。

あった。

「『 私は思うのではあるが、実際のところどのような結果になるかは分からない。何故なら試したことがないからだ。誰か試して結果を報告してくると有り難い』」

読み終えて、あなたは『だそうだ』という視線を外原に向けた。

「けど、やってみないと分かりません。人は間違いを繰り返して正解を導くんですから」

「……言ってることは立派だが、俺の立場も考えてくれ」

「では、アナタの意見も取り入れまして、十人にしてあげます」

と、外原は妥協案を申し出てあなたの返答も待たずに立ち上がり、  
「では、行きましょうか」

あなたは小さく首を傾げた。

「どこにだ？」

対して外原も小首を傾げた。

「何言ってるんですか？ 脱ヒキプロジェクトその一を実行するんですよ？ 三步も歩かずに忘れる鳥以下の頭なんですか？」

「いや、今すぐになのか？ そんなこと一度たりとも聞いた覚えがないのだが」

あなたの指摘に、凶星を突かれた顔になり外原は目を泳がせた。

「そんな細かいことはどうでもいいです。早く行きますよ」

と、外原は椅子に座るかなたの腕を掴み強く引っ張り連れたそうとした。前のめりにバランスを崩しながら、かなたは立ち上がった。「行くのはいいが、もう一人そこに連れて行きたい奴がいるんだが……いいか？」

同類な幼なじみの顔を浮かべながらかなたは聞いた。

どうせ十人の中に入れられるなら、理解ある仲間が居れば多少は耐えられるとも考え、何より自分だけ巻き込まれたくないと思った。

脱ヒキさせるのに一人も二人も大して問題はないだろうと、外原の答えを待つ。

振り返った外原の表情は酷く冷めていた。背景に南極が見えそうな程に。

「駄目です。脱ヒキできるのはあなた一人だけです」

その冷たさを乗せて外原はそう告げた。

外原は再度ベッドに腰掛けると、微笑に戻し、かなたの苦い表情を見て続ける。

「今回選ばれたのは水澤かなた、キミ一人だけです。それ以外の参加は認められません」

かなたは考えを巡らせながら、窓の方を見た。普段ほとんど開けていないカーテンが全開になり、朝の陽射しを部屋へと注いでいる。窓の先には、ブラインドが閉ざされた隣家の二階の窓が見える。幼なじみの部屋の窓。

今は徹夜明けで寝息を立てているであろう姿を想像して、かなたは外原を見る。

「だったら、俺はいいから、他の奴をそのプロジェクトに推薦するのはどうだ？」

外原は首を音もなく左右に振った。

「駄目です。選ばれた本人以外の参加は認められません。決まりで

すから。一応、断ることだけなら可能ですが、どうしますか？」

事務的な口調で外原は告げる。

かなたは唇を噛み、突っ立ったまま思考する。

脱ヒキできる それは人生の袋小路にいる自分にとっては願ってもない話だ。

だが、そこから抜け出せる可能性のある切符は自分用のしかない。取り残されたもう一人はどう思うだろうか。と、かなたは表情の乏しい顔を脳裏に浮かべる。そして外原を見る。目があつて微笑する。目があつてもほとんど表情を変えないソイツとは正反対だ。

もし浮かべても、ニコリじゃなく、ニヤリが的確な笑みだろうと、たまに見せる笑みを思い出す。確かにニヤリと表現した方がしっくりくる。

かなたはニヤつと口の端を緩める。

恐らく、社会へ出ることを伝えたら、感情乏しく『ん、そう。よかったね』と淡々と言うのだろう。

それが心からの言葉かは分からない。けれど、止めることはないだろう。止めたところで今が続くだけなのはよく分かっている。

しかし、残された一人は寂しさに身を縮めるのだとかなたは思う。寒さに紛れるように身を震わせて体を抱くと思う。

だが、一人はそれを伝えはしない。それを出す術を忘れたかのように表には出したりはしないだろう。

感情は、奥深くに氷付けにされたように、普段出すことは滅多にない。

だけど、ずっと付き合ってきたかなたには氷付けされたその心の奥で体を丸めるソイツの姿がよく見える。

表には孤独に馴染もうとしているが、本当は孤独を大に嫌う、極度の寂しがり屋であるソイツの心を。

その奥底を考えてしまった時、かなたの口が自然と言葉を紡いでいた。

「断る」

かなたの顔は晴れていた。

「本当にいいんですね？」

真面目な表情で外原は確認をする。

かなたに迷いはなかった。

「ああ。これが『はい』を選ばないと永久にループするイベントだろうと俺は『いいえ』を選び続ける。そちらの一人だけという考えが変わらない限りな」

RPG的な例えを用いて自分の確固たる意思を伝えて見せた。

「そう、」外原は僅かに悲しげな顔を浮かべ「ですか」

言つてすぐに微笑みに戻る。

「分かりました」

小さく頷いて、外原はポーチを探る。

何気なくかなたは手の動きを目で追うと、取り出された物を見て目を見開いた。

陽の光に晒され、ソレは黒い光沢を持っているのが分かる。ドラマや漫画でしか見たことがないソレを、偽物か本物か判断する眼はかなたにない。持ったら重さとかで分かるのだろうか　と、考える間に、外原はソレを構えて、かなたへと狙いを向けた。

「……モデルガンだったとしても、人に向けては駄目だと注意書きされているはずだが？」

口元をぎこちなく緩め、精一杯の余裕を醸しだしかなたは言った。黒い銃口を睨みつけるように見る。まるで超小型のブラックホールのようで、見てると怖さが次第に増してくる。

「あ、ホンモノですよ？」

ニコリと微笑んで銃を向けたまま外原はかなたの疑問に答えた。

可愛い、と場違いな事を感じながらかなたは、

「断つてもいいんじゃないかったか？」

“断ることだけなら”と言いましたけど。それを認めて、そのま



ま立ち去るとは一言も言つてませんけど？ 脱ヒキプロジェクトを知って、断ろうとする人は消さなきゃいけない義務があるのです」

フツ、とかなたは笑った。

「で、脅して“はい”を選ばせると？」

クスツ、と外原は笑った。

「それは、あなたが“死”を脅しと捉えるかによりますけど」

「そうだな。俺の答えは変わらない。“いいえ”だ」

外原は微笑んだまま小鳥のように首を傾げ、窓を見た。銃口はかなたを捕らえたまま。

「そしたら、一人になっちゃいますよ？」

「別に、死んだ後のアイツの気持ちなんて知った事じゃない。俺が嫌なのは」

みずきの寂しさを見てしまうこと。感じてしまうこと。

「いや、なんでもない」

外原は振り向いてかなたを見つめる。

その目にはやはり恐怖を浮かんでるのが分かる。

「では、なるべく苦しめないように急所をねらいますから」

外原は両手でしっかりと狙いを定めた。

「ああ」

かなたは目を瞑る。

その目には映らなかったが、外原は酷く哀しげな表情を浮かべている。形の良い唇が動き言葉を紡ぐ。

『サヨウナラ』

あなたは布団と共に勢いよく体を起きあがらせた。  
そして部屋へと視界をさまよわせる。  
カーテンが閉め切られた薄暗い部屋。  
無論、自分以外に誰の存在も見あたらない。  
あなたは安心したように息を吐いた。

「なんだ、夢か」

## ひきこもり×サイト

カチリ。と音がした。

電灯が瞬き、部屋を照らす。六畳にタンスと机にパソコンくらいしか物がない質素な部屋だ。

暗闇に紛れていた美しい黒髪をまだ湿らせたままの、部屋の主である女性が、流れるような動作で電灯へ繋がるヒモを放し、パソコンの電源を入れてから、壁際に積まれた布団へ腰掛けた。

ジジ……と機械音を発するパソコンが起動するまでの間を、相原みずきは湿っぽい髪を梳くように触りながら、虚空を見るようにくすんだ色の壁を見つめる。

風呂上がりで、ほんのりと肌に朱の割合が増えても、雪のように白さが際だつ。

みずきは水色のパジャマ姿だ。妹からのプレゼント。自分からはいしたのもも贈れない自分が情けないとも思ったりする時もあるけれども、そういった情けないと感じる心を含め、感情を包帯でキツくグルグルと巻いたように抑えてはいるのだが、時々緩くなり、何度も抑えつけるのを繰り返す。そんな自分が嫌い。

みずきは膝を身体に寄せて体育座りになり、膝と膝の間に顔を埋め小さくなる。できる限り小さくなれるようにギュッと膝を抱えていた。

みずきが顔を上げたのは、白熱灯が目にも痛いくらい眩しく感じる時間が経ってからだった。

臍気に霞む目を擦りながら、みずきは立ち上がってパソコンの前に座す。画面は待ちくたびれたかのように黒を映していたが、マウスを動かすとゲームのキャラクターの壁紙に戻った。

みずきは、馴れた手つきでマウスをスライドし、クリックをし、を幾度か繰り返してとあるサイトにアクセスする。

真っ白の背景に、文字を打つ黒線の囲みしかないシンプルな画面。十桁前後のIDと、パスワードを手早く打ち込み【認証】と書かれたボタンをクリックすると、これまたシンプルな画面が現れた。

白い背景なのは変わらないが、真ん中に大きく書かれているのはサイト名であり、それは、

「……ヒキの隠れ家？」

背後から画面を見ていた水澤かなたがサイト名を読んだ。

みずきは振り向くことはせず、マウスを動かしてサイト名をクリックし、画面が変わる。

朧気に霞む目を擦り 辺りから視界の端で漫画を読むかなたの存在を認識していたため驚くことはなかった。

「交流サイトか」

かなたの言うとおり、画面には掲示板への入り口が幾つかと、チャットへの入り口を示す文字列がシンプルに並ぶ。

「ひきこもりしかないサイトなの」

「どうせ、そう謳っているだけだろ」

と、かなたは俄然ツマらなそうな表情になる。

確かに今の世の中検索サイトを活用すれば、特定の仲間や人種が集うサイトは幾らでも見つかる。それらは基本的には、同じ仲間を求める人しか集まらないだろう。

だが、ひきこもりのサイトは違う。

必ずしも多いとはいえないだろうが、人は見下すのが好きだ。自分より下の存在を見て優越感に浸ることが好きだ。そこに底辺な人達が集まるサイトがある。優越感というエサがたくさん転がってる。

果ては無理解のうえの説教までする輩もいる。社会の正論を押し付けるだけの輩が。

しかし、巢の中に自分をエサにする天敵が入り込んだ場所に居着くはずはないと、かなたは、ひきこもりサイトというのは総じて本

物のひきこもりはいないと疑ってるし、みずきも似たような事を思っている。

居たとしても掲示板の雰囲気はスラム街の空気のように淀み、荒れた内容も多く見られ、二人は好きではない。

「ん、ひきこもりしかない。多分。少なくとも、あなたが嫌うような人はいないと思う」

みずきはマウスから手を放し、椅子を回転させあなたの方を向く。「そうなのか？」

あなたはみずきの言葉を一割程度しか信じていないような怪訝な表情だ。

みずきは疑心に満ちた幼なじみにどう伝えたらいいかと、言葉を探り、

「えと、ここ、会員になってIDとパスワードを取得しないと入れないの。当然ひきこもりしかなれない」

あなたは積まれた布団に座り、尚も疑う。

「どうやって判断するんだ？ 自己申告じゃ幾らでも嘘ヒキが紛れられると思うが」

「会員になるには、まず管理人に申請する必要があるけど、その審査がすごく厳しい」

このサイトの会員になるためには、“ひきこもり”であると管理人に認められる必要がある。みずきの言うとおり、審査は国際空港のセキュリティチェックのように厳重だ。

しかし、ひきこもりには、当然ではあるが、免許などは発行されてはおらず証明は難しい。

「みずきはどうやって証明したんだ？」

「通信簿の出席日数を接写して送ったりとかした」

「それだと単に不登校の証明にしかならんだろ」

どこまでもあなたは疑うことをやめない。

「ん、それから、メールで質問とかされたり、普通にやり取りしてたら、認められたみたいで会員になれた」

要は管理人にひきこもりだと信じてもらえればいいのである。みずきの言うように、証拠になりえるものを見せたうえ、質問の受け答えによって管理人が判断を下す。

他の証明方法としては。

- ・ブログを半年以上続けている（更新も頻繁）
- ・数日間ひきこもり生活を配信し続ける

などがある。これが確たる証明となったとしても管理人とのやり取りはする必要がある。

そのやり取りで人となり判断してから入会を認めるか決める。

「……面倒臭いな」

「ここまですれば、ひきこもり以外は熱心にならないからだと思うけど」

「確かに。だが、まだひきこもり以外がいる可能性はゼロじゃない」  
かなたはどこまでも疑り深い。

意固地になつてゐる感もあるが、ここまで疑ったら、化粧品類の検品がごとく不純物混入の可能性を疑う。

「ん、そうかもしれないけど」

みずきはそんなかなたの未だ消えぬ疑心を解消しようと、椅子を回し、パソコンに向かいマウスを動かす。

百聞は一見にしかず。と、掲示板にアクセスした。

“雑談板”と名付けられているそこは、白の背景でやはりシンプルだった。

スレッドが建てられ、スレッド名に続いてある（ ）内の書き込み数を示す数字を見ると、それなり人がいることが分かる。

再度、近寄って画面を見るかなたは、この数字を見て、たかだか二、三人がなれ合っているだけだと疑う。

その中から比較的数字が大きい“雑談総合6”と書かれたスレッドを開いた。

みずきは背後から画面を覗くかなたに配慮し、ややゆっくりめな

速度で画面を下へとスクロールさせていく。

匿名じゃなく、名前欄にはしっかりと名前が書かれている。かなたはその事を聞くと、

「登録時に登録した名前が出るようになってるの」

「つまりは、いちいち名前を変えて書き込むのは無理ってわけか」  
「うん」

ザッと流れる名前を見たところ、数十人はいることが分かる。書き込み内容はスレッドの1に書かれたルールに従い、丁寧な言葉を使用し、チャットにならないように気を付けているのが分かる。

ほのぼのとした雰囲気でしたっかりと雑談な書き込みが続いていき、スクロールが終わる。

「なるほど。確かに荒れてはいないな」

「何度が規約違反したら、すぐ退会させられるみたいだから。これ」  
みずきはポインタで書き込んだ人の名前を指す。

「イエローカード？」

かなたは眉を寄せ、名前の横に付けられた黄色い長方形を見る。

「これが一度違反したという警告。もう一度すると退会させられるの。消すには一ヶ月違反しなければいいみたい」

「ふうん」

書き込みを見る限り、ひきこもりじゃないと思われる内容はなかったと、かなたは疑いの霧を晴れさせる。何より気分を害させる書き込みは皆無だった。互いに理解し合って配慮を忘れてないのがよく分かる。

「この中に書き込んだりしてたのか？」

「このスレにはないけど」

「どのスレに書いてんだ？」

「……ん。秘密」

みずきは手早く画面を、各種入り口群が表示されてる場所に戻した。

「スレタイ見た限り、建設的な話題はしてない感じみたいだな」

かなたは、雑談掲示板のスレッドタイトルを見た感想を述べた。

雑談を始めとして、趣味などを語るらしきタイトルが目立ち、脱ひきこもりやを話すようなタイトルはないと見た。

「そういうのはココ」

みずきはマウスを動かして、ポインタで“脱ヒキ掲示板”を指す。  
「なるほど」

かなたは頷く。

他にも“悩み掲示板”、“創作掲示板”などがあり、語りたい話題毎に大まかに分けられている。

かなたは気付く、

「メル友募集とかはないんだな」

ひきこもりサイトにはよく設けられている、メル友募集の場所はこのサイトにはなかった。

「書き込みでの募集は禁止されてる。チャットでPM使って、アドレス交換したりするのはいいみたい。後は自己責任だけ」

「PM？ 午後か？」

専門用語らしき単語にかなたは首を傾げた。

「チャット中に一对一で会話できる機能のこと。確かプライベート・メッセージの略だったと思う」

「なるほど。みずきはここでメル友出来たりしたのか？」

「ん、まあね。……かなたはまだ続いてたりするの？」

かなたはみずきのメル友事情を知らないが、みずきはかなたにメル友がいることは、以前に部屋に行ったときに携帯が鳴ったりしたこと知っている。

「ああ。定期的な生存報告みたいなやり取りしかないが」  
「そう、」

と、素っ気なくみずきは言って、振り返り、

「かなたも会員になる？」

「携帯でも大丈夫なのか？」

「だいじょぶみたい」



聞いてかなたは心惹かれたが、会員になるための過程を思い返し、  
「面倒くさそうだな」

苦笑を浮かべてみせる。

対してみずきは、僅かに口元を緩ませる。

「私から紹介すれば、数日間、管理人とメールするだけでいいと思う」

本来、信頼性がある会員からの紹介といえど、ひきこもりとしての証明は不十分であると判断され、僅かに有利に働く程度なのだが、みずきはチャットにて、かなたの話を度々していて、管理人もその場にいたため、かなり有利に働き、行程は一気に省かれる。

管理人からも、興味がありそうだったら誘ってみてくれとも言われていた。

「じゃ、入ってみるか」

数日後。

隠れ家に新たな住人が入ることとなった。

ひきこもり×ひきこもり×ひきこもり

「……ハン　ー×ハ　ターのパクリ？」

「何がだ？」

水澤かなたが怪訝な目で相原みずきを見る。唐突に、漫画の話もしてない中、脈絡もなく疑問符付きで言うのは、かなたには見えない第三者がいるのか、怪しい電波を受信しているかしか考えられない。

「ん、なんでもない。で、何の話だっけ？」

かなたは益々訝しがる。

まるでついさっきまで会話を続けていたかのようにみずきは言うが、全く会話はなかった。

「……ああ、この前変な夢を見たんだが……」

と、かなたは突拍子もなく振られた話を繋げてみた。

「どんな夢だったの？」

かなたは先日見た夢の内容を端折りつつみずきに説明する。

「……………」

みずきは失望したようにため息を吐く。いきなりの話を返したのに、ガッカリされ、かなたはどうすれば正しい反応だったのか分からなくなる。

「そっぴや、この前本買いに行ったときなんだが」

「それで？」

かなたは話を変えてみた。やや興味を引かれているという瞳を向け、続きを促す。

「ひきこもりっぽい人に会った」

それは以前、かなたが本屋に出掛けたときの話である。

少年少女が入店し騒がしくなり、目当ての品を手にとり、手早く会計を済ませ、出口へと向かおうとした時、あなたは見た。

本棚の影からレジを伺っている女性を。

年齢はかなたと同じくらいで、髪は肩下まであり前髪は少し長めで、メガネに掛かってしまっている。

その女性は俯き加減で、雑誌を大事そうに胸に抱えていた。

女性を店を出る前になあなたは一度を振り返って見ると、周囲をせわしなく見渡しながらレジへと向かっていた。

「と、まあ。こんな感じだ」

「……そのどこがひきこもりなの？」

みずきは四六時中眠そうな瞳をあなたに睨むように向ける。

「いや……何となくそれっぽいな、と」

「ちよつと買いつらい雑誌だっただけだと思うけど」

視線を右斜め上に向け、あなたはその時の女性が抱えていた雑誌を思い返してみる。ほとんどが腕に隠れていたが、タイトルだけは微かに覗いていた。それは、

「ただのアニメ雑誌に見えたが」

たまに寄った時にざつとかなたが立ち読みしているアニメ情報誌であった。

「ん、そういうのだったら買いにくい人もいると思うけど」

「まあ、そうかもしれないが。雰囲気はひきこもりっぽかったというか……」

段々と自信なさげになってきたあなたは、眉間にしわを刻み弱々しく言う。

「第六感？ それで分かるものなの？」

「例えば、武道のプロなら一目見ただけで相手の強さが分かるようなものかもな。武道のプロがそうかは知らないが」

みずきは目を細め口元を緩ませ、子供の戯言に耳を傾けるような表情になる。

「で、分かったんだ」

「いや、正直言つと自信はない」

かなたはあつさりと言った。

「でも、そうかもしれないんじゃないの？」

「どっちがいいんだ」

「できたらそうだったらいいけど。……あ、その人からしたらそう思われるのは嫌だよね……」

みずきは苦笑めいた表情になり俯く。自分みたいな人がいたらと望んでしまった自己嫌悪。

「まあ、仮にそうだったとしても、ある程度は軽いひきこもりだろうな。髪とか見てもそうだし、外出もそれなりに行けるのかもな」

「それって、最近の定義だと趣味の買い物のための外出なら行ける人も、ひきこもりに含まれるってやつ？」

「意外とニュースみてんだな」

みずきは心外そうにムツと眉を寄せる。

「PCでチェックはしてるから」

「しかし、曖昧な定義だな。趣味の買い物は俺も行くが、それでも回数は知れたものだし。あまりに頻繁だと二トな気もするが……」

「ん、元々曖昧だったし仕方ないと思う。ヒキニトって言い方もされてたりするし」

「掲示板みたいなランク分けなら分かり易いけどな」

かなたが言うのは、ひきこもり系の掲示板に見られるひきこもりの度合いを示したランクである。Aからあり、Aが一番重く、軽くなるにつれていきアルファベット順が先へと進む。

「私はDになると思うけど。でも、出掛けることもあるし……」

「まあ、滅多にないならDでいいんじゃないか。だったら俺もDになるか」

「かなたはKくらいでいいんじゃないの。その本屋だってまだ最近

の話だし」

「俺はそこまで行動範囲は広くないが……あのランクも細かくは書いてないしな、曖昧なのは変わらないか」

「70万人」

脈絡もなくみずきは数字を言った。

「……………いきなりどうした。ひきこもりの数なんか言つて」

「今の間なに？」

「他に70万という数字に当てはまるポケが思い浮かばなかっただけだ」

「そう。どうやって統計をしたかはともかく、これだけいるんだとしたら、見かけてもおかしくないと思うけど」

かなたは少し考え、机の上の携帯を手に取り電卓機能を使い計算する。

「一億二千万で計算すると大体百七十人に一人がひきこもりになるな。年齢も絞れば更に高い割合になると思うが」

「だったら百人に一人くらい？」

「そのくらいじゃないか」

「駅前にでも行けば一人はひきこもりがいるみたいな感じになるけど」

「そりゃ計算上だとそうだが、ひきこもりだからな」

「ん、そもそも外に出る事が少ないから……はぐれメルくらいの確率？」

「メルキングくらいかもな。とにかく珍しいことなのは確かだ。」

……本屋の話も多分違う可能性の方が高いなやっぱり」

「まだゼロではないと思うけど、ひきこもり同士が直接会うことって普通はないよね」

「まあな。ネット上は幾らでも見つかったりも直接は難しい。ここいらみtainな田舎だと特に」

かなたはひきこもりが出入りするチャットで、出身地を訊ねてみたことがあるが、大抵はそれなりに人口がある所だった。

「ん、こちら辺だと私たちだけな気もするし」

「……年数とか考えたらそんな気がしてきた」

あなたは寂しげな表情になり、部屋はしばし静寂が支配する。

みずきは俯いていた顔をあげ、

「でも……一人じゃなくてよかった」

あなたはみずきの乏しい表情を読みとるように見る。みずきは気恥ずかしくなり俯く。

「……私だけだったら、あの時戻れなかったと思うし……」

息を吐くような細かい声をあなたは聞き取って、優しい微笑みを浮かべた。

「ま、そのうちなぎさが見つけてたとは思うがな」

「……先になぎさと会ってたら逃げてたと思う。……ありがと」

上目遣いでみずきはそう言って、すぐにまた俯く。

珍しい言葉にあなたはこそばゆそうに、照れと戸惑いが混ざった微妙な顔をつくり髪をくしゃくしゃとかき乱した。

「アニメ雑誌買ってたんだっけ」

しみりとした空気が流れた後、みずきが淡々と言った。

いきなりで何のことだとあなたは思考を巡らせ、

「あ、ああ。確かそうだったはずだ」

「毎月買ってるかもしれないし、その雑誌の発売日にまた現れるんじゃないの？」

「仮にそうだとして、逢ってどうするんだ」

「ひきこもりか訊く」

あなたは自分がそう訊ねる姿を想像し、

「変人扱いされるのがやまだな。というか俺が他人に気楽に話しかけられるとでも？」

自虐めいた笑みをつくる。

「ん、無理だね」

あつさりとみずきは頷いた。

「……三人目の話は難しいか……」

「何がだ？」

## ひきこもり×クリスマス

聖夜。キリストが生誕したと憶説される日の前日の夜。

街を見回せば幸せな空気がそこかしこに漂う一方、反対に負のオラを纏う者もまばらに。

それは、光があるところに影ができるような物だろう。

恋人、家族、友人、一人、多種多様なクリスマスの過ごし方が存在するのだろうが、とあるひきこもり二人のクリスマスはどうだろうか。

「クリスマスか……」

クリスマスらしい装飾もなくいつもと変わらない部屋。

椅子に座る水澤かなたはしみじみと呟いた。

「どしたの？ 突然」

ベッド端に腰掛ける相原みずきは細めた目でかなたを見た。

「いや。なんとなくそうだな、と」

相変わらずカーテンを閉められた部屋にはクリスマスの要素は何一つない。テレビは点けられてないが、今日は珍しく電灯が点けられ部屋を照らしている。

「私たちには関係ないでしょ」

「まあ、そうだな」

「で、何かする？ テレビでも観る？」

みずきの提案にかなたは苦笑し、

「今日はクリスマスだろ」

『それが？』と言うようにみずきは小首を傾げた。

「確かこの時間だとクリスマス特番ばかりだった。観てもつまらないし俺らには毒だろ」



「ん、面白くないのは同意するけど。私は別にクリスマス風景とか映っても何にも思わないけど」

「俺も最近は特に何とも思わなくなったな。別世界の話だ」

かなたは肩をすくめ自虐的に笑みを浮かべてみせる。

二人にとってカップルや友達同士で談笑する光景は、一種のファンタジーとっていいくらい遠くかけ離れたものだ。

「最近って……クリスマスに誰かとデートできるとか思ってたの？」  
揚げ足を取ったようにみずきは僅かに唇の端をもたげる。

「いや。そんな期待するわけがない。ただ、まあ、なんというか、どうにも観たら悲しくなるというか、な」

かなたは誤魔化すかように手を辿々しく動かし、言いよどむ。そして所在なき手を頭に持ってきて髪をかき乱す。

「そう。何となくは分かるかな」

言いよどむかなたを更にからかいたいというイタズラ心も湧いたが、みずきは同意する。

「あ、そういや。今日は何でオシャレっぽくしてんだ？ 珍しい」  
今更で、やや無神経とも受け取れるかなたの言葉にみずきはムツと唇を尖らせる。

「一応はオシャレのつもりなんだけど」

黒の膝下丈のワンピースの裾を摘みながら、上目遣いでみずきはかなたを見る。

かなたはその瞳と言葉から機嫌の機微を感じ取り、

「悪い。けど、なんでわざわざ」

「……お母さんが、たまには、って」

「なるほど」

水澤家と相原家はクリスマスの前日の夜は毎年、どちらかの家でパーティをするのが恒例行事になっている。

パーティといってもただ単に普段よりほんの少しばかり豪華な食事が用意され、飲み食いするだけである。

互いの両親が酒が入り会話が盛り上がる頃になると二人はさっさ

とどちらかの部屋へと引き上げる。

今回は水澤家で開かれており、名目上には呼ばれた側であるということで、みずきは母に言われて普段より多少オシャレに気を使った格好だ。

黒のノースリーブワンピースの上に、淡い色のカーディガンを羽織り、胸元にはシルバーの十字架を模したアクセサリーが煌めいている。さらに唇には赤いルージュが引かれている。

「どう？」

と、みずきはかなたを見つめて感想を求めた。

かなたは、白くてか細い足から、感情の乏しい顔まで見てから、

「まあ、似合ってる。と思う」

たどたどしくも正直な感想を述べ、顔を背けた。

普段、褒める台詞を言うこともないためか、言った途端恥ずかしさがこみ上げてくる。

「ん、そう。……よかった」

息を吐くようにそう言葉をみずきは漏らし、かなたには見えないように顔を俯かせ、嬉さを顔へ滲み出した。

「……ケーキでも食べる？」

顔を上げたみずきの表情はいつも通りの無表情になっていた。

「ああ。そうだな」

かなたが頷いて答え、みずきは立ち上がると部屋を出て階下へと降りていった。

かなたはふと考え、携帯電話を手に取った。

テレビの画面ではド派手な竜巻のエフェクトが画面を覆い尽くし、finishと派手な文字が流れた。

「十二勝五敗。調子悪い？」

「いや。みずきが良いんだろ。ゼロループ決まってるし」

二人はケーキを食した後、格闘ゲームを始めた。電気を消し、部屋は不気味に光る。

二人の格闘ゲームの實力は拮抗しているのだが、今日は差がついていた。

ちなみにゼロループとは同じ技を繰り返して続けるコンボなのだが、タイミングが際どく、二人の腕前だと、アベレージで四、五回なのだが、今日のみずきは六、七回と理論上の限界まで決まったりしていた。

「ん、そうかも。けど、かなた集中してないでしょ。携帯見たりして」

かなたは一戦ごとに携帯電話を開いてはイジっていて集中力に欠けているふしがある。

「まあ、メールがな……」

「なぎさ？」

「ああ。クリスマスがどうのと。みずきの方にも来てんじゃないかな？」

「後で見える。返信するなら先にしたら？」

言われてかなたは、カチカチと不慣れた動作でようやくメールを打ち終え送り、深呼吸をしてからコントローラーを握る。

その動作には達人の精神統一にも似たものが垣間見えた。

たかが格闘ゲーム。だが、二人にはそれに対しては真剣勝負と同様の空気の元でしている。

二人の腕前かというと、二人でしか対戦することはないので詳細には推し量れないが、他者から見たらキャラが画面を所狭しとせわしなく動き回り、手元に目をやると指の動きが適当にガチャガチャと押しているように見えるだろう。

「せつかくだし何か賭ける？」

ふいにみずきが切り出してきた。

「は？」

唐突な言葉にかなたはみずきに顔を向け怪訝な表情になる。みず

きもかなたを見て、

「勝ち越した方が、欲しいものをプレゼントするとか。クリスマスだし」

相変わらずの感情を読みがたい表情でみずきは言った。

「んー。だが、俺は五千程度しかないが」

「私もそのくらいならあったと思う」

みずきは所持金が入った財布の中身を思い出す。かれこれ数ヶ月引き出しの奥にしまいっぱなしだ。

「ゲーム一本はいけるな」

と、かなたは乗り気を示すように口の端を上げ、ふと気付く、

「勝敗は一旦リセットするの？」

現在、五勝十二敗。もしこのまま進めたならば、五分にするのに七連勝が必要であり、かなたは不利だ。

「ん、そのままでもいいんじゃない」

「厳しいな」

苦笑しつつもかなたは前を向き、キャラを選択しゲームを再開する。

実力は五分五分で、今日のみずきの調子からすると賭けに勝てる可能性は万馬券並みに限りなく低いのだが、かなたはそれでもいいかとも考えている。

年に二度ほど小遣いのような金額を貰い、ゲームなどを買ったりしているかなたとは違い、みずきは小遣いもなく自分の買いたい物を買うことは殆どない。

買いたい物を極限まで我慢しているのかは、表に出すこともないため察することは出来ないが、欲しい物があるのならプレゼントしてもいいと、かなたは思っていた。

だが、急にそう切り出したら怪訝に思われるし、何より気恥ずかしい。なのでこれはいい機会だ。

それでもかなたは、本気で勝ちに行く腹積もりではあった。今気になるゲームソフトもある。

ゲームに集中した二人の闘いは白熱していた。主に画面の中だけだが。

当の二人は背中を丸め気味にして、死んだ魚のような目で画面を見ているだけ。だが、指の動きは激しくはあった。

その指捌きによって操られる画面上のキャラは一進一退の攻防が目まぐるしく行われていた。

実力は伯仲しており、みずきが勝てば、次にかなたが勝つという展開が続いていた。

そして日付が変わった時計を見て勝負を終えると、決着は着いた。  
「二十四勝十八敗」

「……負けたか」

淡々とみずきが告げ、かなたは敗北を認めたが悔しさは浮かんではない。

「じゃ、後で欲しいもの考えとく」

みずきは言いながら立ち上がり窓へと歩み寄る。

「考えてなかったのか」

「ん。なるべく欲しいものとか考えないようにしてるし あ、」

みずきはカーテンを開けると、吐息を漏らすような小さな驚きの声を出す。

「……雪か」

みずきの動きを追っていたかなたは、その窓の先に映る光景を見て呟くと、みずきの側に立った。

外では紺碧の夜空からタンポポの綿毛にも似た雪が深々降っていた。

家々の屋根も、庭も、全てが白へと染まり、人通りも疎らなためか足跡一つ無い新雪が敷き詰められ、夜の世界に白が映える幻想的な風景が広がっていた。

「……………」

それには感動という回路の動きが鈍い二人も、感嘆の吐息を漏らして魅入っていた。

よく見えるように、土埃で薄汚れたガラス窓をみずきが開けたため、ひんやりとした風が部屋へと入り、雪の結晶も部屋へと舞い降りては儚く消えていく。

かなたは隣を見た。

顔を上げ空を眺める幼なじみの横顔。

雲の合間から覗いた月の光がみずきを照らし、長い黒髪が光沢を放っているようにも見え、シルバーアクセも煌めく。

ふと、かなたは窓際から離れ、すぐに戻ってくると手にした携帯電話を構える。

ピロリン

と雰囲気にそぐわない携帯のシャッター音が冷たい空気が漂う部屋に響いた。

数分後。なぎさの部屋。

携帯電話がブルブルと震え、なぎさは手にとって開く。

「あ、かなちゃんから」

表示された送り主の名前を言いながら、待ちに待ったという面もちで、なぎさはメールを開くと一枚の写真が添付されていた。

## ひきこもり×正月

「起きて」

優しい声とともに、さざ波にたゆたうように身体がユサユサと揺さぶられるが、水澤かなたは眉間にしわをよせつつも、まだ夢の中である。

昨日は強制されたわけでもないのだが、日付が変わるまで起きていた。それは他の二人も同じなのだが、かなたは後片付けを終わらせてから床に就いたため、眠ったのは今日の三時を回った時だった。「ほら、早く起きなよ」

揺さぶる力が強くなり、強風に煽られる木のように身体が揺れるが、水澤かなたは目覚めない。むしろ、その揺れがゆりかごの心地良い揺れだと感じているようで、表情が和らいで睡眠が深くなったようにも見える。

ベッドの傍に立つ人物は細めの腰に手を当て、ふうと息を吐く。

時刻は午前七時前。

まだ睡眠時間的には物足りない時間である。

「むー」

だが、ベッドの傍に立つ人物はまだ諦めてないようで、一度、唇を尖らせてから、ニヤーっと口元を弛ませ、両手の指をいやらしく動かす。

そして、ベッドに乗ると掛け布団の中へと両手を差し入れ

奇声が上がった。

「……………勘弁してくれ……………」

跳ね起きたかなたは、ハアハアと肩を上下させ、自分の身体を抱

きしめている。顔は朱くなっている。

「だってー。幾ら揺すつてもかなちゃん起きないんだもん」  
ベッドの上に座し、相原なぎさはイタズラっぽく笑う。

「……だからってな……あんなやり方は……」

「フフ……かなちゃんの弱いところはお見通しだよ」

「声が外に聞こえてたらどうすんだ……」

「ごめんごめん。まあ、昔やったことあったし、またやろうかなー  
って思っ」

「ああ、やってたな。やられたらやりかえすてな感じで」

「だねー。やりあいになつて息も絶え絶えになつたりもしたよね」

「……たかがくすぐりあいを、よくもまああんなに必死にしてたな」  
「けど、ホントかなちゃんはわき腹弱いよねー」

なぎさは指でくすぐる仕草をしつつ、いたずらっ子な瞳でかなたを見る。

かなたは反射的にわき腹をかばい、警戒する瞳をなぎさに向けたが、ふいに顔を赤らめて視線を逸らした。

寝起きドッキリとばかりにくすぐりの刑に処されたのは怒りたくもある。だが、子供同士なら何のことはない単なる触れ合いも、年齢的には成人を迎えているなぎさの身体は、しっかりと女性らしい成長を遂げている。

さらには突然の事でもあり、脳内での状況の把握もできぬまま抵抗してるうちに、肘やらに柔らかい物の感触や、朝シャンでもしたのか、湿り気が残る髪からは鼻孔をくすぐる香りがしたりして、故意ではないとはいえ罪悪感があり怒るに怒れない。

かなたはその記憶を振り払うかのように頭を振り、寝癖の髪をかき乱しながら携帯電話を手に取って時刻を確認する。

「まだ七時前か……」

道理でまだ眠たいはずだと、かなたは欠伸をし、何故起こしたのかと理由を問うようになぎさに視線を向ける。

なぎさはその視線に含まれた言葉を察し、



「かなちゃんに見せたいものがあつてさ　よつ、と」

言いながらなぎさは立ち上がるとベッドからピョンと跳び降りる。まだ朝早いというのに元気だなとかなたは思う。昨日（というより今日）は二時までは起きていたし、缶ビールも結構飲んでいた。それなのに身だしなみも整えられていて、眠気は残ってないと言わんばかりのクリツとした瞳である。

なぎさはサツと軽快な動作で窓際に寄ると、カーテンを掴んでからかなたの方を向いてニツコリ微笑んでから、

「ジャーン！」

と、効果音を言いながら、勢いよくカーテンを左右に引いた。陽を取り込んで薄暗かった部屋が一気に明るくなり、寝ぼけ眼には刺激が強くかなたは目を細めた。

なぎさはかなたから窓の外をよく見えるように脇へと移動する。

なぎさと目が合い、外を見ると視線で促されるままかなたは眩しさに馴れだした目を少し開く。

窓から見える風景は雪景色だった。

深夜に降り続いた雪。まだ誰にも浸食されておらず足跡一つ無い。隣家の軒には牙のように伸びた氷柱が並び、ポタポタと滴を垂らしている。

雪も滴も氷柱も一様にキラキラと輝いて見え、幻想的だ。

その宝石のような輝きを作り出しているのは、一際明るい遠くの空に浮かぶ太陽であった。

水澤家がある住宅街は傾斜が急な坂を上った高い位置にあり、かなたの部屋の窓は東の方向にある。

背の高い建物も少ないため、山の稜線の上で輝く、限りなく白に近いオレンジ色の朝陽がよく見えた。

「キレイでしょー？」

「まあ、そうだな」

と、かなたは口元を僅かに緩ませて頷いた。

なぎさはかなたの隣に寄り、朝陽を拝むとおもむろに手をパンツ

と打って、

「今年も良い年でありますように！」

元日の朝。こうして新年が始まった。

「？　かなちゃん、頭痛いの？」

水澤家の台所でお雑煮用の出汁を取りながら、なぎさはかなたを見て聞く。

「……ちよつとな」

額を手でおさえながら、かなたはしかめっ面で答え、テーブルに置かれたおせち料理の伊達巻きを摘んで食べる。

「二日酔い……じゃないか。そんなに飲んでなかったし」

「いや、酒に強くてあんなだけ飲んでも問題ない誰かと違って、二本でもキツイ……無理強いだっだし」

曖昧に言うが、かなたの細めた目つきはなぎさを捉えている。

「ふうん。そういうものなんだ」

と、無理強いした本人は事も無げに言って、雑煮の調理を続ける。ズキズキとする頭痛に顔をゆがめながら、かなたは昆布巻きを摘んで食べた。

昨日。大晦日。

水澤家は静かであった。

居間には人影がなく、かなたの部屋には幼なじみである相原みずきもいたが、互いに雑誌と小説を読んでいるため、言葉を発することもなく平穏な時間が流れていた。

その時、ガタツと小さな音が耳へと届いた。

二人はまるで臆病な小動物のように素早く顔を上げ、ドアの方を見る。

もう一度ガタガタと遠くから聞こえた。

視線をみずきと合わせ、あなたは「誰だ？」とアイコンタクトを送る。音が聞こえたのは勝手口の方だと長年の感覚で分かる。

そこを利用するのは限られている。その一人であるみずきも現在目の前にいるため今は鍵も掛けられ、入ることはできない。

音も止み、あなたは怪訝に眉を寄せ考える。年末に帰省中の家を狙う空き巣……？　こちら辺だと車の有無で帰省中か否か分かり易いが……と、“帰省”で一人の顔が浮かんだ。

「そついや、なぎさはいつ来るんだ？」

頭に浮かんだ人物のことをみずきに聞く。

「……ん、確か」

みずきの返答を遮るようにあなたの携帯電話が鳴った。

「もー！　何でカギ閉めてるのわけ？」

勝手口のドアを開けて目の前に待ちかまえていたのは、ふくれっ面のなぎさであった。

『カギ、すぐ開ける。五秒以内』にと命令調のメールを受け取り、あなたは急ぎ（かつ静かに）一階に降りた。

「……悪い」

頭を掻きながら、淡々とあなたは謝る。「ま、この時期空き巣とかも危ないらしいし、戸締まりしといたほうがいいかもね」

「そつだな」

戸締まりをしっかりしている理由は留守をアピールするためだったが、適当にあなたは頷いておいた。

「じゃ、お邪魔しまーす」

と、なぎさは一歩で外から家へと入り、キャリーバッグを引きずり僅かな段差を乗り越えて家へと入れる。

かなたはそれを見て、何故わざわざそんな荷物をこっちに持ってきたのか疑問に思う。

「……その荷物なに？」

かなたが聞くより早くいつの間にもやら近くに来たみずきが聞いた。

「あ、ただいま。お姉ちゃん」

ペアと明るい笑みを花開かせなぎさは実家に帰ってきたかのように、普通に挨拶を交わす。

みずきは表情を極僅かに和らげ、

「ん、おかえり」

「この荷物はねー」

なぎさはニンマリと目を細めた笑みを作り、かなたとみずきを見て、

「……えっと」

また言葉を一旦止め、ふと考えるように片手の指を折って何かを数える仕草をしてから、改まって一度わざとらしい咳払いをする。

「四泊五日。お世話になりまーす！」

と、元氣良く言っただけかなたに向けて勢いよく頭を下げる。纏められた栗色の髪が合わせて動き、毛先がかなたの鼻先を撫でた。

唐突に四泊宣言をされた二人は、少しの沈黙の間、脳内でその言葉を整理し、荷物の意味を理解した。

「そうか」

「そう」

そして実にあっさりとした反応を返した。

「うちの方はいいの？」

かなたの部屋に移動し、みずきは訊ねた。

「それならだいじょぶ。一言メールしといたから」

床に散乱したゲームソフトのケースや、本を片づけながらなぎさは答える。

「でも」

「帰る日に寄ってくつもり。その頃には全員帰ってるだろうしさ。あの雰囲気苦手なんだよねー」

言って、なぎさは苦笑する。

あの雰囲気とは、親戚一同が会す食事会のことである。十数名が居間に集まり、ワイワイガヤガヤと談笑をする恒例行事だ。最初の方は穏やかに日常的な事が主だが、酒が入るにつれてやかましくなり、陰口めいたことが多くなってくる。

「そう」

みずきもその気持ちはよく分かる。

参加しないとはいえ、水澤家に避難をする前までは苦痛だった。嫌でも聞こえてくる騒音。笑い声。はっきりと聞き取れない声が自分の悪口かも知れないという被害妄想。

その不協和音を遮断するためヘッドフォンでネットゲームをする自分も惨めで痛い。

そんな昔を思い出し、やや表情に暗い影を落としたみずきを見て、なぎさはパンと手を叩いて話を切るように、

「ま、とにかく。今年はこっちにいることになりましたから。お母さんにもよろしく頼まれたし」

「……何をだ？」

かなたは怪訝そうに首を傾げる。

「主に食事かな」

と、なぎさは細めた疑う目で二人を交互に見て、

「どーせ、インスタントとかで適当に済ますつもりだったんでしょ？」

「……………」

図星のため言い返す言葉がない。

「だから、私が作ります。お姉ちゃんにも手伝ってもらってからね」

なぎさは胸を反らし、みずきに視線を向け微笑んだ。嫌そうにみずきは眉を少し寄せるが、既に決定事項のようで、なぎさは反論を挟ませる間もなくなたを見て、

「じゃ、まずは買い物いかなきゃ。でさ、結構買う量あるんだけどさー」

澄んだ瞳でジツとかなたは見つめられ、やれやれという思いが混ざったため息をわざとらしく吐く。

「……分かった。行く」

洪々といった様子でかなたは重い腰を上げた。

## ひきこもり×正月(2)

「お姉ちゃん、じゃがいも切ってくれる？」

「ん」

「ゴボウ、笹搔きにしてくれる？」

「ん」

「あ、ごめん、お姉ちゃん。鍋の火止めとして」

「ん」

と、水澤家の台所では相原姉妹が料理に取りかかっていた。夕飯に加えて、正月料理の下拵えもしているため何かと忙しそうだ。

そんな中、居間では一人倒れていた。

声を掛けても“へんじがないただのしかばねのようだ”という言葉葉が浮かぶくらい、かなたは憔悴きつた顔で、既にカーテンが閉じられ、くすんだ薄暗い壁を虚ろな瞳でぼんやりと見ていた。いや、ただ開いてるだけでその瞳は何も見てないのかもしれない。

その疲弊の要因は、ダンベルを数個入れたような重さのレジ袋を両手に下げて家まで運んだという肉体的な疲れもあるのだが、精神的疲労の割合が大きい。

大晦日のスーパ―に訪れる客の数は普段の三、四倍に膨れ上がっていた。客層も普段とは違い、帰省中と思しき家族など若い層も多く、元々人の密集地が好きではないかなたにとっては、オオカミの群にトラとライオンまでいるような入りづらい場所に入る草食動物の気分であった。

それでもスーパ―に飛び込んだかなたは、終始俯き加減で、買い物カートを押しながらノソノソとなぎさの後を追うことしかできなかった。その顔色はあえて過剰に描写するならば、ネズミに耳をかじられた猫型ロボットのようだった。

そして、荷物持ちを引き受け帰宅したかなたは、十二ラウンドを限界を超えて戦ったボクサーのような疲れた面もちで、早々に居間

で横になり大晦日の夕刻を過ごした。

姉妹で協力してできた夕飯のクリームシチューを食べた後、三人とも居間で何をするでもなく食後の休息をし、なぎさが年末恒例の歌合戦を見ていいかと、両親が帰省中で一応は家のチャネル権の一番手であるかなたに伺いをたて、特に異論はなく許可を出した。見始めて少しして、買ひ物の総重量の三分の二は占めてた缶ビールとツマミをなぎさは持ってきて乾杯。

ほとんど飲むこともなく、好きではなく、挙げ句にアルコールに弱いかなたもウーロン茶でいいと言ったが、なぎさに「それがマナーでしょ！」と理不尽な理由で強要され（パワハラ）仕方なく一本飲まされた。

アルコールが入っても特に盛り上がりもない会話をしながら時間は過ぎ、なぎさは頭上に電球を輝かせたような表情を浮かべ駆け出し、押し入れを漁って、眠っていた幾つかのボードゲームを持ってきた。

歌合戦をBGMにボードゲームで対戦。当初は普通に勝敗にリスクもメリットもない勝負だったが、緊張感がないと、テンションが二割り増しになってるなぎさが罰を設け、簡単な罰ゲームにてかなたは二本目を一気飲みするハメとなってしまった。

年が変わった頃には、飲み干した空き缶のタワーが建造され、テンションが五割り増しとなったなぎさの話を、気持ち悪さを堪えながらかなたは聞き役に徹し適当に相づちを打っていた。

それから、小宴会はお開きとなり就寝。かなたは二日酔いになった。

「あ、おはよ。お姉ちゃん」

元旦の真昼を回った頃、みずきが明らかに寝起きだと分かる気怠



そんな動きと表情で居間に現れた。

「……よ」

みずきはまるで腹話術士のように微細に唇を動かし挨拶を返すが、耳元でささやかなれない限りはつきり聞き取れない声量だ。

繊細な黒髪で顔半分近くが隠され、残りの半分はかなたと同じく頭痛がしてるのか、或いは単にまだ眠気が残ってるだけか判断が付かないが、目を最低限視界が確保できる限界まで細め、口は締まりなく僅かに開いている。

昨晚みずきは缶ビールをクピクピとゆっくりかつ着実に喉奥に流していた。結果飲んだ量はなぎさに次ぐ、ボウリングができるくらいの本数であった。酔いが回ってるかは判断しがたい無表情だったが、次第に頬は朱色に染まり、元々少ない口数が更に少なくなり最後の方は無言になっていた。

「お雑煮あるけど食べる？」

なぎさはゲームのコントローラーを置いて聞いた。

コクリとみずきは首を糸の切れたマリオネットのように一度下げ、洗面所へと向かっていった。

「ね、おいしい？」

丁寧に出汁をとって雑煮のつゆを作り、モチもほどよい加減で焼いた、なぎさが感想を訊ねる。

「ああ」

と、かなたが頷き、モチを咀嚼しながらみずきも無言で首肯する。それを見てなぎさも食べ始めた。

「……ああ、そうだった」

つゆを嚙ってから、ふと思い出したようにかなたが言って、ジーンズのポケットを探る。

「なに？」

なぎさが言い、みずきも箸を止め虚空が広がってるような黒目をかなたに向ける。

かなたがポケットから取り出したものを見せ、それぞれなぎさとみずきの前へと置いた。

淡い緑色に干支が画かれた小さな長方形のお年玉袋。当然、中に入っているのもそれである。

「ん、ありがとう」

と、みずきは素直に受け取り、

「あ、私もいいの……かな？」

目を丸くし複雑そうな心境を表すこちない表情でなぎさ。

「まあ、いいんじゃないか。意見あるなら母さんにでも言ってくれ。あっけらかんとかなたは言う。」

言うまでもなく、袋の中身を用意したのはかなたの親である。

「……あ、じゃ、これはお姉ちゃんに」

スーとテーブルを走らせなぎさはお年玉をみずきの前へと渡す。が、みずきの指によって元の場所に戻された。

「なぎさの」

短くもみずきはなぎさを見て受け取るように言う。その瞳は普段見せない意思の強さが宿っている。

「うん、わかった。ありがとう、かなちゃん」

「……………」

みずきは何も言わずに立ち上がり二階へと上がっていった。

それを見てなぎさは小首を傾げるが、かなたは気にすることなくモチを伸ばしながら食べ進めていた。

「かなた」

と、居間に戻ってきたみずきはかなたにお年玉袋を渡す。

「どうも」

気持ちの籠もらない礼を述べてかなたは受け取る。気持ちのある礼はみずきの親へと取っておく。

「しかし、毎年大して意味のないやり取りな気もするな」

かなたは幸薄そうな笑みを浮かべる。

今年はなぎさの分もあったとはいえ、去年、一昨年と一対一でお

年玉のやり取りをしたが、中身の金額は同じであるため渡し合ってもなくとも入る額は変わらない。

「ん。そうだけど。……正月だし」

みずきは適当に答え、

「うん、そうだな。正月だしな」

かなたは適当に相づちを打ち、

「正月だしねー」

楽しげになぎさが乗った。

ちなみにこのお年玉が二人にとってほぼ唯一の収入である。

「初詣でも行く？」

ゆったりとした時間が流れる居間で、お茶を飲んで、なぎさが言った。

二人は唐突に出てきた提案に、どこから湧いたのかと考え、特番ばかりのテレビも消して静かであり、ふいに脳内に浮かんのだと結論づけてから、

「難易度五つ星な場所だな」

面白い冗談だ。と言うようにかなたはフツと笑い、ゲーム的な答えを返した。

ひきこもりであるかなたとみずきに、この日もっとも人が集まる場所に誘っても肯定的な答えが返ってくるはずがない。

なぎさも猫にお手を要求するように、「冗談のつもりでの発言でもあった。

「友達は？」

みずきが聞くと、なぎさは芝居がかったように俯き加減で大げさなため息を吐く。

「彼氏連れて帰省中に、予定が詰まってるに、夜中に行った。と、あとはこっちに来てないとかでいないわけです」

指折り数えて、なぎさは苦笑して肩をすくめる。

「それは困ったな」

「だからさ、いつしよに行かない？ あ、一人で行けとかは無しで」  
あなたは悩むように黙るが、行く気はたとえ神社が家の真正面に  
あつたとしても毛頭ない。誰が好き好んで苦手が集まる場所に突っ  
込むような真似をするだろうか。

なぎさもそれが分かつて言ってることは明白であり、あなたは上  
手い返し方を考えてると、

「……………行ってもいいけど……………」

ボソリと発言したみずきに、あなたとなぎさは、澄んだ声で日本  
語を喋る力エルでも見たかのような驚きの視線を向ける。

「……………えと、お姉ちゃん……………いいの？」

「……………」

みずきは答えずにお茶をすすする。

あなたはおかしい思った。自分より行動範囲が限られる幼なじみ  
が自ら人の群れに向かう。ありえない。たまに突拍子もない発言や  
行動も過去あつたがそれでもありえない。まさか……………みずきの偽物  
？ などと疑ってみたりする。

「……………日暮神社ならだけど」  
ひぐれ

あなたはそれを聞いて「ああ」と得心がいったように言い、なぎ  
さは五秒ほど思い出す時間を経過させてから確認するように、  
「それって、あの、寂れた公園の近くにあるところ？」

「うん」

肯定。

日暮神社は住宅街からも商店街からも、喧騒から外れた空き地が  
多くある、寂しげな通りに面した小高い丘の上にある。

周囲は背の高い木々で囲まれ、葉が生い茂る春夏秋冬は薄暗く、冬  
は寒さと雪が邪魔だつたりで、足を運ぶ人は一部のマニアくらいし  
かない。まるで貧乏神を奉っているかのような廃れた神社である。  
あなたとみずきは一時期に頻繁に訪れていた過去がある。

「けど、お参りくらいしかできないんじゃないの？ おみくじも引  
きたいし……………」

「それは大丈夫だろ」

人気のない雰囲気が好きで今でも一年に一、二度、あなたは境内に訪れたりしている。

日暮神社は普段はほぼ放ったらかしといていい。秋になると落ち葉が石段を覆っていて足下が危なっかしい。

だが、三が日だけは、降り積もっていれば雪が搔かれており、この時期が稼ぎ時なのか、おみくじやお守りに、達筆なありがたそうな文字が書かれた（らしき）お札が置かれている。

けれども置かれているだけで無人であり、お金を払う木箱だけが置いてある。監視カメラもなく払うかは個人の良心と裁量に任せられているという、稼ぎたいのか面倒くさいのか実によく分からない。

「へえ、そなんだ」

「……そこなら行ける、と思う。人いないだろうし。いい？」

と、不安げにみずきは上目遣いでなぎさにたどたくしく聞く。

「全然オツケーだよ。むしろ、あそこの方が御利益ある気もするし」  
満面の笑みを浮かべてなぎさは言つと、「じゃ、そうと決まったら早く行こー!」

元気良く立ち上がり、鼻歌を奏でながら二階へと向かっていった。  
リズムよく階段を上がる音を聞きながら、あなたはみずきの横顔を見つめる。

視線に気付いたみずきが顔を向けると、怪訝そうに細めた目つきでなおも顔を見つめられ、

「……なに？」

「……本物のみずきか？」

「は？」

今度はみずきが怪訝な表情になった。

こうしてちょっとだけ普段と違う正月は過ぎていく。



## ひきこもり×初詣

町中心部からそれほど歩かない近い位置にある神社は賑やかだった。

老若男女、様々な年代の人が溢れかえっており柏手を打って様々な願いを神へと送っている。

一目でこの時期だけのバイトだと九割方分かる巫女服を纏った女性、せつせとおみくじにお守りや正月飾りを求める客に応対し、互いに絵馬に書かれた願いを見せ合って幸せそうに笑い合うカップルもいる。

町の人口のほとんどが訪れているとも見え、人の密集度はこの日町一番なのは間違いない。奉られている神も、願いを聞く仕事を適当にこなしたくなるだろう。

そんな、周囲の道路脇には車の列が並ぶ神社とは対照的に、かつては閑静な住宅街、今は空き地と手入れされていない公園があるだけの寂しげな通り。そこにポツンとある社の神は暇を持て余し、欠伸をかみ殺していそうだ。

未明まで降り積もった新雪にはつい先程まで足跡一つ無く、今し方三人分の足跡が付いた。

「ホントに雪搔かれてるんだねー」

神社の石段の前で相原なぎさが言った。

膝丈のスカートにブーツを合わせ、コートを身に纏ったファッションで、生足が僅かに露出しており寒くないのかと、お節介なオバサンが言いたくなるような姿だ。

「他に誰か来た形跡はないみたいだな」

水澤かなたは周囲の雪の様子を見て探偵みたいなことを言った。

家にいた時の服装にダウンジャケットを羽織っただけのシンプルな格好だ。

「……………」

相原みずきは、懐かしんでいるかはいまいち分かりにくい瞳を斜め上に境内へと向けている。

ジーンズに淡い色のフード付きコートというスタイル。なぎさに貰った物のため少しだけ丈が短い。ちなみに履いているブーツも元はなぎさのである。

「こっちに初詣に来たことあるの？」

境内に続く雪で白に染まる石段を上りながらなぎさは並んで歩く二人に聞く。

みずきは小さく頭を左右に振って、ないと表す。

「前に一度だけ。三日だったかにちょっとな。そんな時は誰も見かけなかったな」

「そなんだ。……まあ、見た感じだけだとちゃんとやってるかは分かんないしね」

長年の風雨に曝されたのを語るくすんだ色の鳥居を見ながらなぎさは苦笑する。

下から見ただけだと、石段の先に鳥居があって初めて神社だと分かり、その手入れされてなくすんだ朱色をした鳥居を見て、もう何も機能していない神社なのだと誰もが思うだろう。

そのため、町中の神社と比べると長い石段を上る気は徒労だと考えるし、アスリートがトレーニングとして使うには物足りない。ここを上がって境内に踏み入れるのは、人気のない場所が好きな物好きくらいだ。

「あ」

残り数段となったところでなぎさは軽快に跳ねるように上りきると、立ち止まって少し驚いた声をあげた。

その様子を数段下で、やや疲れた面もちで見た二人は怪訝そうに顔を見合わせ、重い足取りで上りきって、一息吐いて顔をあげて理由が分かった。



「……………」

三人は正面にいる人物を不思議な物を見るように視線を向けている。

視線を向けられた人物はかなた達を見て、少し驚いたように瞳を丸くしたがすぐに柔和な笑みへと変え、手にしていたスコップを水平に両手で持ち直し、深くお辞儀をした。

かなた達は互いにアイコンタクト。それが一般客なら回れ右も選択肢に入っていたが、みずきがそのまま前に一歩踏み出すのを見て他二人も同じようにした。

木々に囲まれた狭い境内は雪が敷き詰められ、入り口から正面にある小さな社までの道が丁寧に雪が掻かれていた。

その道を掻いたと推測できるスコップを手にした女性に近寄ると、「あけましておめでとうございます」

女性はもう一度丁寧に腰を折り、新年の挨拶をする。なぎさだけ挨拶を返し、

「えっと、ここの巫女さん……ですか？」

かなたとみずきの疑問を代表して聞いた。

女性の服装は白を基調とした巫女装束であった。それを身に纏う女性も大和撫子な美人で、このまま秋葉原に行ったら周囲に人垣ができそうな格好と容姿である。

「はい。そうですか」

巫女は即答した。

「でも、ここってこんな寂れてるし……巫女さんがいるなんて思わなかったです。……バイトですか？」

なぎさが失礼なことを聞くが、巫女は笑みを崩すこともなく、小首を傾げ、

「バイト？ ……そうですね。主にこの時期だけしか来てませんし、そうなるのかもしれないね」

「参拝しに来る人いるんですか？」

「今日はあなた達で初めてです。以前に参拝に人が訪れたのは二年前になりますね。昔は賑やかだったんですけど」

律儀に答えて、巫女は苦笑いを浮かべた。

なぎさはお礼を言い、賽銭箱へと駆けていく。かなたとみずきも巫女へと小さく頭を下げ、後へと続いていった。

巫女は三人の後ろ姿に眺め優しげな瞳を向けていた。

投げられた硬貨が縁にあたり軽い音を立て、賽銭箱に納められまた軽い音を立てた。

なぎさが鈴を鳴らして、三人は柏手を打って目を閉じる。

なぎさは願いを込めてしているが、かなたとみずきは形式上そうしているだけで何も念じてはいない。

数秒してなぎさが隣のみずきを見て、

「この裏だったっけ？ 昔、二人が隠れてネコ飼ってたのって」

「うん」

「別に隠してたわけじゃないが」

「見に行ってみよっか。せっかく来たんだし」

「何もないだろ」

小さな社の裏側は、林が広がっており、滅多にない参拝客もこちらまで来ることはないに等しい。

社の裏の床下は小学校低学年の児童ならば屈んで入りこめるくらいの隙間があり、かつて二人はそこで捨てネコを世話してた過去があった。ちよつとした秘密の思い出。

「ここ、今じゃもう入れないね」

しゃがんで社の下をのぞき込みながらなぎさは言う。

「ん。けど、昔もギリギリだった」

なぎさの隣でいっしょにのぞき込んで、みずきは懐かしむように見る。

「よく頭ぶついたりしたな。そういや」

かなたは頭を掻きながら思い出して苦笑する。

「あの頃、ほんと二人して怪しかったよねー」

なぎさはニヤニヤとした笑みを作り、

「お姉ちゃん、ウチ帰ってきたらすぐに出て行ってさ、かなちゃんもそうだったし」

「俺はみずきほどは行ってなかったが」

「かなたはすぐ飽きて、あんまり来なくなった」

「それをアタシが付けて行って、やっと秘密が判明したんだよね。知っててもアタシはあんまり近づけなかったけど」

「秘密にしてたつもりないが」

「けど、最近じゃ中々ない話じゃない？ 捨てネコを拾って人気のない神社で飼うなんてさ」

「そう？」

「確かに、近年じゃ珍しくはなりましたね」

優しく透き通った声に一齐に振り返って、一様に驚いて目をしばたたく。

「驚かせてしまいましたか？」

いつの間にやら近くにいた巫女は柔和な笑みを浮かべ、クスッと息を漏らす。

雪で足音は微かにしか聞こえないとはいえ、気配に敏感なかなたとみずきは全く分からなかったことに少々怪訝な瞳を向ける。

「やっぱり珍しいんですか？」

「はい。そうですね。昔はお二人みたく、家で買えない事情があった子供達が、子犬や子猫をここに連れてきて、よく世話をしていましたから。それはもう親のように、親友のように遊んだりして楽しそうでした」

巫女は過去のその映像を重ね合わせるように社を見て目を細める。  
「へえ。そうだったんだ」

三人は祖母の昔話を聞く孫のように巫女の話に耳を傾ける。

「あちらの林も賑わってましたね。子供達の遊び場でした。太い木の上に秘密基地を作ったり、虫取りをしたり。冬は雪合戦も……あ、

今でも夏になるとクワガタやカブトムシがたくさん集まってくるんですよ」

言って、巫女の表情が哀愁の色を濃くする。

「……今は寂しい場所ですけど……」

独り言のように巫女は呟く。

三人は巫女に倣うように林の方を見つめる。薄暗くて昼でも少しばかり不気味に見えた。足跡のない新雪が寂しげに奥へと敷き詰められていた。

パン、と巫女が手を叩いた。巫女の方を向くと優しい笑顔に戻っており、

「すいません。空気をしんみりさせてしまいましたね……こういうのKY？　っていうんでしたっけ？」

微妙に間違った巫女の言葉にどう返したらいいかと三人は悩み、「そうですね」

かなたがとりあえず空気を読んで投げやりに返した。

「はい。KYでしたね私。おわびといってはなんですが、おみくじを引いていきませんか？　タダにしますから。あと、他にもお守りやお札もありますんでよかったです」

「あ！　そだった。おみくじ！　おみくじを引きに来たんだったっけ」

なぎさは目的を失念していたかは分からないが、今思い出したという動作をして、社の正面へと駆けだした。

「元気のいい方ですね」

巫女はクスクスと笑い、巫女と二人はなぎさの後を追った。

おみくじがある場所は、境内の中央からやや離れた位置、バスの停留所とも見紛う大きな建物にある。

畳二畳ほどの狭いスペースに木のテーブルが置かれ、その上におみくじやお札にお守りがあり、料金を入れる木箱がある。社務所と呼ぶには狭く、無人販売所と呼んだほうがしっくりくる。今は巫女

がいるが。

「この御札ってどう使えばいいのかな……？」

「これですか？ これは除霊の言霊が印されていて、神棚に置いておくと家の周囲は霊が寄ってこなくなりますよ」

「お守りは一種類だけなんですか？ 合格祈願とかないみたいだけど」

「すみません。うちは学問の神ではないので……ですけど、このお守りは強い厄除けになりますので、きつとお役に立つと思います」

むう…となぎさは迷うように並べられた品々を眺める。隣で真摯に説明をする巫女は買って貰いたい思いもあるが、無理強いはずに微笑して待つ。ちなみに値段は高めだ。

中は狭いため、かなたとみずきは外でそのやり取りを黙って見ていた。

「……おみくじだけでいいです。すみません」

申し訳なげな表情でなぎさは言った。

巫女は内心残念がるが、顔には出さず、

「はい。分かりました。では、これを振ってください」

年季の感じさせる、木で作られた六角柱の箱をなぎさに渡す。

中には数字が書かれた細い棒が幾本も入っており、振ると、中央に小さな穴が開いた木の蓋から一本飛び出してくる。

「あ、七十七番。これは期待できそう」

なぎさは出てきた棒をひょいと摘み、彫られた数字を伝え、再び箱へと押しやり、みずきへと手渡す。

「七十七番ですね」

巫女は小さな引き出しが多数付けられた木棚に手を伸ばし、七十七番の引き出しから丸められたおみくじをなぎさへと渡す。

その間、シャカシャカとおみくじの箱を振っていたみずきが、

「七番」

と、淡々と出た番号を伝えて、箱をかなたへと回す。

「お姉ちゃんもよさげな番号だね」

かなたも二人と同じように箱を振り、出てきた棒の番号を伝えた。  
「三十二番ですね」  
地味な数字であった。

「じゃ、開くよ……せーの！」

なぎさの合図で一斉に引いたおみくじの中身を確認し合う。

沈黙。おみくじに書かれた内容に目を通している。パソコンの印字ではなく、達筆な手書きのため読みにくい。  
傍らに姿勢良く立つ巫女は微笑ながらも少し表情に緊張が見られる。

「どうだった？」

なぎさは真剣な表情と、抑えた声で聞いた。

「中吉」

「大凶」

揃ってアツサリとみずきとかなたは答えた。

「かなちゃん大凶なの!？」

「ああ」

「……ご愁傷様です」

なぎさは哀れみの表情をし、すぐにクスクスと冗談っぽく笑う。

「まあ、末吉とかよりは地味じゃなくてよかったが。珍しそうだし」

「なぎさは？」

みずきが聞くと、なぎさはヌフフフと不敵な笑い声を漏らし、

「じゃーん！」

合格通知を見せつけるかのように、おみくじを開いて見せた。

「大吉だよ。大吉。文字に力こもってそうだし今年はいいい年になりそう」

「よかったら、また来年もいらして下さいね」

「あ、はい。絶対来ます。ね、お姉ちゃん？」

「……………」

「お待ちしていますね」

「じゃ、帰ります。色々ありがとうございました」

「いえ。こちらこそ楽しい時間でした。ありがとうございました」

巫女は石段を下りていく三人の背中を、穏やかな笑みで、ほんの少し寂しそうに見送った。

「また、来年……」

そう呟いて、踵を返した。

「……ですが、一人は近いうちにまた気てくれるかもしれませんね」

## ひきこもり×アニメ

寒さも正月休みを終えたのか、深々と降り続ける雪が町を白く染めていた。

夜の闇に包まれ普段は閑静な住宅街も、雪かきに励む人々のスコップが地面をこする音が響いている。

その音の発生源に耳を傾ける人影が一つ。水澤かなたである。音の場所が近くではないと判断し、ゆつくりと隣家へ繋がる塀に設けられたドアを開ける。微かに軋む音だけしか立てず、素早い動きで勝手口へと来たところで、

「クシュン！」

クシャミをした。手で口を押さえていたため音はあまりしなかったが、かなたはさつさとドアを開けて中に入る。数メートルの距離とはいえ上着なしは寒かったと反省。

凍えた体をさすりながら、かなたは二階へと上がる。明かりも点けず階段は暗闇に包まれているが、我が家も同然に訪れているため躓くことも迷うこともなく、ドアの下の僅かな隙間から微かに白い明かりが漏れる部屋の前に着く。

いつものように一度ノックをする。

「はい」

今日は元気の良い返事が戻ってきた。  
ドアを開ける。

部屋には姉妹の姿があった。

「どうしたのー？」

スマートフォン

携帯電話から顔を上げ、人なつこい笑みを浮かべてるのが妹、相原なぎさで、



「……………」

ダブルスクリーン

無言で携帯ゲーム機から刹那くらいだけ視線かなたに寄越し、画面に落とすのは姉、みずきである。

感じさせる明るさは対照的な姉妹ではあるが、仲は良く、壁端に置まれた布団をソファーにしてくつつくように座っている。

かなたはパソコンが置かれた机の前にある椅子に座る。

「使っていいか？」

と、主語もなくかなたは訊く。

みずきは何をと聞き返すこともなく、

「ん」

顔も上げずに返すとかなたはパソコンの電源を点けた。この部屋で『使う』と言い表せる物は限られているし、その中でかなたが使う物も限られている。

パソコンが立ち上がると、かなたはマウスを操り、サイトへとアクセスする。

「何観てんの？」

なぎさは肩越しにモニターをのぞき込みながら聞く。かなたは答えない。無視してるわけじゃなく、答えはすぐに分かるとマウスを動かし、四角いウィンドウが新しく画面中心に大きく表示された。

鏡のようにかなたの顔を映す黒いウィンドウは数秒後、鮮やかな色へと変わった。

「アニメかー」

なぎさが流れる映像を観て言い、みずきの隣に戻る。みずきは顔をあげパソコンの画面を観て極僅かに首を傾げたがすぐに視線を戻した。

部屋は約二十五分くらいアニメの音が支配していた。みずきはイヤホン着用でゲームに没頭し、なぎさは何回かメールを返しつつモニターを眺めていた。

かなたが観ているアニメはミコミコ動画（動画配信サイト。デフォルメされた巫女がメインキャラクターになっている）で無料で配信されているアニメだ。

メーカー公認であり、地上波での放送終了後一定期間だけ観ることが出来るものである。

「いい所で終わっちゃったね。続かないの？」

なぎさが見終わった感想を漏らす。アニメは主人公がヒロインのピンチに駆けつけ、主人公の顔のアップで次回へと続いた。

かなたは椅子を回して後ろを向き、

「ないな。昨日始まつたらしいアニメだし」

「珍しい」

ゲーム機を閉じて、みずきは淡々と言う。

「ネットで観るの好きじゃないんじゃない？」

「あー、まあ、そうなんだが」

かなたは頭を掻きながら言った。

「どゆこと？」

なぎさは首を傾げる。

今はネットの動画投稿サイトを探せばいくらでも最新アニメを観ることが出来る。しかし、それを制作側の許可なく配信するのは違法であり、放送でも注意を促すテロップを流してはいるが一向に無くなる気配はない。

観る側は基本的に懲罰を受けることはないのだが、無論、まっとうな視聴方法とはいえない。グレーゾーンだ。

「え……かなちゃん、そんなの観てたの？」

アタシもだけど、と罰が悪そうに苦笑する。

「いや、観てたのは公式で無料配信されてる奴だから、問題ない」  
かなたが言うと、なぎさはよかったと小さく呟いて胸をなで下ろす。

「かなた、違法配信観るの嫌いだしね。別に捕まるわけでもないの

に」

「それはそうだが、そんな見方したら制作側にも失礼だと思うし、何より後ろめたい気分になるのがな」

「……赤信号を律儀に守るタイプ」

みずきは皮肉っぽく言った。

「もしかしてお姉ちゃんは平気で観たりしてる？」

なぎさは隣に細めた目を向ける。みずきは首を小さく振り、

「ん、私はそこまでして観たりしない」

「そっかーよかった。あんまりいいことじゃないみたいだし……」

「でも、それによつてDVDとかの売り上げ上がつてるとか見たことあるし、いいこともあるみたい」

「それって見てる側の理論武装だろ」

「ん、事実を言っただけ。私はよくないと思つてるし」

「上がったとしても無料で観るだけで買わない人も多そうだしね」

かなたは『そうだろうな』と言おうとしたが、段々と話がズレてきたと感じいて口を閉ざすと、少しの間の沈黙が訪れ、みずきが口を開いた。

「公式でも今までネット配信の観てなかったのに」

「それなんだが」

話題が戻り、かなたは小難しい表情をし、

「今期アニメ始まつてきたんだが……」

「そう。私、観てない」

かなたが答えよりやや遠回し気味から話を入れてきたことを、二人には分かったがそのまま進める。アニメをほとんど観ないなぎさは黙って話を聞く。

「秋アニメはそれなりに充実していたんだが、今期がな……」

かなたはわざとらしい大仰なため息吐く。それを見てみずきは察し、

「減ったんだ」

「ああ」かなたは頷き「四つが二つになった」

残念そうな面もちのあなたの言葉になぎさが首を捻る。

「あれ？ テレビ欄だとアニメそれなりにあったような」

「あなたの言ってるのは深夜アニメ」

「淡々とみずきは補足する。」

「そなんだ。さっきかなちゃんを観てたのもそうなの？」

「ああ。こっちだと未放送のやつだけど」

「へえ、結構面白かったよね」

「本放送は二話まで放送済みらしいけど、話題になってるみたい。」

「ネトゲ仲間が言ってた。だから観たの？」

「ネットの評価を見ないかなたは、」

「それは初耳だが、続きが気になる話ではあったな。観たのは……」

「何というかアニメ成分が足りないから……だな」

的確に言い表す語句が見つからず、アニメ成分という意味が分かるように分かりにくい言葉を用いてかなたは言った。

そして、相原姉妹の間に微妙な距離感が開いた錯覚にかなたは陥った。みずきからは普段より二割り増しといった冷めた目を、なぎさからはよく分からないと疑問の瞳を受け、かなたは気恥ずかしくなり、

「……いや、あ、アニメが見足りないなと思ってだな……暇だったのもあるし……」

しどろもどろにかなたは口を動かす。

「そう、分かった。アニメ足りないから。確か他にも無料配信のあったと思う。あとで調べてみる」

みずきは優しい口調で口元を僅かに綻ばせる。

「よかったね、かなちゃん」

柔らかく微笑んで、なぎさは言った。

「……ああ、そうだな。……ありがとう」

かなたは表情の消えた顔で機械的に礼を述べた。アニメ成分という言葉をからかわれたほうがまだ気が楽であった。



## ひきこもり×ゲーム

鮮明な水色の空を泳ぐように流れる白い雲。下に視点を向けると樹木の濃緑が一杯に広がっている。

鮮やかな景色の中で勇ましく空を駆けていくのはドラゴン。燃えたぎるマグマのような赤い硬質感のある皮膚、口には白く鋭い牙を覗かせ、背中から生えた一對の真紅の翼を大きく羽ばたかせる。

ドラゴンの背中に乗るのは精悍な顔立ちをした青年。白銀の鎧を身に付け、腰には装飾が施された鞘を帯びている。右手には抜き身の剣を持ち、反射で光輝いているようにも見える。

精悍な顔立ちがアップで映され、強い意思が垣間見える碧眼が遠くを見据えている。

ドラゴンが速度を上げて画面から消え、煌々とした太陽をバックに壮大なBGMが流れ、タイトルロゴがフェードインした。

「さすがに綺麗な映像だな」

新作ゲームのプロモーション映像が流れるPCの液晶画面を観て、水澤かなたは率直な感想を述べた。

「最新機種だし。普通だと思う」

かなたの隣、椅子に座りマウスを操作し見終わった映像を止めながら、淡々と言った。

「しかし、いつの間にかこんなにシリーズ重ねてたんだな」

少し寂しさを含ませた声でかなたは言う。

「？までならやれてたのにな」

「ん、結構中古で安くなった後に買ったんだっけ」

「発売日から三年後くらいにな」

価格はいくらだったか思い出しながら、かなたは壁際に置かれた

布団に腰を落とす。

「結構やり込んだよね」

みずきはパソコンにやる気のない視線を向けながらマウスを動かしつつ、懐かしむように振り返る。

「召還獣揃えたりとか。隠しボスとか」

なお、この物語はフィクションであり実在のゲームとは関係ありません。

「俺はエンディングまでしかやってなかったな……条件揃ったら効率良くレベル上げしたりして」

その方法を具体的に覚えていないかなたがみずきに聞き、正確に答えた。

「よく覚えているな」

「ん、たまに動画観たりしてるし、好きなゲームだから」

「あの頃はずっとやってたからな」

その作品を購入したかなたがさっさとクリアし、次にプレイし始めたみずきは、余程好みに合ったらしく睡眠時間を削ってまでゲーム機を占領し、暗いかなたの部屋に居座っていた。

二人の取り決めによりゲーム機の互いの部屋間への移動は厳禁なため、みずきがかなたの部屋に一日中居座り、イタズラ心が働いて先のストーリーを話しそうになるかなたはみずきの部屋で過ごすことが多い、まるで部屋を交換したような期間が十日ほど続いていた。

「俺は？が一番よかったな」

「？は十年以上前の作品である。」

「よくやってたよね。古い機種引つ張り出したりして」

「今はリメイクのあるからわざわざ出す必要はないがな。何周くらいしたか分からん」

「アレも結構やりこめたんだっけ。私はあんまりしなかったけど」

みずきは淡々と言いながら、動画サイトでゲームの映像を探す。

？の映像の中から一つ選び、流す。

「ああ、レアなのを集めたりもできたが、やっぱり低レベルクリア

とか目指すのが面白かった。そういう風に攻略できるようにもなってるし」

「その辺の三作だと私は？が好きかな」

みずきが言う三作とは同機種でシリーズが発売された三作品のことである。

かなたは険しい顔をし、思いだそうとする。

「キャラがいっぱいだったイメージしかない……」

「ん、そうだけど。あなたはクリアしたんだっけ？」

「……いや、崩壊後の世界までは記憶あるがクリアしたかは……」  
ラスボスやEDを思い出せずかなたは首をひねる。

「そこまで来たなら詰まる箇所もなかったと思うけど……」

苦い表情をし、かなたは前髪が鼻先まで伸びてきた髪を掻き、

「まあ、どうにも途端に興味無くなると放置気味になるんだよな」

「？も途中でやめてたっけ」

「ああ。みずきはクリアしたんだったよな」

「ん、一応は」

？までは起動できる機種がみずきの家にもあったが、？以降はかなたの家に来てみずきは熱心にプレイしていた。そのたびにかなたはみずきの部屋で主に暇をつぶしていた。

「？辺りまでは買えてたんだな……」

独り言のようにかなたは言った。

「？発売して三年……お小遣いもらってたんじゃないかな？」

みずきが言うとおり、かなたは当時年相応のお小遣いを毎月受け取っており、安定して娯楽を購入できていた時期でもあった。

「まあな。金銭面的には気にしなくて済んでいた頃だった」

「そう」

みずきの表情が僅かに曇る。

「私はなかったから、かなたがゲーム買ったりして結構助かったかな。PCもまだここになかったし」

みずきの場合は、不登校になり行動範囲が隣家までに狭まってか



らは小遣い制度が無くなった。

「ひきこもつてたとしても小遣いはあった方がいいみたいだな」

「……何かのひきこもり関係の本の受け売り？」

「そうみたいだが聞いた話。自由になるお金は少しだけは持たせたほうがいいらしい。その、おかげかは分からないが、俺も何とかは外出てるから効果あるかも」

「ん、そうかもね。……けど、私達が言っても我が侬なだけだと思うわね」

「……………そうだな」

部屋には？のエンディング曲が染み入るように流れていた。

## ひきこもり×RPG(1)

「カナタ」

透明感のある優しい声が耳に心地よい。

名前を呼ばれ、カナタは目を開けた。

だが、映るのは光点一つない暗闇だった。

右を見ても左を見ても暗闇。上下も暗闇。地に足が着いてるとい  
う感覚も曖昧で、まるで夜の海にたゆたうような妙な浮遊感。

覚えのない空間にカナタは戸惑っていると、目の前に眩しい白い  
光が出現した。

その光源によりカナタの姿が照らされた。

スカイブルーの瞳をうつとおしいくらいに伸びた前髪が覆う。毛  
先が無造作に跳ねズボラな印象を受ける青年だ。

「カナタ」

もう一度声がして、白い光は人型の発光体へと変化していき、徐  
々に女性の体のラインを形作り、そして強い光を放った。

反射的に腕で目をかばうカナタが光を止んだのを感じ、腕を放す  
と目の前に美しい女性が立っていた。

先ほどの白い光のように白い肌。端正な顔立ち。瑞々しい唇は柔  
らかな微笑を称えている。

カナタは神々しさを感ぜさせるその女性をマジマジと見つめてい  
た。主に身体を。

一糸纏わぬ体は、理想的なスタイルをしていた。マシユマロのよ  
うな色と柔らかさを兼ね備えていそうな胸に、くびれた腰。下半身  
のラインも美しかった。

なんとも扇情的な姿。肝心な部分は輝かしい金色の長い髪によつ  
て隠されているが、それでも目のやり場に困る姿ではあった。

「あなたに頼みがあるのです」

「……頼み？」

「はい。魔王の復活を阻止してほしいのです」

それから長々と語ったのだが、あまりに冗長だったため女性の話を要約すると、遙か昔世界を恐怖に陥れた凶悪な魔王の復活が迫っている。最近の魔物凶暴化は予兆である、と。

「何で俺なんかに……」

「あなたにはその昔に魔王を封印した勇者の血が流れているからです。勇者の力が奥深くに眠っているあなたの力が魔王の復活阻止に必要なのです」

「そうなのか」

「ええ、あなたならきつと復活を」

その時、女性の声が聞き取れなくなるほどのけたたましい音が響いた。頭痛を誘発させる甲高い音。それは鉄を鉄で叩いたような「時間のようですね。頼みましたよ　勇者カナタ」

耳元に麗しい顔を近づけ囁くと、女性は足下から溶けるように光の粒子へと変化していき、最後にニコリと笑って消えていった。

未だウルサイ音が響く。

名残惜しむ時間すら与えてくれないその音に、カナタは頭を掻きながらボヤいた。

「うるさいな……」

「うるさいじゃない！　さっさと起きなさい！」

「……んあ」

目が覚めて朝一番にカナタの視界に映るのは姉の怒り顔であった。その形相はまるで鬼のようで牙と角の幻想さえ見えそうなほどだ。

「まだ眠い」

鬼を前にしても動じず、そう言って再び眠りに陥ろうと目を閉じ

るカナタ。

「アンタねえ……」

カナタの姉、コハルの手に力がこもる。右手にはスープなど掬うのに使う鉄製のおたま。左手にはスープなどを作るのに使う鉄製の鍋。

コハルはその料理用具を頭上に掲げると、おたまの先で空の鍋の底を思い切り叩いた。何度も。

「なんだよ朝っぱらから……」

まだキンキンと痛む頭を押さえつつ、カナタは起きて居間へと来た。

「とにかく座ってなさい。今、用意するから」

カナタに木製のテーブルに着くよう促し、コハルはかまどに置かれた鍋から皿にスープを注ぎカナタの前へと差し出し、自分の分も注いでからコハルも座る。

カナタは不思議そうに乳白色のスープを眺める。別にスープにおかしい点があるからではない。

コハルがわざわざ朝起こしに来ることがおかしい。何かしらの行事がある日以外は滅多にない。しかし、今日は目覚まし秘技を用いてまで起こしにかかってきた。

幾ら首を捻ろうとも疑問は解消されないため、カナタはスープに口を付ける。姉の料理はかなりの腕前で美味だ。

「おかわりもあるからたとえ食べなさい」

やはりおかしいとカナタは思う。普段は自分に修行と表したむごい仕打ちをする姉が、優しい笑みを浮かべて優しい言葉を掛ける。顔は村一番の美女と称されるだけあって、誰もが表情をトロケさせるだろうが、内面をカナタは知るカナタは怪訝な目になる。

「今日は何かあったか？」

「あら？ 覚えてないの」

「何をだ」

「ま、覚えてないのも無理ないか。何も言っていなかったし」

コハルの適当な発言にカナタは普段から随分とイライラさせられている。

勿体つけるようにスープを一口飲んでから、フフツと笑い、

「カナタ。今日が勇者としての旅立ちの日よ！」

ズバツとコハルは指さす。

指されたカナタは夢でのどうでもいいと判断した出来事を思い起こしてから、

「勇者？ 俺が？」

「そ。アンタは今日から世界の平和のために旅にでるの。未来の英雄を弟だなんて姉として鼻が高いわ」

「俺が勇者なワケがないだろ。もし俺が勇者なら姉さんだって」

そうだろ、と言い掛けたが、ふいにコハルが悲しげに目を伏せたのを見て止める。

「残念だけど、ワタシは勇者にはなれない。女だからなれないとかじゃなくて……」

コハルは言葉に詰まる。この先を言うべきか迷っている、という表情だ。

「何でなれないんだ？」

カナタの碧眼を見つめ、コハルはゆっくりと口を開いた。

「アンタは捨て子だったから」

カタツとカナタの手から放れた木製のスプーンがテーブルに落ち音を立てた。

「……本当なのか？」

コハルはため息を一つ。

「本当よ。ワタシとアンタは血の繋がりのない姉弟。……今まで言えなかったのは、お父さんお母さんが早くに死んだのもあるけど、もし、アンタがそれを知ったら、ワタシへの想いが暴走すると想ったから……」

「は？」

「ワタシのこと好きなのよね。隠してたつもりだとは思っけど、わかってた。」

けど駄目。血が繋がっていなかったとはいえ、長年いっしょに暮らした姉弟なんだから、ね。障害が薄れたからって恋愛に発展とか考えちゃ駄目。

確かにワタシが美人なのはわかるけど……」

大げさにコハルは憂いた表情を見せる。

沈黙の妖精がパタパタと家を一通り飛び回ってから、

「姉さん」

「ん？」

「一回殴らせろ」

コハルは小馬鹿にするようにクスクスと笑い、

「ヘタレなアンタにできんの？ 部屋に籠もりつきりで体も怠けたアンタに」

「クッ……やってやる！」

その後、コハルによりカナタがこの家に拾われた経緯を語られた。とある人物が村に訪れて来るべき日まで幼いカナタを育ててほしいと頼まれ、村ぐるみで大事に育てようとなり、コハルの両親が親を買って出たこと。その時に勇者の剣とあるメモを渡されたことを、コハルは軽い口調で、そして次第に面倒くさくなり五分で説明を終えた。余談だがカナタは一発も殴れなかった。

「で、これがそのメモ」

金庫に厳重に保管されていた紙切れと、シンプルな鞘に納められた剣をコハルは取り出してカナタの前へと置く。  
カナタはまずメモを取り書かれた内容を見る。

『 年 月×日

かつて世界を闇に包みし魔王。その封印されし魂の慟哭が木霊する魔王の復活を阻止せんとする者。勇者の剣を手に立ち上がる勇者。神の美貌を持つ姉にひざまずき、姉に絶対の忠誠を誓う』

「……おい」

カナタはコハルを呆れた視線を向ける。  
読みにくいくらいに達筆に書かれた文。

しかし、一部分だけは明らかに書き足しと見て取れる文が、書いた人物の態度が反映されてるかのような大ききさで書かれている。

「今日がそれに書かれている日でしょ？ 大変なことが起こる予感がするわね。で、その勇者がアンタ。

その魔王の復活を止めるために旅に出ろってことだけど、先にもその下に書かれたことをすべきね」

悪びれる様子もなくコハルは言う。

「だが、これに書かれたのを見る限り、俺が勇者だと決まったわけじゃないだろ」

「それを証明するのがこれ」

と、勇者の剣に視線を落とす。

「多分ね、勇者じゃないと鞘から抜けないみたい。幾ら力入れて引き抜こうとしても駄目だったし」

「……何をしてんだか」

カナタは勇者の剣に持ってみる。するとコハルが驚いて目を丸くする。

「アンタそんなに力あったっけ？ それ、かなり重いのに」

「そうか？ かなり軽いが」

姉のわざとらしくはない驚きに、カナタは重さを確かめるように勇者の剣を鞘に納めたまま振るってみる。片手で軽々と、それこそ箸を扱うがのごとく軽快に振るう。

コハルは顎に指をあて考える仕草をし、納得する答えが見つかり艶やかに笑う。

「勇者だからこそ扱える剣ってことね。さ、早く引き抜いて見せなさい」

姉に命令されるのは不服だが、逆らうと肉体的にも精神的にも痛い目を見るのは過去の数多の経験から明白で、言われるがまま右手で柄を掴み、剣を引き抜く。

剣は抵抗もなく抜け、白銀の刀身が露わになる。カナタは掲げ持ちまじまじと見つめる。

「うん。勇者誕生の瞬間って場面かしら。ちょっと待ってて」

そう言ってコハルは二階へと上がっていった。特に変わったところもない剣を見ながらカナタは、

「全く実感がない。面倒くさい」

既に重さとどうやっても鞘から抜けないことを知る村人たちからしたら（全員で試した）驚くべき光景だったのだが、カナタは軽い剣を普通に引き抜いただけなため、勇者だと言われても疑念が残る。そもそも面倒くさかった。

カナタにとって魔王の復活という事態は、昼寝以下の重要度であり、世界がどうなるかと我関せずでなるようになればいいと思っている。

剣を鞘に戻し、今日はどう過ごすかと考えていると、姉が下りてきた。

「お待たせ」

そう言い、ドンと大きなリュックをテーブルに置く。

「なんだよこれは？」

「旅用の荷物よ。荷物。ちゃんとワタシが準備してあげていたんだから感謝なさい」



パンパンに膨らんだリュックには着替えやら、旅の必需品が詰まっている。見た目以上に入るスペースがあり、やくそう九十九個も余裕で入る優れ物だ。

「いや、俺は行くつもりは」

躊躇うカナタの頬にコハルの拳がのめり込む。平手じゃなく拳である。鉄拳である。凶器である。

その威力は絶大であり、カナタは吹き飛んで壁に叩きつけられる。「何弱気なことを言ってるの！？　ワタシは悲しい。そんな不甲斐ない弟に育てたつもりはないのに……」

コハルは口を手で覆い瞳を潤ませる。カナタは演技臭さをひしひしと感じながら立ち上がり、

「今すぐ行くとか急すぎるだろ」

「急を争う事態だったらどうするの？　三日後に出発して、あと一歩のところでもし魔王が復活してしまつて、二日早ければと後悔するのは嫌でしょ？」

「……そりゃ、まあそうかもしれないが」

「だからこそ今すぐ行く必要があるわけ。アンタはワタシの弟なんだから、きつとやれる！」

ニツコリ微笑んでコハルは拳でカナタの額を小突く。コハルからしたら軽くだったが、カナタはフラツいて倒れそうになった。

「……分かった。行けばいいんだろ」

こうしてカナタの旅が始まつた。

「やれやれ。ようやく行つたわね」

カナタが旅立ち閉じられた扉を見つめ、コハルは一息吐く。

「部屋に籠もりがちなカナタもいなくなつたし、肩の荷が降りた感じ。」

厄介払いもできたし、ワタシは英雄の姉になれるわけだし、一石二鳥。

世界を救った暁には勇者商品でも作って大々的に売りさばくこともできるわね」

フフフ……とコハルは不敵な笑い声を漏らしていた。

## ひきこもり×RPG(2)

仕方なしに旅に出ることになったカナタは隣町に続く道を歩いていた。

不本意ながらも魔王の復活を阻止するという大役を担つてるとはいえ、その方法が分からないため、とりあえず町へと行き情報を集めることにした次第である。

もつとも、カナタの住んでいた村は大陸の端に位置するため、どちらにせよ隣町のある方向に行くしかないのだが。

隣町のまでの街道は林を切り開いて綺麗に整地されており、空から見たら一面の緑の中に茶色の線がなだらかにうねりながら走り、村と町を繋いでいるのがよく分かるだろう。

人を襲うような獣やモンスターの姿もなく、カナタは散歩気分で街道を歩いていた。このままのペースなら日没までには余裕を持つてたどり着けると考えていると、壁に衝突した。正確にはそんな感覚があつただが。

「なんだ？」

ぶつけた頭をさすりながらカナタは怪訝そうに目を細めて前を見る。しかし、果てなく続いていそうな道しか見えない。

おそろおそろ手を前に出してみる。すると、壁に触れたようにひんやりとした感覚がしつかりとあり前方に何かがあるのが分かる。

カナタはぺたぺたと前方を適当にさわっていく。その動作はまるでパントマイムのようにであり、小箱でも置いとけばささやかな小銭くらいなら入れてもらえそうだが、生憎芸ではない。

確かにそこには透明な壁が存在していた。

「これは困った」

カナタは壁の前で立ち尽くしていた。

乗り越えようと飛び跳ねてみても高さが足りず、左右に隙間でもないかと壁伝いに移動して調べても徒労に終わる。

石を投げたら何故か壁をすり抜けて向こう側に飛んでいく。背中にさげた勇者の剣を引き抜いて壁に振り下ろしても空を切り裂くだけであった。

「仕方ない帰るか」

カナタの諦めは早かった。姉の罵詈雑言が待ちかまえるのが想像できたが、見えない壁があるため旅は頓挫。むしろ旅を続けられない恰好の理由ができて壁に感謝したい気分であった。

その気持ちを壁に一礼して形にし、踵を返すと人の姿が見えた。

「壁に困っているのかい？」

農具を肩に担いだ中年男性がカナタに声を掛ける。

「いや、特には」

「この壁は勇者だけが通れないようになっていいる魔法壁でな、壊すにはこの壁の魔力を越える魔法を放てないと無理だな」

「そうすか」

興味のない適当な相槌を打つカナタに構わずに、農夫は話を続ける。

「そついやあ、村外れに魔法使いが住んでたなあ確か。人嫌いで、滅多に村に来ることもない変人という話だ。行ってみたらどうだ？」

と、聞いてもない情報を与えて農夫は透明な壁の向こうへと歩いていった。距離が離れてからカナタは舌打ちをし、

「余計なことを」

カナタは来た道を引き返し、その途中、村にほど近い場所にある脇道に入った。

カナタはこの先に魔法使いの家があると噂では知っていた。滅多に姿を見せないことから好き勝手な憶測が広まり、村では気味悪がられている。

常に黒いローブを身に纏い、姿を見た者は不幸になる。

家に籠もり怪しい研究に没頭している。

興味本位で家に向かった人が帰ってこなかった。

など、村では本当か嘘かも分からない噂を作り出し、魔法使いが村に現れても遠巻きに見て声をひそめる。

しかし、カナタはそんな噂は全く信じてはいなかった。

村外れに住み滅多に姿を見せることない。

たったそれだけでよくまあ、マイナスなイメージを膨らませることが出来るものだと思えた目で見ている。

わき道の左右には街道より多少木々の密度が濃く、生い茂る葉が陽光を遮って、昼間だというのに薄暗い。そんな道を進んでいくと一件の家が見えてきた。

見た目はごく普通の一軒家だが、周囲の鬱蒼とした森のせいか、どことなく怪しい雰囲気漂っている。カラスが羽ばたき枝葉をガサガサと揺らした。

カナタはドアをノックする。

しかし、返事はない。

もう一度ノック。

返事はない。

もう一度。

耳を澄ませても物音一つしない。

留守を疑いつつもカナタは四度目のノックをし、

「お届け物です」

宅配便を偽ってみた。

やはり物音はなく、諦めて帰るか姉になじられる未来を浮かべ、重いため息を吐いた。

その時ガチャリと音がした。

鍵が外される音の後、木が軋む音を立てドアが僅かに開く。その隙間から女性が半分を顔を覗かせ、半開きな瞳でカナタを見る。手に荷物がないのを確認し、

「……………嘘吐き」

呪うような声でそう呟くとドアを閉じようとするのを、カナタは咄嗟に手で掴み止めた。

「ちよっと待ってくれ、俺は勇者だ」

カナタはそう名乗ると、少しの間をおいてからドアが更に開き、女性の全身が露わになる。

頭には先が尖った三角錐の形をした黒い鍔広の帽子をかぶり、そこから流れるような長い黒髪が膝下までであった。丈の長い漆黒の口ブが全身を覆い、むき出しの肩と顔以外はほぼ真っ黒である。

村では見ない格好をカナタはまじまじと見て、

「家の中でも帽子かぶってるのか」

そんな感想を言った。

「……………」

女性もまじまじとカナタの格好を見る。

ちなみにカナタの服装は、地味な色をした布の服にズボン、そして姉にその方が勇者らしいと無理矢理着けられたボロいマント。そして背中には勇者の剣。

そんな一目見ても、勇者じゃなく旅人が精々のカナタに

「……………入る？」

女性は呟くような声でそう聞いた。

「確かに特定の人物や種族にだけ反応する魔法壁を形成することは可能。けど、強い魔力がないと難しいし、……………そもそも貴方が勇者だという話は疑わしい」

家にあがったカナタは、ここに来た事情を説明すると、女性は淡々と見解を述べた。女性はミズキと名乗った。

「それは俺にも説明しがたい。流されるままに勇者だということになった感じだし。……………証明になるか分かんが」

と、カナタは背負った剣を外してミズキの前に置く。何の変哲も

なさそうな剣をミズキは石ころでも見るような無表情を向けてから、剣を掴み持ち上げようとする。

しかし、一ミリも剣は持ち上がらなかった。

少し沈黙した後、ミズキは両手で持ち上げようとしたが、剣はまるでテーブルにくっついていてるかのようには持ち上がることはない。

確かに勇者以外の者には、見た目以上の重量があるが、コハルは重いと言いながらも片手で持つてはいた。コハルの腕力は一般の枠を越えているため参考にはあまりならないが、全く持ち上がらなかったのはひとえにミズキの力が人並み以下だからである。

「……勇者だというのは少しは信じてもいい」

「そうか」

カナタが剣を軽々と持つて背中に戻すのを、ミズキは不思議そうに見ながら、膝の上の黒猫を撫でる。

「で、その魔法壁はどうにかできるのか？」

「解除の呪文か、魔法をぶつけて破壊すればいいけど……」

「じゃあ、何とかしてくれ」

ミズキは黒猫に視線を落とし、考える間を開けてから、

「私は行かない」

下を向いたままそう言った。

「いや、無理でもいいから一度やってみてくれないか？」

カナタは必死に頼み込む。

できたら無理な方がいい。それならば旅を止めざるを得ない理由として姉を納得させることができる。もっとも鉄拳の数発は覚悟しなければならぬが。

「……私は、無理」

しかし、ミズキは震えた小さな声で拒否する。

「何故だ？」

「……」

「ミズキは人が苦手なのよ」

カナタの質問に答えたのはミズキではない第三者の声だった。

カナタが怪訝な表情で周りを見渡していると、俯くままのミズキの膝から軽やかに黒猫が飛び出しテーブルに座る。

艶のある漆黒の毛色に満月のような金色の瞳。細く長いしっぽがテーブルの端からダラリと垂れる。

唐突に目の前に座した黒猫とカナタの視線を合う。

「こんな場所で人と接することなく過ごしてたから、いつの間にか苦手になった。というわけ」

少女といった風なその声は確かに目の前から聞こえていた。けれども、ミズキの声とは違うし、口は動いていない。

そして、黒猫の口が動いている。それはつまり、

「猫が喋った」

カナタの口調からは驚いた様子はなく、実にあっさりとした反応だった。

「もう少しは驚いてくれてもいいんじゃない……まあ、いいわ」

黒猫は呆れたように言い、

「ウチはナナ。ミズキの使い魔をしてるの。ま、主従関係は薄いけど」

「使い魔？」

「魔道士が使役する幻獣」

淡々とミズキは補足する。

「そゆこと。使役って言い方は好きじゃないけどね」

「へえ」

やはりカナタの反応は至極薄い。

「急になに」

ミズキはナナに言う。

「いい機会じゃない。これを機に人と関わるのも悪くないでしょ？」

「……勝手に決めないで」

ナナはお手をするように前足でカナタを指し、

「だったら何で彼を家にあげたの？」

「別に……何となく」



「興味があつたんじゃない？ 勇者に。お母さんが言っていた昔話に出てきた勇者に」

ミズキは亡くなった母親のよくしてくれた話を思い浮かべる。勇者とその仲間たちの物語。仲間には魔法使いもいて、自分を投影して物語に浸ったりもした。

「行ってみるのも面白いんじゃない？ 力試しにもなるだろうし」

ミズキは思案する間を経て小さく頷く。

「ん、ナナが言うなら……行ってみてもいいかも」

「決定ね。長い旅になるかもしれないし、準備はしっかりしなきゃ駄目よ」

「分かつてる」

そう言い、ナナの喉をくすぐるように撫でながらミズキは穏やかな表情を浮かべる。ナナもまんざらでもなさそうに目を細める。

蚊帳の外といった空気を味わうカナタは頭を掻きながら、

「……なんで旅に出ることになってんだ……」

やる気皆無な勇者に人嫌いの魔法使いに喋る黒猫。という一行は隣町への道を歩いていた。

カナタは欠伸をかみ殺しながら。

ミズキは黒いトンがり帽子を目深に被り地面に視線を落とす。

ナナはちょこちょこ。

特に会話もない時間が数十分過ぎた頃、カナタは壁にぶつかった。透明な勇者専用魔法壁である。

ミズキとナナが振り向いて、カナタが壁に行く手を阻まれてる姿に気付いたのは、五十メートルほど過ぎてからだった。

「これね。ミズキ、分かる？」

壁のある部分に前足を伸ばし、ナナは傍らに立つミズキを見上げる。

「ん、高い魔力の流れ。高度な魔法式を用いている」

「じゃ、消すのは難しいのか？」

「簡単」

即答するミズキに、カナタは内心残念がる。

「多分、魔物が張ったものでしょね」

ナナは二、三步後退しつつ魔力を分析した推測を述べる。

「魔物が？」

カナタの知識としてある魔物というのは、獰猛な野獣といったもので魔法を扱うとは聞いたことがない。

「魔法を扱える魔物はそんなに多くはないけどね。そういう魔物は知能も発達してて人の言葉を喋ったりできるみたい」

「そうなのか」

「何よその目？ まさかウチを魔物だとか思っているわけ？」

「違うのか？」

冗談っぽく口元を緩め首を傾げるカナタに、ナナの毛が逆立ちフーッと威嚇するような息を吐く。

「ウチは幻獣よ。げ・ん・じゅ・う！ 魔物なんかといっしょにしないでほしいわね」

「悪かった」

カナタは素直に頭を下げる。しかし幻獣でも魔物でもどちらでもよく、単に喋る黒猫と思うことにした。

パリン。

と、ガラスが割れるような音がした。

「終わった」

先端に海を思わせる蒼く透き通った水晶が付いたロッドを壁に向けミズキは、淡々と解除を終えたことを告げた。

「早いな」

カナタは確認しようと手を伸ばす。壁に当たることはなかった。

「ミズキならこのくらい赤子の手を捻るくらい楽なことよ」

「凄いんだな」

「別に……」

俯いて帽子の鍔で表情を隠し、ミズキは踵を返して早足で先へと行く。

「照れてる照れてる」

楽しそうに笑いながらナナは後を追う。

カナタは一度村の方向を振り向いてから、

「長くならなきやいいが」

そう愚痴のようにこぼして、二人の後を追った。

少しして、カナタに魔法壁のことを教えた農夫と会った。

「どうやら、通ることができたようだ。そちらの魔法使いがやったのかな？」

ニヤリとした目を農夫はミズキに向ける。舐めるような目つきだが、ミズキは怖がることもなく虚ろげな瞳で農夫を見る。

「アレを解除できるとは大した魔力だな。そうじゃないと面白くない……ヒヤッヒヤッヒヤッ！」

農夫は奇声のような高笑いを発した。明らかに声質が変化してるが、二人と一匹は冷ややかな瞳で見ている。

「驚いているなア？　そうさ、農夫というのは仮初めの姿でなア……目ん玉ひん向いてよく見ているがいい！」

沈黙を驚きと解した農夫はそう叫ぶと、まず人間らしい色をしていた肌の色が気味の悪い藍色へと変色し、耳が鋭角になっていく。口元には二対の鋭い牙が覗き、背中からは服を突き破って漆黒の羽が生えた。

その異形な姿はまさしく魔物に分類される姿であった。

「オレはシルヴァ。魔王様直属の部下だ。聞いておののくがいい！」  
名乗ってシルヴァは不敵な笑みを浮かべ下品な声で高笑う。

特に驚愕もなく、三人は小さな輪になりヒソヒソと話し出す。

「どうするべきだここは？」

「驚いてあげといてもいいんじゃない、可哀想だし」

「……任せる」

「俺がするのか？」

輪が解け、カナタが代表して一歩前に出た。

「あー、まさかあの農夫が魔物だったとはー、こいつは驚いたなー」  
それはやる気の欠片も感じない棒読みの台詞であった。

「わざとらしいなオイ！」

「驚けという方が無理な話だろ」

「何故だ？ オレの変化は完璧なはずだ」

「いや」

カナタはシルヴァの頭を指さし、

「その頭の触覚、全く隠れてなかったし」

「え？」

ヒューと木枯らしのような一筋の風が吹き抜けた。

農夫の姿をしていた時から、頭のデコから伸びる二本の触覚が丸見えだった。この世界にそんな人間がいるというのはカナタの記憶の中にはない。

「……………見破っていたとはな。さすがは勇者の力を持つものといったところだなア……………ヒヤハハ」

苦し紛れにシルヴァは言うが、声に勢いが無い。魔物の中でもエリートで自身もそれを誇りに思い生きてきた彼は、人間変化のミスにかなりのショックを受けていた。

「勇者は関係ないな」

「ウチも分かってたし」

「……………そっちのミス」

冷静な指摘にシルヴァのエリートとしてのプライドが傷つけられたが、そこはエリート。咳払い一つで落ち着きを取り戻し、  
「勇者を村から出すなというツマらん任務。暇つぶしに、魔法使いを連れてこさせたが、まさかオレの魔法壁が壊されるなんてな。」

ま、魔法壁なんざなくても、オレがここを通さないがな。ヒヤッ  
ヒヤッヒヤッ！」

「死亡フラグ」

ミズキは呟いた。

「死亡フラグ？」

振り返ってカナタは訊く。

「……ん、古い本で読んだけど、ああいうキャラがああいう台詞言うとか、死ぬ」

おざなりな説明にカナタはよく分からず首を捻る。その説明を聞いていたシルヴァは自身溢れる高笑いを発し、

「オレが死ぬだア？ とんだ戯れ言だな。死ぬのはオレじゃなく、お前らだろう？      まずは貴様からだなア！」

と、いきなりシルヴァは鋭利な爪の生えた人差し指をカナタに向けた。

カナタは身構えて剣を抜こうと背中 hands を回すよりも早く、シルヴァの指先から発された野球ボール大の赤い光弾が命中するほうが先だった。

「……クッ！」

光弾はカナタの胸に直撃し、それこそ剛速球を受けた衝撃によりカナタは後方へと吹っ飛ばされ地面に体が叩きつけられる。

カナタはせき込みながらも起きあがると、片膝を付き顔を上げた。  
「結構丈夫じゃない。アレを直撃して立ち上がれるなんて」

ナナが感心したように言った。

まだ、姉の鉄拳の方が凄まじい。カナタはそんなことを思いつつも、身体中の痛みに顔を歪める。

「やるじゃねえか。だが、もう一発      今度は加減はしないぜ！」

ヒッハー！」

シルヴァの指先がカナタを捉え、再び赤い光弾が生まれる。しかし、すぐには放たれず少しずつ光弾の大きさが増していく。

ピンポン玉。

サッカーボール。

大きさは更に増していき、シルヴァの体半分を覆い隠す大きさになっていく。

しかし、カナタは光弾の発射軌道からは逃げなかった。いや、逃げきれなかった。先のダメージが体の自由を奪っていた。

片膝を付いた姿勢のまま、カナタはまだ大きさを増していく血のように赤い光の球を見る。これに当たればひとたまりもない。

覚悟を決めるしかないか。

そう心中で呟き、カナタは目を閉じる。すると不思議な感覚がした。背中から何かが語りかけてくるような。カナタは無意識に勇者の剣に手を掛ける。

触れた瞬間温かい感触がした。

不思議と力が溢れてくる。

体の痛みも消えた。

いけるかもしれない。

危機的状況で湧く勝利への確信。カナタは柄を強く握り、鞘から光が漏れ出している勇者の剣を引き抜き

「フレア」

風に掻き消えてしまいそうな小さなミズキの言葉。それを聞いたシルヴァは一瞬小首を傾げたが、すぐにシルヴァの表情は驚愕に染まる。

「なっ……無詠唱で」

それがシルヴァの最期の言葉となった。

真紅の炎が一瞬でシルヴァを包み込み、メラメラと朱く燃える大

玉の中へと消える。

この時点で内部は超高温になっており、普通の生物は灰しか残らない。

だかさらに、追い打ちとばかり大玉の周りに無数の炎の槍が生み出され、まるで箱に剣を突き刺して脱出するイリユージョンのように四方から串刺しにする。

そして、ウニのようになった炎の大玉は風船のように膨張していき 爆発した。

のどかな草原に轟音が響きわたった。

爆破が生み出した衝撃波により木々の葉が吹き飛び、むき出しの枝をさらし、炎の欠片が雨のように降る。幸い木々には届いていないが、カナタの位置には届き、慌てて範囲外まで後ずさる。

ミズキとナナは防護魔法壁により炎は届く前にかき消されている。

シルヴァのいた場所には黒く焼けた地面と、焦げた臭いしかなかった。

「何だ今の魔法は？」

まだフラツク足取りでミズキへと近寄り、早速カナタは訊ねた。

剣の光は治まり、妙な感覚もなくなってしまうている。

「フレア」

それが何なのか聞きたいとカナタがツツコむ前に、ナナが代わりに答える。

「炎系呪文の一種よ。ミズキのオリジナルだけどね。魔法ランクだと上級くらいの威力になるかしらね」

「あれが上級なのか」

カナタが見たことのある攻撃呪文というのは、手のひらサイズの火球を飛ばしたりする基礎魔法だけで、上級の派手で威力も絶大な

のを見たのは初めてだ。

「そ。上級呪文を扱える魔道士も数少ないんだけど、無詠唱で放てるのはもつと少ないの」

「意外と凄いなだな」

ミズキを見て何気なく言った感嘆の言葉に、心外そうな表情になりミズキは鋭さのある瞳で、

「基礎呪文しか扱えない奴が魔道士を名乗るのはおこがましい」

淡々と言って、先へと歩いていく。

カナタは黒い髪が覆う背中に、

「回復魔法は使えるか？」

ジンジンと痛む身体を癒してもらえるか訊くが、

「使えない」

ミズキは振り返らず答えた。

「そうか」

カナタは仕方ないと、やくそうがあつたはずと背中のリュックを抱え持ち、中身を探りながら歩き出す。

空に浮かぶ太陽を見て、街まで日暮れには間に合わなそうだと思いつつ。



## ひきこもり×緘黙

「かんもく？」

水澤かなたは初めて聞く言葉だと顔を歪めて疑問符を浮かべる。

その、かなたには聞き馴染みのない単語を持つてきたのは、幼なじみである相原みずきで、部屋に来て早々に言ってきた。

「知ってる？」

ベッド端に腰掛け、みずきはもう一度聞いた。知っていても知らなくともどちらでもいいという感情の乏しい瞳でかなたの答えを待つ。

みずきがこのように唐突にかなたの知らないキーワードを言うてくるのは、たまにある。即座に白旗を挙げ答えを問うのは簡単だが、四六時中暇であるかなたはとりあえず考えて一応は自分の答えを出す。

「完黙。完全黙秘の略のことか？」

刑事ドラマで耳にしたことがあり、かなたの脳内辞書にある“かんもく”という単語はこれしかない。

しかし、答えは すら貰えないようでみずきは冷めた瞳をし、

「予想通り」

かなたがどんな返答をするか予め浮かべていたみずきは、一言一句ピッタリだったことに内心勝ち誇るとともに、予想を裏切らないつまらない答えだったことにガッカリした。

その瞳からみずきの心を少し読めたかなたは、別の答えを幾つか言ったがてんで面白くもない答えであつたため割愛する。

「……………いったいなんなんだ、かんもくってのは」

観客から失笑しかもらえなかった芸人の気分を味わったかなたは、降参とみずきに聞く。

「場面かんもくしょう」

淡々とみずきは答えを言った。

だが、答えを聞いてもあなたはピンと来ない。

「場面で完黙……取調室だと何も言わないが、留置場だとペラペラ吐くのか」

もちろん漢字が違うのだと分かっててかあなたはボケている。みずきは付き合いきれないと小さくため息を吐いて、

「かんもく。糸へんに減るって書いて緘。もしくは普通に黙る。それで緘黙」

あなたは頭の中で漢字を組み立てる。

初めて見る漢字であり、熟語であった。試しに携帯電話を手に取り、打って変換を試してみるが、中々見つからずかなり深い位置に埋もれるように『緘』があった。

「全く知らん言葉だな。……しょうは病気とかのアレか？」

「ん、骨粗鬆症とかのしょう」

早口言葉でもよく見る症状を用いてみずきは説明する。呟くような言い方ながらも囁むこともなく、しっかりと聞き取れる声である。

「何故、こつ いや、なるほど。場面緘黙症か」

滑舌に自信のないあなたは、何故骨粗鬆症を例えにしたか聞きたかったがやめ、頭の中で言葉を組み合わせ完成させた。

「で、その場面緘黙症ってなんだ」

みずきは言葉を整理する時間をやや置いてから、

「無口キャラってどう思う？」

「は？ なんだいきなり」

あなたは苦笑をつくる。何故、緘黙からキャラ討論に移行しそうな話題になるのか。

しかし、みずきからしたら話題からは外れてはおらず、入りやすい話から入ったにすぎない。ど真ん中直球でパソコンで調べた緘黙の説明を機械的に読み上げるがごとく話してもよかったが、あなたに理解しやすいような話題から入るに至った。

「綾波レイ、最近だと長門みたいなキャラか？ いいんじゃないか」  
答えてどうなるかは分からないが、とりあえず話の流れはなるべ

く切らないのがあなたである。流されやすいともいう。

「ん、アニメだと割と人気あるタイプだと思うけど、現実にといたらどう？」

あなたは首を斜め上に向け想像する。

高校生を想像したが、その経験が皆無なためアニメでの情景で補完し、更に都合の良い妄想まで混ざり、教室の窓際で読書に耽る寡黙な少女を思い浮かべ、

「いいんじゃないか」

「……どういう想像したかは知らないけど、そういう無口な人って何でそうしてるかとか考えたことある？」

「ほとんどないが……人が苦手とか、感情を出すのが下手だとか、有機アンドロイドとか、そんな理由じゃないか？」

二つの理由はまんま他人を前にしたあなたであり、自分の経験則から述べただけだ。最後はいわずもがなアニメキャラである。

「ん、そういうのもあった……けど、とにかく、喋らないんじゃないくて、言語能力はあるけど喋れないのが緘黙」

ずいぶんと強引かつ曖昧な纏めをみずきはした。当然あなたにはほぼ伝わっておらず首をひねる。

「無口キャラが緘黙ってことなのか？　喋れないってのは声が出せないって意味か？」

みずきは自分の説明下手にもどかしいさを覚え、どうしたら分かり易いかをもう一度考え、言う。

「精神的な症状らしいから説明しにくい。うつ病とかの類だって、経験ない人にはつらさが理解しにくいみたいな感じ。あとで自分で調べて」

と、みずきはあとはウィキペディアに聞けと丸投げし、

「多分、経験から言っただろうが上手くいえると思う」

「経験？」

「私も緘黙だった……かもしれない」

「かもしれない、か」

「そう。私も最近知ったから」

みずきが場面緘黙症について知ったのは言うとおり最近の話になる。

きっかけは以前の話にも出てきたひきこもりサイト内で、緘黙のことを目にしたからである。

そこでは僅かな会話の流れでしかなかったが、もしやと思い調べた結果、みずきは自分が緘黙だった可能性が高いという結論に至った。

現に、緘黙症の認知度は限りなく低く、教師にはおとなしい子として認識され、自宅の家族の前では普通に話せるのもあり、際立つて問題視されることもなく年月が過ぎ行くことも多い。

歳を重ねるにつれ症状が緩和されてくケースも多いため、本人も自分が話せない訳を緘黙だと知ることも少ない。

「私は学校じゃ話せなかった。ほとんど。誰かと言葉で会話したことはなかった。国語の教科書はなんとか読めたくらい」

「そうなのか」

かなたの反応は至極薄い。

かなたから見た昔のみずきのイメージは内気であり、活発という言葉からは対極に位置するような性格であり、今とそれほど変わらない。

友達がいたという話も聞いたことがなく、なので学校じゃ全く喋らないと言われてもさしておかしいとは思わない。

むしろ、活発で談笑によく加わっていたと言われたほうが意外性があって驚いただろう。

「小一の頃からそうだった。どうしてもだか上手くは言えないけど、喋るのが怖かった……そんな感じ。まあ、元々明るい性格でもなかったけど」

言って、昔のさして楽しくない記憶を思い起こしたせいかみずきは悲哀が混じった自虐的な微笑を浮かべる。

「そついや、みずきが話してる姿見たことない気がする。姿自体あんまり見かけたこともなかったが」

一学年違うかなたはあまり教室から出歩くこともなく、みずきを見かけても声を掛けることもなかった。もし、声を掛けたとしてみずきの変化に気が付けたかは分からない。かなたの性格上、返事がなくとも特に気にすることもなかった可能性が高いが。

「それに、学校や特定の場でしかそうならないから場面緘黙って呼ばれるみたい。家だと大丈夫だったし」

「ああ。普通に話してたな」

その頃から二人の間柄は今と変わりなく、滅多に寄り道せず帰宅しては互いの家を行き来しインドアな趣味に興じていた。

「うん。だから、自分がすごくおかしいとは考えてなかった。単に人見知りが激しかっただけだと思ってた」

「今は人すら見ない生活になったな」

「友達もできなかった。喋らないから当たり前だよ、イジメに合わなかっただけマシかもしれないけど。……そして、気付いたらこうなってた」

「終わりか？」

みずきは頷く。

「で、その緘黙症が原因でこうなったと」

みずきは首を振り、弱々しい声で、

「一因ではあると思う。……他にもいろいろは……」

「……だな」

かなたはそれだけ言って部屋は静寂に包まれる。

過去、ひきこもりに至った要因についての話はしない。

それはいつの間にか互いに一言も交わすことなく、暗黙の了解が成立していた。

そもそも二人にはひきこもりとなった経緯を上手く伝えられる自信がない。

一般的な印象だとイジメが第一に挙がるだろうが、そうではない

ひきこもりも多い。むしろ、深く関わってない方が長期化する傾向がある。

「緘黙の人がひきこもりになることは少ないみたい」

少し時間を置いてから、みずきは言う。

「目立つ行動、つまりは不登校になるケースは少ないみたい。聞いた話だと長くひきこもってしまってる人もいるみたいけど」

かなたは『一人は目の前にいる』と茶化したくもなったが、空気を読んで続きを待つ。

「……多分、そういう人はかなり少ないと思う。なんかそうだと考えると……緘黙じゃないかもしれないのかなとも思うし……」

不安げに眼を伏せたあと、かなたの言葉を催促するかのようによ、やや上目遣いでみずきはかなたを見る。

かなたは髪を掻き、面倒くさそうな表情を作る。

「別にどっちでもいいんじゃないのか。今はそれより酷いひきこもりだし。緘黙とか無関係な生活してるだろ」

随分と適当な答えだった。励ましにもならず、自分も含まれるひきこもりを酷いと評し自傷してしまっている。

だが、みずきにはその言葉がどんな優しい言葉よりも安心することできた。

「というか、今はどうなんだ？ 緘黙なのか？」  
ふとしたかなたの質問に、

「ん、分からない。他人と会わないし……今だと話せなくても緘黙なのかヒキだからか判別できないかも。……緘黙の上にひきこもりのステータス異常が上書きされてるみたいな感じ」  
「なるほど」

ゲーム好きな人しか分かりにくい例えだ。

「けど、何故そんなことを話したんだ？」

「別に、なんとなく」

「ここでそっぽ向けばツンデレっぽかったのにな……」

「……………」

「完黙か」

ひきこもり×緘黙（後書き）

場面緘黙について間違ってる点などがありましたら  
ご指摘ください



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4106p/>

---

ひきこもり×ひきこもり

2011年11月12日03時13分発行